
元一般人の勇者は世界を救う

シェイカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元一般人の勇者は世界を救う

【Nコード】

N9101V

【作者名】

シェイカー

【あらすじ】

普通の高校生だった主人公原 康太はひょんなことから自分がプレイしていたオンラインゲーム、『アザーワールド』に行くことに。特に争いもない平和な世界で彼は気楽な生活を始めるつもりだったんだが・・・

滅びかけの国を救う為に頑張るお話。

タイトル変更しました。

11月23日祝50000PV突破！

12月4日祝100000ユニーク突破！

元一般人の勇者は世界を救う 設定一覧

ステータス

HP

MP

アタック

インテリジェンス

テクニック

スピード

物理防御

魔法防御

ラック

の9つからなり、ラックはクリティカルヒットや日常生活の運に左右する。

貨幣設定

小銅貨…10円くらい

銅貨…100円くらい

小銀貨…1000円くらい

銀貨…10000円くらい

金貨…50万円くらい

時間設定

3時～7時 水の刻

7時～11時 火の刻

11時～15時 風の刻

15時～19時 地の刻

19時～23時 光の刻

23時～3時 闇の刻

それぞれの刻によって対応した属性の魔法が強化、劣化する。（例・水の刻だと水魔法が強化、炎魔法が劣化）

◆人物紹介◆

カイル：本名は原 康太。Lv73の剣聖でテンションが上がると普段の（どちらかと言えば）落ち着いた態度が一変する。愛刀五月雨はリージアで鍛冶屋を営むバーネットからもらった両刃の大剣。ちなみに16歳の高校一年生だった。

メイメル・フォン・エスペリア：ヒロイン。エスペリア第二王女で低レベルながら膨大な魔力を生まれながらにしてその身に宿す。料理、洗濯など家事もそつなくこなし、カイルに積極的なアタックを

試みるがことごとく失敗しているかわいそうな子。ちなみに17歳。

スイ：エスペリアの北にある谷の底に封印されていた狼。Lvは150に達するが年齢による衰えてLv90程度の能力。年を取ってるせいかじじい言葉でしゃべり、メイメルの魔力にほれ込みメイメルの専属護衛兼契約者になった。ちなみに好きな食べ物はイチゴのケーキ。

メール：エスペリア軍に所属する女剣士。クトラ族特有の緑髪をもち、気が強い。メイメルと同じくカイルに好意を抱く。

バーネット：リージアに店を構える鍛冶屋。一見こわもてで人付き合いが悪いように見えるが実はきさく。自分の認めた人にしか自分の武器を譲らない。

レイモンド：リージアの王になってまだ1〜2か月。カイル達と協力して前国王で実の父を暗殺した。滅亡しかけたエスペリアと同盟を結びエスペリアを救った。

シンシア：カイルがまだ高校生だった頃のパーティーメンバー。敵味方見境なく魔法をぶっ放す通称「笑う殺人兵器」で見た目は女っぽいがれっきとした男。カイルと会うまでは地下で細々と暮らしていたため離宮暮らしがうれしい。

プロローグ（前書き）

読み返したら神様がキモかったので書き直してみた。

プロローグ

オンラインゲームが趣味のごく普通な高校生。

それが俺、原 康太だ。

特別な能力なんて無いしイケメンでもスポーツ万能でも頭脳明晰ってわけでもない。

そんな俺でも言いたい事はある。

「ここどこ？」

目の前には雲の上に神殿が立っていて天国のようだ。

「ってなんで雲にのれてんの！？あとあそこの人輪っかあるし！」
まさかホントに天国！？俺いい事してねーぞ！？

・・・いや落ちつけ俺。冷静にここまでを振り返れ。
二度ほど深呼吸。ふーっ！ふーっ！・・・ほへえ・・・よし。

「回想シーン入りまーす」

そう宣言して俺は記憶を掘り返し始めた。

車にひかれて目が覚めたらここにいた。

びっくりするほど回想シーンが短い。

。入れても18文字ですよ皆さん。

ぼーっと自分で自分にツツコミ入れてるといかにも神様って感じの人が近づいてきた。

「お主が原 康太かね？」

「え？ああはいそうですけど……。ここはどこなんですか？天国ってヤツですか？」

「理解が早くて助かるぞい」

いや、ぞいってなんでそんな笑顔なんすか……。

「という事は俺は死んだけど何か目的があって神様の元に呼ばれたってことですか？」

「うむ……。その件なんじゃが……」

ごくりっ

「間違えて殺してしまったのじゃ」

……。いやいやいやいや！間違えたってそんな理由で俺死んだの！？間違えて命一つ奪うってひどくね！？

あとそのテヘッ☆見て吐きそうなんですが！

「神様にも失敗の一つや二つあるわい」

間違いのレベルがおかしい

「でじゃ……。間違えて殺したからにはお主にもう一度現世に戻ってもらうと思ってな」

それはありがたい。

「ただ現世のお主の体はもう火葬されて無いのじゃ……え？」

「なのでお主には新しい体を与えて異世界で生きてもらうとおもっとなるんじゃが、どうじゃろうか？」

異世界……。いいね異世界……。エルフとかエルフとかエルフとか。

「その世界エルフとか異種族も住んでるんですか？」

「もちろんじゃ。魔法もあるぞ。というよりお主も知っておる世界じゃ」

「え？」どゆこと？

「お主がプレイしていたオンラインゲーム『アザーワールド』にそのまま転生じゃ」

「レベルとかスキルは？」

「お主がプレイしていたキャラをそのまま引き継ぎじゃな」

解説・・・アザーワールドとは

20××年開始されたオンラインゲーム。専用の機械を使う事でフルダイブを可能にした。

ぶっちゃけるとS〇〇みたいな感じ。

結局天国での話をまとめるとこんな感じだ。

- 1、間違えて殺された
- 2、おわびに異世界で第二の人生を
- 3、肉体は俺がプレイしていたキャラを使用

らしい。まあ元の世界に好きな人がいたわけでもないし異世界に行くことへの違和感とか拒否とかは無い。

それよりかわいい子がいるとか魔法がつかえるとか男子なら一度は憧れる物へのワクワクが止まらねえ。

「よし・・・転移の準備は整ったぞい。さっそく飛ばすでしょう、

原 康太よ。目をとじるのじ

言われた通り目を閉じると

俺は異世界へと旅立った。

川のせせらぎや木の揺れる音が心地いい。
地面に倒れて全身で日差しを浴びる。

うーん・・・うん？

「ってここどこ!？」

あ、天国でも同じこと言ったな・・・。
とりあえず体を起こし目を開けてみる。
辺り一面森で近くには川が流れてる。

どうやらちゃんとアザーワールドの世界に来れたようだ。
そこまで考えたところで自分の体を見る。

俺の装備は普通の旅人が着てるようなラフな格好だ。どうやらアイテムの引き継ぎはないらしい。
腰にはいかにも初期装備な剣がついている。

「えーっと、能力はどうやって見るんだっけ？」
とりあえず頭の中でゲームと同じように（ウィンドウオープン）と唱えてみると、
俺の目の前に小さな小窓が出た。

「おおっ！ちゃんと俺のキャラの能力になってる！」
カイル Lv73 剣聖
そして下には能力値がズラリと並んでいる。

剣聖は剣系スキルにボーナスが付き、クリティカル率（発動すると相手の防御0でダメージが計算される）
が全クラス中最高の剣士系最上位クラスだ。

Lv73は最大Lv200のこのゲームではそこまで高い数字ではないがクラスアップは一定の条件を満たせば行えたのでレベルはあまり関係ない。

「にしてもすげーグラフィックだな。ゲームだどこまで精密にはできてなかったけど。まあそれはともかく、移動しないとな」

と言ったところで気づく。どっちに行けばいいんだろう？

どっちに街や村があるのか分からないし、そもそもこんな装備じゃ野宿も無理だ。

「あのじじい、もっとちゃんとしたところに出せよ・・・」

まあ川に沿って歩いてみるか。

「きゃあああああああああああ！」

女の子の悲鳴が聞こえる。という事は人がいるって助けねえと！

俺は全速力で声のした方へ向かい声の主を発見した。

彼女は村娘なんだろうか、片手に木の実の入ったカゴを持ち怯えていた。

彼女を襲った相手はベアーウルフ。序盤のザコ敵だ。大体Lv10もあれば楽に勝てる。

「はっ！」

彼女が襲われる前にベアーウルフに切りかかる俺の剣が青色に光る。スキル「居合切り」を使った為だ。

その一撃で十分だったようでベアーウルフは動かなくなった。

「大丈夫ですか？」

彼女は茶色い髪を肩にかかるくらいまで伸ばした美人さんだった。いきなり美人さんとは異世界ばねえな。

「た、助けてくれてありがとうございます。あの・・・あなたは？」

「カイル。あんたは？」 平常心平常心。こういうのは第一印象が大事だ。

「私は・・・その」

彼女は何か考え込みながらうなっていたがすぐに口を開いた。

「私はメイメル・フォン・エスペリア。エスペリア王国の第二王女です」

いきなり王族かよ!？

いきなり迷子になったり王女と出会ったり異世界は思った以上にツッコミどころが満載だな！

ところでエスペリアってそんな国あったっけ？

確かアザーワールドの公式設定は

世界ができてからおよそ700年でマドラ、シドム、エルビシア、オンペリア、リーシアの五大国が覇権を争う戦国時代みたいな設定だったっけか。

エスペリアなんて無かったし・・・もしかして

「えーっと、王女様。俺は山奥の村で育ったので詳しくは知らないのですが・・・今は大体何年くらいなんでしょうか？」

王女様（仮）がすごく疑ってるのが伝わってくる。そりゃそうだ、いくら山奥とは言え今が何年のかも分からないなんてことはまずありえない。

しかし助けた恩ってのが効いたのか、深く追及する事もせず王女様（仮）は答えてくれた。

「今は751年、五大国戦国時代と呼ばれています」

「確か50年ほど前にはエスペリアなんて国は無かった気がするんだが？」

「それはそうでしょう。エスペリアは20年ほど前にエルビシアがオンペリアを倒し出来た国なのですから」

「なんで国名を変えたんだ？」

「エルビシアとオンペリアは以前から友好が深く、倒したと言ってもほとんど被害は出さず実質両国が手を結んだような形で、その時にエルベシアの血族がそのまま王族としてエスペリアを名乗るようになった。」

オンペリアの王族は不幸なことに生まれた子がすべて女性で血族が絶える寸前でしたのでお互い合併することに反対はほとんど無かった。私は母上からそのように教わりました」

ふむう、天国に居たのはほんのわずかなのに50年も経ってるとは。そういや俺の元の体も気づいたら火葬された後だったからな。時間

の流れが違ったのだろう。

「じゃあ最後に。なんで王女様がこんなところに？」

おかしいだろう。王宮とか期待してるんだけど。

「……うつ……ぐすつ……」

おかしいだろう！なんで急に泣くんのだ！？

「お……おい……大丈夫か？」そんなにヤバイ事情があるのか！？

「……すいません。実はエスペリアはもう滅亡寸前なのです。力を付けたマドラの侵攻が始まってもう3か月です。エスペリアはあと1年も持たずにマドラに敗れるだろう。そう父上はおっしゃり第一王子であるカーライル・フォン・エスペリアを始め4人の息子娘達を逃がしたのです。その内の一人が私、メイメルなのです」

そう言ったとき彼女は顔に手をあて泣き続けた。彼女はしばらく泣き続けた後俺に話しかけてきた。

「ところでカイル様、さっきのスキルを見る限りかなりのレベルとお見受けします。よろしければいかほどか教えてもらえませんか？」

別に居合切りはレベル60を超えたあたりで使えるようになる平凡なスキルだからそこまで高レベルでもないだろう。そう思い俺は素直に答えることにした。

「俺はレベル73の剣聖です」

そう聞いた途端王女様、いやメイメルは驚愕の顔を浮かべた。

「な・・・73ですか？そんな高レベル聞いたことないですよ!？」

え？どゆことなの？

メイメルからこの世界の現状を教えてもらった。まとめるとこんな感じだろうか。

まず現在戦乱はどうなっているか。

俺がプレイしていた時代からはや50年、世界は五大国の戦乱から北にマドラ、南にリージアが位置取りこの二国が勢力争いを繰り広げていて、それに豊富な資源による戦力強化を行い軍事力を高めたシドムが混ざっている。どうやらエスペリアは最初の敗戦国になる寸前の所らしい。

次に俺のレベルについて。

マドラやリージアの一般兵の平均は大体15〜20くらいで将軍が30前後らしい。なんでも30年ほど前には俺くらいのレベルの人はたくさん居たそうだがあるとき高レベル戦士達が突如姿を消したとのこと。

俺の予想ではその頃にアザーワールドの配信が終わってしまい、プレイヤーが居なくなったのではないかと踏んでいる。

最後にメイメルは今後どうするのか？

メイメルはまだエスペリアを諦めておらず、一旦は王宮からの脱出

を余儀なくされたが、つい先日天のお告げっぽい『すごく強い剣士が森に現れる』という夢を見てこの森の中を探し回り、そのお方に国の存亡をかけて戦ってもらったらしい。

これも俺の予想だがきつと俺がここに飛ばされたのは神様のミスでもなんでもなくメイメルに俺がこの付近に出ると夢で教え俺とメイメルが出会うように俺をここに飛ばしたんだろう。もちろん俺のレベルがこの世界で化け物クラスという事を知った上でだ。

・・・ふむ。俺は最強の剣士、そして滅亡寸前の国に絶世の美女である王女様か。

すっげーテンションあがってきた！！

俺がこんなにいいポジションやっていーんですか神様！？普通に元の世界で過ごすより面白いじゃん！

丁度頭の中の整理が終わった頃にメイメルは俺の手を両手で握り、上目使いで

「カイル様・・・もしよろしければエスペリアにお力をお貸しいただけませんか・・・？」

と頼んできた。正直かわい過ぎて思わず口が動いてしまった。

「かわいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

びくつと震えるメイメルを気にせず俺は暴走。

「メイメルなんでそんな可愛いんだよ俺もう我慢できないわ！メイ

メル！」

「は・・・はい？」

「俺に任せろ！俺がこの国すくつちやる！」

「え！！ほんとですか！？」

「その代わり！一回でいいからほっぺにチューを！お願いします！」

そういや言い忘れたが俺の今の容姿はゲーム時代のままなのでかなりイケメンになっている。

そんなイケメンで命の恩人な俺にメイメルは恥ずかしがりながらも

「そ・・・それじゃあ・・・」とっほっぺたに柔らかな感触が伝わる。

マドラ？リージア？シドム？はっ！

メイメルを悲しませる国なんて俺が倒してやんよ！

第一話 作戦会議

メイメルに恥ずかしい事をさせテンションが上がった俺はメイメルが3日間滞在していると言う街に案内された。

ロンバルドと言うその町は、中々の大きさで人がたくさん行き来しているので俺はメイメルを見失わないように気を付けながら彼女の宿へ移動した。

今は宿の酒場で作戦会議をしながら昼飯を食べている。

「今の所マドラはエスペリアの南部4分の1程度の所まで侵攻しているのか」

「ええ、まだ北だから南側に位置するこの街はまだにぎわっているの」

「マドラの戦力はどれくらいなんだ？」

「マドラは大体1万、エスペリアは4000くらいです。そろそろダイタリアン砦にさしかかると聞いています」

「そーいや説明不足だったがエスペリアは大陸左側に位置する国でざっくり書くとこんな感じ」

マドラ

↑敵軍

北

谷谷谷橋谷谷

西 東
 砦 谷
 シドム 南

谷谷谷

現在地 森森

森森森

森森森

は1文字分)で1日

王都 森森森

てる橋は大体横10メートル、

森森

※1行分(横
 谷に架かつ
 長さ100

メートルくらい

エスペリア 森森森

森森

リージア

森森

ほとんどざっくりですまん。 (エスペリア付近だけ地形も付けたから許してほしい)

ケータイ用に文字での説明も入れておく。

北にマドラ、西にエスペリア、東にシドム、南にリージアが位置取りエスペリアは北に大きな谷(橋は一つ)、東側一帯は森で囲まれている。

現在谷側からマドラ軍が侵攻中といった状況だ。

「このままだとリージアに挟み撃ちにされるんじゃないか？」

「それはありません。今リージアとマドラは小競り合いをしていてマドラも最少戦力で今回の侵攻を行っていますから」

「なるほど、じゃあダイタリアン砦の近くにある谷ってどうなの？」

「この谷は深さこそそこそありますが大きな木の橋が架かっていて簡単に渡れます。橋は魔法がかけられていて普通の冒険者ではびくともしない強度らしいです」

「ふーん……。まあなんにせよまずは砦まで移動してみないと分からないわな」

「ええっ！？ わざわざ敵の居るところに出向くんですか？」

「ああ、どっちにしろこっちにも来るんなら早めに戦った方がいいでしょ」

「でも私の護衛は100人ほどでとてもじゃないけど相手の戦力に適わないんですよ？」

「なんとかなるだろ。相手の將軍様はレベル35くらいなんだし」

「そ……。そうでしょうか？」

「そうだって。とりあえず装備整えて1日休んだら出発しよう」

メイメルは不安な顔をしているがこういうことは深く考えても無駄だと思う。

俺はメイメルと護衛を3人連れて街の中を歩き武器屋を訪れた。

「とりあえず剣だな。おっちゃん悪いけど一番大きい剣を見せてくれないかな？」

そんな俺の言葉に武器屋のおっちゃんはとても驚いていた。そりゃ大剣振り回せるようには見えないよな。

おっちゃんが持ってきた剣はゲーム時代使ってた大剣より少し小さい(といっても1メートル位はあると思うが)

俺はその大剣と動きを阻害しない最低限の防具を買い揃えた。お金はメイメルが王宮を出るときに持っていたお金を使わせてもらった。

その後俺達は保存のきく食材や水を買って宿に戻った。

「ところで俺の部屋ってどうなるんだ？もしかしてメイメルと相部屋とか？」

俺のセクハラ発言にメイメルが硬直した。顔もほのかに赤く染まっているようだ。

「あれえ？何想像してるのカナ？メイメルちゃん」

すかさず追い打ち。こういうのは一気に畳み掛けるのが大事だ。

「べ、べべべ別の部屋を取りましたからご安心を！」

メイメルは真っ赤になりながら自分の部屋に閉じこもってしまった。

俺は仕方なく自分の部屋に移動して剣を手入れすることにした。

宿で一睡した俺とメイメルは街中にちらばっていた護衛を10人ずつ集め、時間をずらして俺達について来るよう頼んだ。（護衛10人もつけて歩いてたら王女が居るってモロばれだしな）

昨日必要な物は買い揃えていたので俺達はすぐに街を出ることになった。

護衛の内特にレベルの高い兵士10人と共に用意してあった馬車に乗り込み、俺達は街を後にした。

砦へと向かう馬車の中に居る護衛達は皆緊張していて張りつめた空気が流れていた。

砦へと向かう道はきれいに整備されていて馬車があまり揺れず騒音が小さかったのも原因だろう。

気まづかったので何気なく誰かと話することにした俺はメイメルに近づき話かけた。

「えーっと、確か地図を見る限りここからだと2〜3日でダイタリアン砦に着くよな？」

「ええ、私達が砦に着いた頃にはマドラ軍は谷の橋から半日くらい
の所でしょーうね」

メイメルの顔は緊張で強張っていて手の色も少し悪い感じがしたの

で俺はまたからかってみることにした。

「2、3日かく。それだけあればメイメルを襲えるな」

「おい、お前」

突然剣を突きつけられたので少しびっくりしたが、流石に言い過ぎたかもしれないな。

剣を突きつけてきたヤツは護衛にしては少し小柄な印象だが剣は微動だにしていなくてところを見ると力はあるのだろう。

とりあえず謝るに限る。

「ああすまんすまん。メイメルの緊張を少しでも解いてやろうとしたんだよ。少し下品だったのは謝るから剣をしまってくださいないか？」

内心ヒヤヒヤしながら謝る俺に冷たい視線を浴びせる護衛は全く許してくれなかった。それどころか逆に火に油を注いだようだ。

「大体あなたいくら王女様を助けた高レベル剣士だって言っても王女様に対する態度が失礼すぎるんじゃないの？王女様は気が弱いから何も言わないけど少しは反省しなさい！」

「あ・・・ああ、すまん。これから気を付ける。ところでお前って女なのか？」

声高いし口調も体つきも女っぽいから多分そうだと思うんだけど。女が護衛って珍しいよな。

「女が護衛していたらおかしいか？」

「いや、めずらしいからつい」

心を読まれたか。

どんどんヒートアップしていく彼女に困惑しているとそれまで黙って見ていたメイメルが助け舟を出してくれた。

「メイ、確かにあなたの言う通り彼は言動に少し問題があります。でも彼は私の為を思って言ってくれたのですから許してやってください。カイル様もメイは私が最も信頼している護衛の一人ですので安心してください」

メイメルの言葉で毒気を抜かれたのかメイは剣を収めそれっきりしゃべらなくなった。

馬車の中にいる護衛の顔からも緊張の色が少し落ちている。

雰囲気も少しは良くなったので良しとしよう。

その後何事もなく夜を迎えた俺達は野営の準備をしていた。

護衛達が手際よく準備を進めるのを見て俺はせっかくだしクマの一匹や二匹狩って食べたいなと思ったので近くの森へ行くことにした。メイメルに一言言うべきか、と思ったがまあいいだろう。俺は正規兵じゃないしな。

立ち上がり近くに置いてあった自分の剣を担いだところでメイルがいきなり怒鳴ってきた。

「ちょっと！どこ行く気！」

「ん？ちょっと狩りにな。晩飯にちょうどいいだろ」

「そんな勝手許しません！あなたはメイメル様を見ててください！」

「メイメル、私お肉が食べたいわ。それもととても新鮮な物が。メイメル、悪いけどカイルと一緒に狩りに行ってくれない？」

そこへメイメルがいたずらっぽい顔を浮かべお願いしたものだからメイメルは怒るきっかけを失い。

結局俺はメイメルと一緒に狩りに行くことになった。

俺達が野営している場所は森から歩いて10分ほどの見晴らしのいい場所だったので森へ歩く間メイメルと俺との間にはとても気まずい空気が流れていた。

思えばメイメルには初めて話した時から怒られっぱなしだな。

この狩りで少しでもいいところを見せて評価を上げておかなければこの先も事あるごとに難癖をつけられるかもしれない。

とりあえず差支えない話でもしてみようと思ひ俺はメイメルに話かけた。

「メイメルって小柄なのに力あるよな。俺に剣突き立てた時剣が全く動いてなかったし」

素直にほめられたことが以外だったのか。メイメルは俺の方を向き

「当たり前だ。私は誇り高いクトラ族の剣士なのだから」

とそっけない返事を返してきた。

クトラ族ってゲーム内でも聞いたことない部族だな。

「クトラ族ってどんな部族なんだ？」

「・・・クトラ族を知らないとは。いったいどこでどう育ったのか聞いてみたいな」

「すまん。俺は山奥の出身でほとんど知識がないんだ。気を悪くしたなら謝る」

「メイメル様からかなりの高レベルと聞いていたがこんな常識知らずだとは思わなかった。まあいい、クトラ族はリージア領内の草原に住んでいる部族だ。剣と弓の扱いに長けた者が多く馬の扱いもうまいのが特徴だな。障害物のない草原では無類の強さを誇る部族で過去に何度もリージアの兵士と戦って勝ってきた」

「じゃあメイメルも弓の扱いはうまいのか？見たところ弓は持ってないけど」

「私は同世代の子供の中で一番剣の扱いに長けていた分弓の練習はほとんどしなかった」

「へえ、じゃあ今度手合せ願おうかな？」

「・・・勝手にしろ」

そんな会話をしていると森に着いた。俺はすかさず凡庸スキル「夜目」を使い暗い森の中を見渡してみた。

「ここから右に100メートルくらいのところにクリズリーがいる

な」

グリズリーはレベル20はないと一人で倒すのは難しいモンスターだ。グリズリーの肉は脂身が多いがおいしいので是非倒しておきたい。

「なんでそんなとこまで見えるんだ？まあいいじゃあ慎重に近づこう」

俺達はできるだけ音を立てないようにかがみながらグリズリーに近づく。幸いグリズリーは食事中なようで気づいていない。

「じゃあ俺が引き付けるから後ろから攻撃してくれ」

「それは騎士としては恥だな。私が引き付ける役を担おう」

「女の子をおとりにするのは男として恥だから却下。じゃあいつてくる」

俺のがレベル高いし。

グリズリーは俺に気づいたのか獲物を食べるのを止め低くうなっている。

一度吠えグリズリーが俺にツメで攻撃してくるのを俺はあっさりかわし時間を稼ぐ。

そして後ろからメールが剣を振り攻撃。

メールの存在に気づいていないグリズリーは後ろからの奇襲に驚き後ろを向いた。

俺はその隙を見逃さず自分の大剣でグリズリーの首を一発で切り落とした。

「よしあとはこいつを持っていくだけだな。メイルは何人か護衛を呼んできてくれないか？」

とグリズリーから視線をメイルに向けると

メイルの後ろにもう一匹グリズリーがいてメイルに攻撃しようとしている所だった。

最初の一匹に気を取られていて気付かなかった俺は無我夢中でメイルを突き飛ばしグリズリーの攻撃を喰らい、後ろへ吹き飛ばす。

「・・・って、やってくれるじゃねーかよ！」

すぐに立ち上がり大剣を上から振り下ろす。

グリズリーは簡単にそれを避けたが俺の狙いは剣じゃない。

左手に初級風魔法「ウインドカッター」を用意していた俺はグリズリーに間髪入れず魔法を浴びせる。

剣聖は魔法の攻撃力が低いが流石にレベルがこれだけあれば一撃だった。

俺はそばで茫然としているメイルの方へ歩いて

「大丈夫だったか？急に突き飛ばして悪かったな」

と声をかけてみた。するとメイルの顔がみるみる赤くなっていき

「う・・・うるさいっ！余計なお世話だ！・・・でも、助けてくれたのは事実だし礼は言っておく。助かった」

と言ったつきり急に走り出して行ってしまった。きっと護衛を何人か呼んでくるんだろう。

顔が赤くなってたのはさっき言ってた騎士道精神か何の恥だと感じたに違いない。

その後30分ほどかけて野営にグリズリーを運んだ俺はなぜかメイ
ルがチラチラこちらを見ているのを不思議に思いながらグリズリー
の肉を平らげた。

第一話 作戦会議（後書き）

とりあえずざっくりと地図書いてみました。

修正してなんとか書き上げましたがずれてたらしいません。

次回は8月28日予定です

第二話 確信

その後俺達は何度かモンスターの襲われながらも俺が無双したり、メールが俺を無視するようになったりしつつ砦に到着した。

ダイタリアン砦は日本の一軒家5つくらいの大きさで周り堀が掘られ通れなくなっていた。

高さは10メートルくらいだろうか、シューターとおぼしき装置がいくつも設置されている所を見るとかなり重要な砦らしい。

俺達は砦側から橋を落してもらい砦内に馬車を進めた。

中では沢山の兵士達がどうで砦の橋の前に壁を作ったり武器を整理したりせわしなく動いていた。

しばらくすると砦の指揮をとっているらしいマーズがこちらへやって来てメイメルと何か話していた。

俺達はメイメルが後で説明すると言うので馬車の中で待機中だ。

「砦の中を見る限り相手もかなり近いところまで進んでるっぽいな」

「ええ、ただでさえ戦力に差があるのだから少しでも働かないといけないのよ。たとえば負けが決まってるような戦いでもね」

「やっぱり勝てる見込みはないのか？」

「・・・戦力も装備も志気も相手の方が圧倒的に上よ。ウチが勝つ

てるのは地の利くらい」

「・・・そうか」

俺はそれ以上何を言えればいいのか分からず黙ってしまった。

頭の中で現在の状況が流れていく。

相手の方が圧倒的に強い、けど地形だけはいい。

確か砦のすぐ先には谷、橋は一つ・・・いや・・・待てよ。

俺はこの世界ではかなりのレベル。ならできるんじゃないか？

俺は一つの作戦とも呼べない物を考え付いたので確認を試みる。

「なあメール、谷にかかっている橋はどんな橋なんだ？」

「あの橋は横幅が5メートルくらいあって、防御魔法で守られてるから攻撃してもびくともしないのよ」

おお、メールが言うとおりの物ならできるんじゃないか？

俺が考え事しているとメールがあきれたような口調で話かけてきた。

「・・・何考えてるのか知らないけど直接見てきたら？すぐそこなんだし」

「・・・じゃあメールが話終わる前に戻ってくる」

そう言って俺は橋へと向かった。

俺は兵士達のジャマにならないように橋まで走った俺はその橋を見て確信を持った。

俺の作戦は成功する。絶対。

俺が馬車に戻るとメイメルはすでにマーズとの話を終え戻ってきていた。

「カイル様橋に行って何をしていらしたんですか？」

「ああ俺の作戦が通用するかどうかの確認だよ」

「この状況を引っくり返せるような作戦があるのですか？」

「ああ、俺のレベルだからこそできる作戦だ。さっき橋を見てできると確信した」

そして俺はメイメル達に俺が考えた作戦を教えた。

全員半信半疑といった様子だったが。

見てろよ・・・

この勝負・・・

俺達が勝ってやる。

俺の考えた作戦を隊長であるマーズは当初反対したがメイメルにお願いされしぶしぶ納得してくれた。

どちらにしてもこちら側は9割9分負ける戦いだ。俺の作戦に賭けてもいいと彼は言っていた。

その夜、俺は目がさえて眠れなかった。遠足などのイベント前にはいつもこうなる。

せつかくだからと砦の外に出て空を見上げるとずっと都会暮らしだった俺は初めて本当の星空を知った。

どこを見ても星が輝いている。俺はしばらく空を眺めて呟いた。

「…あれはなんて星なんだろう…。星座はあるのかな…」

「あれは英雄座です」

振り向くとメイメルが立っていた。いきなり話しかけられて俺は一瞬身構えたが、メイメルは気にせず俺の隣に座ってきた。

馬車に乗っていた時には意識していなかった彼女の髪の毛の匂いや寝間着なのだろうか、かなりの薄着で肌がチラチラ見える。

ち、ちけえよ！ただでさえ女の子には慣れてないのにちけえよ！

俺はドキドキしっぱなしだったがメイメルはずっと星を眺めていた。

どれくらいの時間が流れたか。落ち着きを取り戻した俺はメイメルに話しかけた。

「さっき言ってた英雄座ってどれだったっけ？」

俺が話しかけるとメイメルはこっちを向いて微笑みながら説明を始めた。

またドキッとしてしまったが今回はすぐに落ち着く事ができた。

「あそこに赤い星が3つ並んで三角形になってるでしょう？あれが英雄座です。一番上から順に勇気、武力、知力の象徴とされていて、大一番の前日に英雄座に祈ると星から力をもらえると言われています」

「へー。じゃあ明日の戦いの為に祈ってみようかな？」

メイメルの星に関する知識に驚きながら俺は本気で祈り始めた。俺は隣でメイメルがふふつと笑う声がして彼女の方を見た。

「カイル様、あなたがあの星を見つけたのはきつと神様が勝て、と言っているからですよ。そんなに祈らなくてもきつと勝てます」

「そうかな？じゃあそういう事にしとくか。なんか眠くなってきたし俺は明日に備えてもう寝るよ。メイメルはどうする？」

と俺が聞くとメイメルは少し間を開けて答えた。

「私はもう少し星を見ます。…カイル様、せっかくですから私がおまじないをかけてあげます。」

そ、そのまま目を閉じて下さい」

メイメルの言うとおり目を閉じる。

メイメルが俺の前に移動する音がしたと思ったら俺の口に柔らかい感触が伝わって来た。

目を開くとメイメルの顔がすぐそばにあって髪からいい匂いがして頭が真っ白になる。

メイメルは俺から離れると顔を真っ赤にしてうつむいた。

「そ、それじゃあお休みなさい！わ、私の勇者様…」

最後の方は声が小さくて聞き取れなかったがメイメルは砦に走って行ってしまった。

俺はまた目が冴えてしまったな、と他人事のように思うしかなかった。

結局、俺はほとんど眠れなかったが不思議と体は元気一杯でメイメルのおまじないのおかげかな　と思うたびに顔が赤くなるので取り繕うのが一苦労だった。

昼頃になった頃、マドラ軍が橋の向こう側に到着。

俺は橋の前に立ち砦の兵士達はアーチを構える（アーチは射程が長

いので橋の向こうまで届く)

向こうに向かって俺は大声を出す。

「この先には行かせねえぞ！かかってこい！俺は73レベルの最強剣士だ！」

すると相手側の將軍さんが返事を返してきた。

「73レベルであつたとしてもたつた一人で何とかなると思つたか！その考え、根元からへし折ってくれる！全員、ワシに続け！」

俺の言葉を虚言と取つたらしい相手側が橋を一気に渡ってきた。

俺は大剣を構え剣に炎をまとわせる。

フレイムソードはMPを消費して溜めれば溜めるほど威力が上がる。橋は長さ100メートルほどだが馬に乗っているのであつてないような距離だ。

敵が残り50メートルに差し掛かった所で俺は大剣を振るう。

地面に

土の地面は簡単に崩れ橋は土台から崩れる。

「な、なんだとおおおおお！？」

いくら頑丈な橋でも支えがなくなりゃただ落ちるのみ！

さらば、名前も知らぬ將軍さん。
少しは疑おうね！

橋が崩れ相手側は100人ほど谷に落ちたかな？

このままだと逃げられて体勢を整えられて終わりなんだけど、まだ攻撃は続く。

「アーチ、撃て！」

マーズの合図で一斉にアーチの矢が相手を襲う。

アーチもあれだけ遠いと狙いが難しいが相手は1万くらい居るので当たる当たる。

しばらくすると敵兵は將軍さんを失いさらにアーチの攻撃も受けパニックになりながら森の中に消えていった。
1000人位は削れたかな？

ひとまず終わったと思い腰を下ろししばらくすると砦からメイメルとメイルが走ってきた。

「カイル様！ やりましたね！」

メイメルが俺に抱きつのを見てメイルが驚きながら俺に話しかけてきた。

「むちゃくちゃね。こんな簡単に成功するとは思ってなかったわ。相手の将軍がバカで助かったわね！」

と言って俺の足を蹴ってきた。
何でだよ…。

ピシッ

「ん？何のお…と…」

地面にヒビが入っていた。やべえ！このままじゃ落ちる！

逃げようとしてもメイメルが気付かず抱きついたまままで動けねえ！

ガラガラガッシャーン

「ぎゃあああああ落ちるうううううううううう！」

「えっ！？きゃあああああああああ！」

メイメル気付くの遅すぎだよ！

でなんでメイメルも一緒に落ちてんの！

逃げれただろおまえ！

俺達は3人合わせて谷へ落ちましたとき…。

第一章

おしまい

第二話 確信（後書き）

学校が始まるのでこれからは毎週日曜日更新目標で書き上げたいと思います。

次回で第一章が終わると思います。まだ書いてないので終わらないかもしれませんが。

週一更新なので一回の量をできるだけ増やしていきたいと思います。

あとお気に入り登録して下さい方ありがとうございます！

第一話　じじいの命令

落ち始めてはや3秒。

俺達は死を覚悟した。

まさかこんな死に方するとはなあ…美女に抱きつかれて転落死って…。

そんなことを考えてる内に地面が見えてきた。

その時、時間が止まった。

周りの景色が色あせてメイメルとメールも宙に浮いたまま硬直している。

なにが起きてるのか全く分からなかった。

目の前に見覚えのあるじじいが現れるまでは。

「よう、見事敵を退けたのう。上からみてたぞい」

「もうすぐ死ぬけどな。こんなに早く2回目の死を味わうとは思わなかったよ。で、あんた死ぬ間際の俺を笑いに來たのか？悪趣味なじーさんだな」

「いやいや、そんな事でわざわざ降りてきたりはせんよ。お主の意志確認じゃ」

「意志確認？」

「お主、エスペリアを救う勇氣を持っておるか？」

「…当たり前だろ。メイメルの為でもあるし俺自身この国を救ってやる気満々だぜ」

「聞く必要はなかったかの。ならばお主に一つの試練を与えよう。この谷の中に洞窟がある。そこに封印されてるモノを解放するのじや。そうすればこの谷から出られるじやろう」

「どうせならタダで出してくれよ意地悪だな。まあ助かるならその洞窟とやらに何が封印されてるかは知らないがやってやるよ」

「意地悪とは何じゃ。神は無償で人を助けてはいかんのじゃ。それに封印されてるモノはお前にとってもプラスになるじやろて、頑張って封印を解いて見せるんじゃない。ではさらばじゃ」

じじいが消えた途端俺達は再び落下を始めた。

地面にぶつかる直前、俺達は体から重量がなくなったかのような錯覚に襲われ、地面に無傷で降り立った。

何が起きたのか分からない様子のメイメルとメールが辺りをキョロキョロしている。

「…カイル様、いったいなにが？」

「悪趣味な神様がこの谷にある洞窟の封印を解けるならって助けてくれたんだよ」

メイメルは一度夢の中でじじいと会ってるからすんなり信じてくれたが

「そんな嘘誰が信じるのよ。あんたが何かしたんでしょ？」
メールは目を細くして俺をみた。

信じてくれなさそうなので説得は諦める事にした俺はメールに

「じゃあ洞窟を探そう。洞窟があったら俺の言ってる事も信じるだろ」

と言いメールも本当に洞窟があるなら信じると言ってくれた。

早速俺達は辺りを探し始めた。

マドラ軍の兵士達はみんな転落死したらしく死体だけが転がっていて動く者は居なかった。

メールには出来るだけ見せないように歩いていくと体感時間的に2時間位で洞窟を見つけられた。

洞窟は高さ3メートル、横には5人が並んで立てるくらいの大きさで壁には色々な模様が描かれている。

「いかにもって感じですね。何が封印されてるのですか？」

「それは分らん。じじいは俺達の助けになるとしか言ってなかったからな。

まあ害にはならないってだけでも分かってりゃいいだろ」

「で、封印ってどうやって解くのよ？」

「それも分らん。とりあえず洞窟の中を見てみないとな」

じじいがなぜあんな事を頼んだのかは分からないが助かるには封印を解くしかない。

俺達は俺 メール メールの順で洞窟へと入って行った。

中はほぼ一本道で何回は敵と出会ったが問題なく倒せた。

しばらく進むと行き止まりで俺は戻ろうとしたがメールが何かに気づき壁に駆け寄っていった。

「どうしたんだ？」

「ここに何か書いてあるんだけど汚れてて読めないの」

見ると確かに何か文字らしい何かが書いてあるようだ。

俺達は壁が崩れないよう慎重にホコリを払い、何とかそれを読み取った。

この先に進まんとする者

一昔前の対となり、唱えよ。

という文字の下にアルファベットが並んでいた。

Q S N U E M P V

「なんだこれ。アルファベットが並んでるけど意味が分からんな」

俺がそう呟くとメイメルとメールが何故か驚いていた。

「カイル様、古代語が読めるのですか!？」

「古代語? ってことはもう使われてないのか？」

俺がそう聞き返すとメイメルは啞然とした様子で聞き返してきた。

「使われているいない以前に古代語は遺跡でしか見られませんしまだ謎が多いんですよ？」

なんでカイル様は古代語が分かるのですか？」

「なんでと言われてもな…うーん…」

「はっきりしなさいよ! なんで古代語が分かるのよ!？」

困った俺がなかなか返事をしないもんだからメールが痺れを切らしてしまった。

こうなったら仕方ない。

「まあ人には知られたくない事の一つや二つあるだろ？」

どうしてもってんならそれなりの見返りがほしいな」

「見返りって何よ？」

「キスカ胸触らしてくれ」

平然ととんでもない事を言う俺にメールとメイメルがドン引きして

いた。

その後古代語の事については何も追求されなかったが、二人はしばらく口を聞いてくれなかった。

第一話　じじいの命令（後書き）

なぞなぞ問題です。ヒントはアルファベット。一応下に書いておきます。

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z

暗号の内容間違ってたらあちゃー　ですけどねw

多分あってる・・・はず（確認したし）。

答えが分かった人は感想にでも書いてください。・・・嫌ならいいですよ。分かってます。

神様・・・もといじじいはこれからもちよつかいを出し続けるのか・
・いるよね。知ってる事わざわざ説明するウザイキャラ（しかもスキップできない）。

次は11日

第二話 ライカンの王（前書き）

前書きって何書けばいいか分からないよね！

第二話 ライカンの王

「「うーん…」」

俺達が扉の前で唸り始めてしばらく。

全く分からない。

特にメイメルとメイルに英語の知識が無いのが辛い所だ。

しびれを切らしたのかメイルが急に地面に倒れこんだ。

「もうなんなのよこれ！大体考古学者でもない私が分かる訳ないじゃないのよ！」

「そう言うなって。この先に行けないと谷から出られないんだから頑張れ」

「ヤダ！もうヤダなの！」

メイルはそう言ったきり動かなくなった。

俺は手を合わせて南無 とだけ言って再び暗号と向き合う。

この先に進まんとする者

一昔前の対となり、唱えよ。

Q S N U E M P V

「一昔ということはひとつ前の分かれ道に何かあるのでしょうか…」

それまで静かに俺とメールのやり取りを見ていたメールが呟く。

「でも何もなかったし、唱えよって書いてあるんだから鍵があるとは思えないぞ」

今から少し前俺達は考える前に行っていない所も探して見たが全部行き止まりだった。

一つ前の通路に何かある可能性は低いだろう。

「いや…待てよ。もしかして…」

俺はメールの言葉で閃き地面に暗号を書いた。

Q S N U E M P V

これを一つ前の文字にすると

P R M T D L O U

「それは何か意味のある言葉なのですか？」

「いや、まだ対になってないだろう？」

そう言って俺はアルファベット26文字を地面に書いた。

「いいか？Pは左から16番目だろ？対ってことは右から16番目の文字って事だ」

「右から16番目ということはKですか？」

「そう。同じように全ての文字を入れ替えると…

Q S N U E M P V

P R M T D L O U

K I N G W O L F

訳すと狼の王、これが答えだ」

俺がそう言うのと扉がゴゴゴゴという音と共に開き、それまでのびてたメールが何事かと飛び起きた。

その後、俺達が扉の奥に入ると扉がまた閉じた。

「まあ気にせず進もう」

二人が不安げだったので俺は極力明るい口調でそう言った。

真っ直ぐ伸びた通路を警戒しながら進めるとメールが話しかけてきた。

「にしても狼の王って何の事なのかしらね？」

「うーん、多分ここに封印されてるモノが狼の王の魂とかなんだろうな。

俺達で倒せる相手だとは思えないよ。

まあ話の通じる奴だと信じるしかないさ」

「そんなものなんで封印したのかしら？

それにこんな所に封印されてたり今更封印を解いて欲しいなんて。

怪しいわね」

「でも神様は私達の助けになるって言うてらしたんでしょう？
私はきつと仲間になってくれると思います」

「そうだな。おっと、そんな事言ってる間に何か大きな部屋が見えてきたぞ」

扉の先の真っ直ぐに伸びた通路にはさっきのような分かれ道は無かった。

その部屋はかなり広く、
中心に宝玉がはめ込まれた台座があり、
宝玉の中は目まぐるしく色が変わり時々光を放っている。

その台座のまわりには巨大な魔法陣が描かれ、空気が重い。息をするのにも忘れそうだ。

俺達が入り口で立ち尽くしていると宝玉がいきなり光を放ち、目の前に一匹の光の狼が現れた。

体長3メートルはあるだろう。体は綺麗な空のような水色の毛に覆われ、狼の王にふさわしい雰囲気をもっている。

「…誰じゃ？ワシをライカンの王、スイと知ってここに来た愚か者か？」

直接頭に響くような声に萎縮しながらも、女性二人に任せる訳にはいけないと思い俺は口を開いた。

「お、俺達は神様に封印を解けと言われここに来た。お前…いや、スイに危害を加える気はない」

俺はそう言って背中の大剣を前に投げた。

どっちにしろ戦いになれば一瞬で負けるだろう。
ならせめて相手に信用してもらえ行動をすべきだ。

スイは俺の行動を見てくつくつと笑った。

「ワシに勝てぬと断じたか。なかなかいさぎよいではないか。
おぬしは神の使いと言ったな。何故ワシの封印を解こうとする?」

その声から警戒の色が消え、スイは興味深いといった様子で俺の返事を待っている。

俺は頭の中で言葉を整えスイの質問に答えた。

「一つはこの谷から脱出出来ると神様が言ったから。
もう一つはお前に俺達の国の力になって欲しいからだ。
もちろん嫌ならこの谷から出してもらうだけでいい。
封印を解くのと引き換えにな」

俺の答えに満足したのか、スイはなる程のうと嬉しそうにうんうん
言い、メイメルとメイルに近づいていく。

スイはメイメルの前まで歩くとメイメルに語りかけた。

「おぬし、王家の者か?」

「え? あ、その…」

「そう怯えるでない。素直に答えるのじゃ」

「は、はい…。私はエスペリア第二王女メイメル・フォン・エスペリアです…」

「ふむ。なる程、体から溢れる魔力は王家の血を色濃く受け継ぐ証というわけじゃな。

ワシの主になるにふさわしい魔力じゃ。

おぬし、ワシの封印を解いてみせよ。

ついてくるのじゃ」

再び宝玉に向かうスイにビクビクしながらメイメルはついていった。

宝玉は先と変わらぬ光を放っている。

「さあ、宝玉に手を当て魔力を注ぐのじゃ」

スイに促され宝玉に手を当てたメイメルは困惑した様子でスイに恐る恐る聞いた。

「あの…魔力ってどうやって流し込むのですか？」

その質問を聞いた途端スイは再びくつくつと笑みを浮かべ、メイメルに歩み寄った。

「そうか、おぬし魔力を扱う練習をしておらぬのか。勿体無いのう。いいか、手に集中して水を注ぐイメージを頭に浮かべるのじゃ。魔力はしっかりとしたイメージを持てば応えてくれよう」

「水を注ぐイメージ…こうですか？」

すると宝玉の中の色が段々白に染まっていく。

しばらくすると宝玉は大きな音をたて割れてしまった。

宝玉が割れると共にそれまで光でできていたスイの体が実体化した。どうやら肉体自体が封印されていたらしい。

「感謝するぞ。おぬしのおかげでワシは自由になった。これからはおぬしの国の力になると約束しよう」

「あ…はい…」

メイメルが疲れた様子で急に倒れかけたので急いで体を支える。

「魔力を使い過ぎただけじゃな。しばらくすれば元気になるであろう」

メイメルを見ると静かな寝息をたて眠ってる。

その様子を見ていたスイがニヤニヤしながらこちらを見ていた。

「なんだよ？」

「おぬし、魔力が一番大きくなるのはどんな時かしっておるか？」

「いや、知らないな」

「知らぬならよい。しばらくそのままにしておくんじゃない。」

なんでそんなに嬉しそうなんだよ…。

俺の腕の中で眠るメイメルは規則的な寝息を立てていた。

第二話 ライカンの王（後書き）

軽いなぞなぞ問題でしたが解答にたどり着けた人は居たでしょうか？

こういう問題は今後もちょうくちよく出す予定なので頑張って解いてみてくださいw

簡単すぎでつまんね と思った人は俺になぞなぞのアドバイスください。

書き溜めが増えてきたら週3〜4回更新になるかもしれません。

次は14日

第三話 脱出（前書き）

友人に特定されました。恥ずかしかったです。学校で小説のネタ言
うのやめてほしい。

第三話 脱出

メイメルが回復するまでの間俺とメイメルはスイと話をしていた。

「カイルと言ったかの？」

おぬしなかなかの力を持っておるようじゃが、レベルはどれ位なのじゃ？」

「ん？73だよ。スイはどれ位なんだ？」

スイは話してみればかなり気さくな性格だったので普通に会話が出来る程度には仲良くなれた。

「73？100レベルはあると思っておったのじゃが…ワシの目も衰えたかのう…。」

ワシは120レベルじゃが種族的な補正も入れると人の150レベル位の力かの。まあすっかり年を取って今は90レベル位の力しかないがの」

「カイルもスイも化け物みたいな能力ね。私みたいな一般人なんて役立たずじゃないの」

話を聞いてメイメルがすねていた。

確かにメイメルは俺とスイと比べたら弱いかもしれないがこの世界では十分強いと思う。

ここはフォローを入れておくか。

「そう気にするなよ。」

胸の薄さよりは自信持っていぞ！」

「黙れっ！」

メイルの蹴りが俺の顔を直撃した。

ただの冗談だったのに……

「……メイメルもとんでもないヤツを好きになったもんじゃな……」

「いてて……何か言ったか？」

「いや、おぬしはもっと紳士らしい振る舞いを学ぶべきじゃと言っただけじゃ」

スィが残念なものを見るような目で俺を見ていた。

「まあこれが俺だからな。今更紳士らしく振る舞えってのは無理だな。

話戻るけど俺は73レベルだけど剣聖だしパラメーターもいくつかは90レベル台の能力位はあるぞ」

せっかくだしここでパラメーターについて軽く説明をしよう。

パラメーターはHP MP アタック インテリジェンス テクニックス スピード 物理防御 魔法防御 ラックで構成されていて俺が使った居合い切りやフレイムソードはスキルに分類される。

スキルには種族固有の物もあり、鳥翼族の飛行なんかがそれに当たる。

そのほかにも職業スキルもあり、剣聖には剣技スキルの消費MPを抑え、発動までの時間短縮、命中や威力の上昇ボーナスが付く「達

人剣」がある。

ただ達人剣は剣技スキル以外のスキルダメージの30%減少というデメリットがあるので俺の魔法は相手が強いとひるませる位にしか使えない。

大体200レベルになると各パラメーター平均が600〜700で職業毎に特化したパラメーターは900位になる。

100レベルだと平均300〜400になり、特化したパラメーターは600位だ。

ちなみに俺のパラメーターはこんな感じ

HP 247
MP 121
アタック 217
インテリジェンス 130
テクニック 382
スピード 420
物理防御 186
魔法防御 103
ラック 62

スィが100位だと思ったのはテクニックやスピードが100レベル並の数字だからだろう。

スィとメイル、メイメル有能力も後で機会があれば聞いておこうと思う。

「なる程のう。ワシの目もあながち間違つとらんか」

満足気にスイが笑う。感情の分かりやすいヤツだな。

「ん……」

「おっ、起きたか。体調はどうだ？」

「……カイル様、私は？」

「魔力の使い過ぎだつてさ。辛いならもう少し寝ててもいいぞ」

俺がそう言っているとメイメルは自分がどこで寝ていたのか気づいて飛び起きた。

俺はスイの言う通りにメイメルを膝の上で寝かしていたからだ。

「あああのカイル様私っ！」

顔を真っ赤にしてパニックになっているメイメルにスイがイタズラめいた口調で追い討ちをかける。

「なんじゃ。せつかなのじゃし甘えとけば良からう。うぶなやつじゃ」

「ス、スイさん！何言ってるんですか！」

「我が主の幸せを願うのは当然じゃろうに。時間も時間じゃ、そろそろ洞窟の外へ行こうぞ」

スイはメイメルの反応を見て十分回復したと判断したようだ。

メイメルを上に乗せ洞窟の外へ向かう。
俺達もそれに続いて外へ向かった。

外に出るとすっかり日が沈みきっていた。

「うむ？なんじゃこの死体の山は？おぬしらがやったのか？」

「ああ・・・まあな」

気まずい。一緒に落ちたとかマジ気まずい。

スイは俺の顔みてなんで自分のところに来たのか察したらしい。特に何も言われなかった。

「ん？なんかあそこ光ってないか？」

「ああ、ここは昔宝石の原石の採掘場だったらしいの。おぬしらが岩盤を壊したおかげで石が表にでてきたのじゃろう」

「へえー じゃあ取れるだけとっておこうか」

俺達はいそいそと石の採掘を始めた。まだそれらしき宝石が見つかり結構な金になりそうだ。

「で。どうやってここ出るのよ？」メイルがあきれたように尋ねる。
そういえばすっかり忘れていたがここは谷の底。

どうやって出るのか聞いてない。

スィに訪ねてみると自信満々な様子で背中に乗れと言うので乗せて貰った。

「で、どうするんだ？」

「見ておれ。この程度の崖など軽く登ってみせよう」

スィは体制を低くして徐々にスピードをあげていき崖を登っていった。

ジェットコースターの安全バーのありがたみがよく分かったよ。

谷に居たのは半日位だったが感覚的にはもっと長く居たように思える。

辺りは真っ暗で森の中からコオロギのような鳴き声だけがかすかに伝わってくる。

「久々の外は気持ちがいーのう。してカイルよ。今日はどこで休むのじゃ？ここの辺りは森だけじゃったんじゃが近くに町か何かできたのかのう？」

「ああ、それなら心配ない。近くに仲間の砦があるからそこで休もう。メイメル、メイメル立てる？」

二人に確認すると先程の崖登りで腰が抜けて動けないらしい。

じゃあ俺とスイで分担して担ごうと提案したのだが二人がスイの背中に軽いトラウマを覚えているらしく、俺が往復して運ぶ事になった。

スイがニヤニヤしてたのが気がかりだったが気にしなくてもいいだろう。

俺は先にメイルを運ぶ事になった。

スイがメイメルと話したいことがあると言ったためだ。

暗い森の中、俺の足音だけが鳴り響く。

「ねえ、カイル」

「ん？何だ？」

「あんた何でそんなに強いのか？まだ20歳にもなってないんでしょ」

そう聞いてきたメイルはとてもいい笑顔をしていた。

砦はまだ遠い。

「：俺には師匠が居てな。

そりゃバカみたいに強い人だった。」

俺はまだゲームとしてこの世界を生きていた頃の事を思い出しながら話を続ける。

「師匠は厳しい人でな。

よくライオンは息子に試練を与えると云うがあれば完全に殺す気満々だったな。

何回死にかけたか数え切れないよ」

「ふふっ。その人は今どうしてるの？」

「：死んだよ。若くして病気でな。

死ぬ間際まで病気を隠していきなりもうダメって言う辺りが師匠らしかっただよ」

俺の師匠はリアルではガンを患って寝たきりだった。

余命一ヶ月になった所で俺に全てを打ち明けこの世界から消えた。

後ろを向くとメールが気まずそうにしているのが見えた。

前方に砦の明かりが見える。

俺達は無言のまま砦に着き、砦の兵士に何があったのか説明した。

同時刻、森の中

「ふむ。ようやく二人になれたの。

おぬしと話したい事とは契約についてじゃ」

空色のライカンにもたれながらメイメルは耳を傾ける。

「おぬしがあの谷に落ちたのは実は偶然では無い。
ワシが神に頼んだ事なのじゃ」

「じゃあ神様にどんなお願いをしたんですか？」

「ワシはライカンの王になった後ワシの主になるにふさわしい者を
探しておったんじゃがな、いつまでたっても見つからんからその者
が現れるのを待つことにしたんじゃ」

「それでは何故あんな所に封印されたのですか？」

「ワシがそう決めた時、神と名乗る者が上から降りてきてな。
肉体を維持するためにも封印すべきと言われ、なら主になる者が現
れたらワシの所に導いてくれと頼んだのじゃ」

「それじゃあ私たちが谷に落ちたのは神様のお導きなんですね」

「話が早くて助かるの。」

おぬしはワシの主に相応しい魔力を秘めておる。
ワシの封印を解いた事で契約はすでに結ばれたのじゃ」

「契約ってなんなんですか？」

「簡単な事じゃ。」

ワシに魔力を分けてもらう代わりにおぬしを守るというものじゃ。
魔力はおぬしから自然に放たれるものを貰うから心配はせんでよい
ぞ」

「はい。よろしくお願いします。スイさん」

「うむ。ワシの力、おぬしの思うように使うがよい。あとワシの事はスイでよいぞ。」

これで話したい事は終わりじゃが、ワシがこの姿で人の前に出る訳にはいかな。

良ければそなたの服を貸してくれぬか？」

「え？でも私は女ですよ？」

「ふっふっふ。ワシもれっきとしたメスなのじゃ。人の姿になるのはいつでもかろう」

メイメルが一番驚いた瞬間であった。

第三話 脱出（後書き）

次は18日

第四話 王都ルイン

砦の中では兵士達が勝利の宴を開いていた。

俺達が谷にいた間も飲んでいたらしく何人か地面に倒れ寝ている人がいる。

こんな酒どこから持ってきたのか と聞くと近くの町の酒を買い占めたらしい。

それでも人数が多いので一人酒一ビンほどの料金で済むそうだ。

「それじゃ・・・乾杯！」

俺達もすぐ宴会に参加して一時間がたった。

そして問題発生。

俺とスイはあまり酔ってないんだが：

「まさかこんなに酒癖が悪いとはのう…」

そう呟いたスイは人の姿になりメイメルの隣に座っている。

本人はもう年と言っていたがどう見ても20台前半の美人さんだ。

だがスイはぐったりした様子でこちらを見ている。

俺にはどうしようもない。

なぜなら

「すくすく。あんたももっと飲みなさいよ」

「いや、ワシはじゃな…」

「何よ！ご主人さまに刃向かうつもり！？良い度胸ね！あんたなんかこうよ！」

そう言ってスイの空色ロングヘアを楽しそうに引っ張ってるのが何を隠そう、メイメルだ。

「メイメルは一瞬で気を失ったからまだ良かったんだが…」

「そう言うなら助けてくれい…」

「ムリっす」

「何楽しそう話してんの？」

「カイルも飲みなはい飲みなはい！」

「ろれつが回ってないぞ。そろそろ止めとけ」

「やだ！まだ飲めるもん！」

顔真っ赤でベロンベロンなメイメルの暴走がさらに酷くなって来ている。

「ところでカイル？」

「な、何でしょう…?」

やな予感。

「あんたさく、好きな人は、居ないの?」

は、はあ?

急に何なんだ。

確かにメイメルとキスした時はドキツとしたがあれはただのおまじないのはず。

ということはメイメルは俺を異性としては見ていない…はず。

こは無難に行くべきだろう。

「居ないよ。モテないし」

「なあんですってえ!」

正直に答えたのにメイメルの逆鱗に触れてしまった。解せぬ。

「あんた私のファーストキス貰っという随分な言い草ねえく!」

「でもあれはおまじないじゃあ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後の事は思い出したくない。

悪夢の一夜が明け、俺達は王都へ戻るため馬車に揺られていた。

メイメルは寝たきりでメイメルも辺りを警戒するのに忙しく、スイと俺は密かにメイメルに二度と飲ませない同盟を結んだりしていた。

馬車の移動の間特にこれといった出来事はなかった。

王都ルインは人口100万程の大都市だった。（ちなみに世界人口は5億人居ないらしい）

商業が盛んで ルインに居れば手に入らない物は無い　なんて言葉もあつたらしい。

何で全部過去形？と思った人も居ると思うが、今のルインはマドラが攻めてきて商人がほとんど居ない。

それでも根性の入った商人さんがちらほら見える。ぶっちゃけ俺達がマドラを撃退したので彼らは勝ち組だろう。

近くに装飾品を売ってる商人を見かけたので先に行つてと伝え覗いてみた。

「売れますか？」

「ああ装飾品はあんまりだな。その代わり持ってきた食料類は完売しちゃったよ」

そういう商人さんは儲けが多くてうれしそうだ。

ふーむ、ネックレスに、指輪に、お、これは魔力石かな？

魔力石は近くにMPを多く持つ人が近づくと淡く光るのが特徴で、長い間持ち歩くとMPを溜め込んでくれる。戦闘中MPが切れかけた時石を割れば溜め込んだ分を回復できる。

ポーションと違い回復量が段違いなのがいい点、一回しか使えないのがダメな点だ。

一通りみたが中々いいものもいくつかあるな。こんど何か買っておこう。

商人に集めた宝石類を鑑定してもらうと結構な額になった。（詳細な値段は今度通貨の説明のときに）

俺は商人にまた来ますと言って王宮に行くことにした。

走って馬車を追いかけると王宮の門まであと少しというところで追いついた。

王宮に着くと門番達が姫のお帰りだ！

とやたら騒がしい。

普段タメで話してるけど聞かれたらどうなるやら。

しばらくすると近衛の人が3人ほど出てきた。

ヒゲ面の男がリーダーらしい。体つきとか雰囲気が他のヤツと違うし。

「メイメル様よくお戻りになりました！

王と王妃がお待ちかねですのでこちらへ。

隣の方々は？」

「俺はカイルです」

「ワシはスイじゃ」

名前だけ簡潔に言ったのだがヒゲリーダーが驚きの表情を浮かべた。

「カイルと言いますともしかしてマドラ軍を退けたのはあなたですか？」

「ええ。そうです」

「話は砦の兵士から聞いてますよ。
ぜひ王に謁見願います」

「なあ、ワシはどうなるんじゃ？」

「スイ殿は別室待機になるかと」

「ロイド。彼女は私の専属護衛よ。

お父様とお母様にも顔を覚えてもらうわ」

「専属護衛ですか。それは失礼しました。
では私について来て下さい」

そこの狼、どや顔止めろ。

第四話 王都ルイン（後書き）

次は21日です

何気に文字数1818

第五話 一休み（前書き）

ケータイの右上に表示される文字数よく見たら1文字で2減ってる
ことにいまさら気づきましたOTZ

あとハーレムタグ消去、俺には無理でした

第五話 一休み

俺達はヒゲリーダーに案内され王の間に案内された。

エスペリアは滅びかけの国といえどもやはり王宮は豪華だ。

兵士も沢山いるし廊下には色んな絵や銅像がある。

ルインの内10%はこの王宮で埋まってるんじゃないかと思う。

メイメルの話によると王様と王妃様は中々クセのある人らしい。

悪い印象をもたれないよう気をつけねば。

ヒゲリーダーが扉を開け、メイメルが王の間に入る。俺達もそれに続く。

王の間には護衛が両脇にズラリと並んでいる。どいつも屈強そうな体つきをしていて武器を取られなかったのもうなずける。

立派なヒゲをはやした人が玉座に座っている。あれが王様なんだろう。

「おお！メイメルよくぞ無事で！」

心配しとったぞ！」

王様がメイメルの帰還を喜んだ。

メイメルもニコリと笑っておじぎをした。

「お父様とお母様もご無事で何よりです。

こちらは私を助けて下さったカイルと専属護衛のスイです」

次いでメイメルが俺達を紹介する。王様は俺の名前を聞いて少し驚いているようだ。

興奮気味に王様が俺の方を向いた。

「おお！そなたがわが国を救った英雄か！
よくぞ参ったな」

テンション上がりすぎて唾飛んどるがな。

てかなんで俺達より早く情報が飛んでるのか気になるところだ。

「してカイルとスイと言ったな。レベルはいかほどのだ？」

「73です」

「90じゃ」

スイは年齢補正入れたレベルを言った。

王の間にいた近衛達からどよめきが起こる。

まあ成人すらしてないヤツと見た目二十歳くらいの女性がこんなレベルって普通ありえねえしな。

案の定王様はさらに興奮した様子だ。

「若くしてそれ程の高レベルとは！ぜひ我が軍にほしいところだな
！」

「怒らせたら私達ひとたまりもありませんね、あなた」

いや王妃様着眼点おかしいだろ。
クセの強い人っていうのもなんとなく分かる気がしてきた。

「ええ。私の自慢の護衛です。お父様」

メイメルもスルーってことはいつもこんな感じなんだろうか。
でも仲よさそうな家族だな。

もう俺は家族に会えないから少しうらやましい。

そんな感じで謁見は終了。

王様は気さくな人で知られていてお祭りとか色々な催しをするので
人望があるのだとか。

王妃様は一度お城を抜け出したことがあるらしい。天然っぽかった
けどおてんばなのかな？

なんでも依然エスペリアは侵略の危機にあり、義勇兵を募り、体制
を立て直すとかで人手が足りず、後日任務を頼みたいそうなの。
やな予感しかないけど断る訳にはいかないのが辛い。

まあよくゲームとかで見るふんぞり返った王様だったら逃げてるけ
どな。

「にしても広い部屋だな。落ち着かねえ」

「ワシもじゃ」

スイもそれに同意する。

俺達が案内された部屋は普通の家くらいはあるかという大きさと高
そうなベットが2つおいてある。

おそらくメイメルは自分の部屋があるんだろう。

銭湯位の広さに高そうな絨毯やら像やらが気になって仕方がない。

少し狭い方が落ち着くタイプなんだけどな。

この王宮に狭い部屋なんてなさそうだから諦めてるけど。

「そーいやメイメルは？ 護衛しなくていいのか？」

メイメルの専属護衛がこうやってくつろいでるし大丈夫だとは思うが、気になったので聞いてみた。

「メイメルなら用事があると言っておったぞ。

まあワシは契約を結んでおるからメイメルに何かあったらすぐ分かるし大丈夫じゃろ」

スイはシッポをパタパタ振りながら返事を返した。

スイはメイメルが何をしているのか知ってるみたいだ。

王宮内だったら危険もないだろうしスイも安心しているのだろう。

「ふーん。じゃあ暇だし探検してくるか」

広い部屋で落ち着かないし、今日はもう予定が無い。

王宮の探検も面白そうだが町探検もしてみたいし今日を逃すとしばらく機会がなさそうだ。

「気をつけてな。ワシは寝るとしよう。年を取るとつらいのう」

さして興味が無いのか、あくびをするスイに手を振り俺は部屋を出た。

城下町は中央通り、東通り、西通りがあって俺達を通ったのは中央通りだ。

東通りは日本で言う商店街、西通りは住宅街となっている。王宮の裏側には森が広がっていて山菜をとりに行ったり狩りに行く人も多いらしい。

まずは昨日の商人のところに行こつと。

昨日確認した値段分のお金を持って俺は城下町に出た。

町は次第に活気を取り戻しつつあるのか、それとも情報が伝達されたのか、昨日いなかった商人や町に住む人達が結構往来している。

俺はまず昨日の商人の所へ向かった。

「おっす！もうかってますか？」

「ぼちぼちだね。何か買いにきたのかい？少しならおまけするよ」

「お。おっちゃん話わかるね。これほしいんだけどどれくらいならまけてくれる？」

「そうだね、これは銀貨20枚だから銀貨3枚まけるよ」

「もう一声！」

「むう……、しょうがないな！銀貨5枚まけちゃう！」

売り上げ好調なおっちゃんはかなり乗せやすいな。

これからもちよくちよくまけてもらうか。

~~~~~ちなみに簡単な通貨説明~~~~~

小銅貨・・・日本円で10円くらい

銅貨・・・日本円で100円くらい

小銀貨・・・日本円で1000円くらい

銀貨・・・日本円で1万円くらい

金貨・・・日本円で50万くらい

お金はこの世界ではすべて共通通貨なので日本円⇔ドルといった感じの換金などは存在しない。

昨日俺が換金した石のお金は金貨1枚と銀貨20枚になった。残りは金貨1枚と銀貨5枚。

その後しばらく町を歩き俺は住宅街らしきところに来た。

「しまったな…迷ったか？」

周りは家が立ち並び王宮がどこにあるのかがここからじゃあ見えな  
い。

俺が困っていると三人組の小さい子供達が俺に話かけてきた。

「お兄さん、もしかして迷子？」一番背の小さい女の子がおどおど

しながら聞いてきた。

着ている服は地味だがほつれや汚れもなくきれいだ。

「ああ、そうなんだ。よかったら王宮が見える場所まで案内してくれないかな？」

俺は子供達に  
銅貨を2枚ずつ渡して案内を頼んだ。

狭い入り組んだ道を迷いなく進む子供達は俺に興味津々のようだ。

「ねえ、お兄さんはどこから来たの？」

三人の中では一番大きい男の子が目をキラキラさせている。

「山奥の村から来たんだ。俺はめっちゃ強いんだぞ」

そういつて背中の大剣をポンポンと叩く。子供達はスッゲーと言ってくれた。

「じゃあお兄さんは砦の勇者より強いのか？」

「ん？ああ…まあ互角かな？」

同一人物だし。

「ところでなんでそんなに情報が伝わるの早いんだ？まだ1週間経ってないだろ」

「お兄さんホントに山奥で住んでたんだね。伝書バトが王都に来て翌日には新聞に載るんだよ？」

無知で悪かったな。

俺がへーと言うと子供達が笑っていた。

子供達に案内してもらって王宮に戻ってきた。

まだ時間があるので今度は王宮内を探検してみよう。

しばらく庭に沿って歩いていると図書室らしき所を見つけた。

取りあえずこの世界について詳しい情報があった方がいいかな。

「…お邪魔します…」

そーっと扉を開けて中を確認する。

よし、誰も居ないな。

それからしばらく歴史について書かれた本を漁って大体のことは把握した。

特に地形図は今後役にたつと思いぬす…借りておいた。

ほかにもこの国のおとぎ話や伝記もあったなかなか面白かった。

夢中になって読んでる内に日も暮れ始めた。そろそろ戻ろうとした所で入り口に本が落ちてるのに気づいた。

「こんなの落ちてたっけ？」

きつと近くの本棚から落ちたに違いない。

気になったので中身を確認してみようとしたんだが…。

「何だ中身真っ白じゃん」

何も書いてなかったので適当な場所に閉まっておこう。

「じゃ、失礼しました」

部屋に戻るとメイメルが戻ってきていた。

「よう、どこ行ってたんだ？」

「少し用事があったんです。  
スイは散歩に行きました」

「ふーん。ところでそのケーキどうしたんだ？」

机の上には野イチゴの乗ったショートケーキが置いてあった。

「あ…これは…」

「どれ早速一口」

「…どうですか？」

ふむ、クリームは甘さ控えめで野イチゴも程よい酸味。スポンジの  
焼き加減もいいな。

「うめえじゃん。誰が作ったの？」

「あ、私…です」

「マジ？じゃあまた今度作ってくれ」

あっという間に平らげてメイメルに頼んでみた。

「もちろん良いですよ」

メイメルは嬉しそうに笑っていた。

「じゃあメイメル、お礼にこれ、魔力石が埋め込まれてるから肌身離さずつけといて」

そういつて俺はメイメルの手に指輪をはめた。

メイメルは何度も自分の手を見てはうっとりしているので気に入ってくれたようだ。

俺はその日、久々にゆったりとした時間を過ごした。



## 第五話 一休み（後書き）

次は25日です

## おまけ1 メール奮闘記(前書き)

こないだ電車の中でおなかを壊して死にそうになりました。

すこし危ないかなって所でトイレに行くのをオススメします。

## おまけ1 メール奮闘記

私は馬車の中で揺られていた。道はデコボコで揺れるたびに頭が痛い。

これが二日酔いというものなんだろうか。

お酒を飲んでる間のことはほとんど覚えていないが、カイル様の事をカイルと呼び捨てにしていたのは覚えてる。

：せ：せっかくだからこれからはカイルと呼び捨てにしよう。うん。  
思えばベアーウルフに襲われそうになった所に現れた彼、カイルはとてもカッコ良くて（実際イケメン）、私は初めて恋をした。

いわゆる一目惚れというやつだ。

それ以来おまじないと称して口づけをしたりしたのに、彼はなかなか振り向いてくれない。

あ、普段のしゃべり方は意識してしゃべってます。一応こっちが素のしゃべり方。

王女らしく振る舞えといわれててね。

数日間の馬車移動の内に何とか二日酔いも治った。

久しぶりの王都は信じられないくらい静かで依然のルインと同じ場

所だとは信じられない。

それでもお父様とお母様に再会出来るのは嬉しいし、将来私の隣に居るかも知れない人も居るから、紹介…いるよね。

王宮に着くと懐かしい人がたくさん出迎えてくれて、再会したお父様とお母様はとても元気で安心した。

カイルとスイは先に部屋へ戻ったが、私は会いたい人が居るので別行動。

小さい頃、よく話相手になって色々な話をしてくれたメイドさんのシャーリーや私の遊び相手になってくれた護衛騎士のロイドとリー。

みんな元気で何より。

部屋に戻るとカイルは居なかった。

自由奔放な人ね。

まあスイと二人なら恋愛相談もできる。見た目は若くても長い人生を生きてきた人、もとい狼だし。

頼りになると思う。

「ねえスイ、カイルを喜ばせるにはどうしたらいいでしょうか？」

スイは私の恋について知ってる。ていうかバレました。

きつと素晴らしいアドバイスを

「なんじゃ。そんなの寝ている所に薄着で襲いかかれば良からう」

アテにした私が間違ってるのかしら：

「という冗談はさて置き、ここは好きな食べ物を作る、というのはどうじゃ？」

馬車の中では肉ばかりじゃったしの」

なる程、美味しい物に飢えてる時を狙うのね。

「それを早く言って下さい。でもカイルは何が好きなんでしょうかな？」

「それについても抜かりはない。ちゃんと馬車で聞いておいたからの。」

カイルはイチゴの乗ったショートケーキが好物らしい」

やはり頼りになる。

「それじゃあ早速調理場に行つて来ます」

「うむ。頑張るのじゃ。ワシの分も頼むぞ（我ながら完璧じゃな。久々のケーキが楽しみじゃ）」

所変わって台所

私はシェフの方々に作り方を教えてもらい、材料の確認をした所で問題を発見した。

「…イチゴが無いですね。どうしましょうか？」

イチゴは王都では商人さんが持ってくるのを買う以外方法はない。

とりあえずロイドを護衛として連れて商人を当たってみよう。

「ないですね・・・」

考えてみれば当たり前ね。商人が減って食料も足りなくなってるんだからイチゴが売れ残ってる訳ないわ。

私がため息をつくるとロイドが何かをひらめいたようで話かけてきた。

「メイメル様、小さい頃野イチゴ狩りをした森へ行ってみるのはどうでしょうか？」

ああ、あそこは確かに野イチゴがなっているわ。

小さいころまだ育ちきつてない野イチゴをお父様に食べさせてしまったことがあったし。

ダメもとでいいから行ってみようか。

「そうですね。確か近くの森に野イチゴがあるはずですし、それを代わりにしましょう」

こういうのは味よりも気持ちちが大事だと小さい頃シャーリーも言っ

てたからね。

昔の事を思い出しながら私は王宮へ戻った。

その後ロイドと別れてスイを連れて私は外れにある森へ行った。

ロイドは専属護衛のスイが居るなら自分はいらないと言って軍務に戻ってしまった。

彼は面倒見が良すぎて部下が悲鳴をあげることでは有名なのよね。少しだけ部下の兵士さんがかわいそうだわ。

森は昔と変わらない風景でした。最近は行ってなかったのだから懐かしさを覚える。

この森は木と木の間隔が広く、見通しがいいのが特徴だ。

早速スイと手分けして野イチゴがありそうな所を探してみた。

「うーん、ないわね…」

誰かが野イチゴを大量に取って行ってしまったらしく、野イチゴが全く無い。

まあ食糧不足だったら皆取りにくるわよね。

「どうでしょうか…?」

イチゴのないケーキなんてケーキじゃないわ。丸腰の剣の達人みたいなものじゃない。

「メイメルよ! あれを見るのじゃ!」

あきらめかけていた私はスイの指差す方を向いた。

よく見るとガケに野イチゴがなっているのが見える。

あれだけには取れなかったんだわ。

「よく見つけましたね。…でも、どうやって取りましょう？」  
根本的に不可能じゃない…

「ふむ。魔法を使えば何とかなるかも知らぬな。

良い機会じゃし試して見る価値はあるじゃろう。前にも言ったが魔法はイメージじゃ」

私はスイの言うとおり野イチゴを取るイメージを頭に浮かべ魔力の流れを意識した。

体から魔力が流れ出すのがわかる。私からあふれ出した魔力は野イチゴに向かって伸びていく。

するとガケになっていた野イチゴが浮いてこちらに向かってくる。

私は魔力を使う感覚を全身で感じながらイメージをしっかりと維持した。

「これだけあれば十分ですね！スイ、早く帰りましょう！」

私は魔法を使いかなり興奮していたと思う。

もっと練習すれば戦闘に使えるかもしれない。

いつまでもカイルとスイに頼りつきりじゃあ王女としての面目がないものね。



「うむ。上出来じゃな」

スイが満足気に頷いている。とりあえずは合格点ってことかな。

「ワシはもう少し森を散歩してから帰るから先に帰ってくれぬか」

狼も散歩するのかしら？

そう思うと少し面白い。スイがお散歩って想像できないもの。なんとか笑いをこらえながらスイに向きなおる。

「そう、遅くならないようにね。じゃあ私はもどるわ!」

私は野イチゴを持って急いで戻りました。

早く作らないとカイルにばれちゃうからね。

「最後しゃべり方が違ったがあれが素なのかのう?」

後ろからスイのそんなつぶやきが聞こえた。

しまった。素が出ちゃった。

その後カイルに指輪をもらった。私の努力を神様が見てくれていたんだと思う。

こんなご褒美が待っているとは思っていなかったのでもううれしい。

私が指輪に触れると、指輪は淡い黄色の光を発した。



**おまけ1 メール奮闘記（後書き）**

メール実はおてんば系

次は28日

## おまけ2 鳥かご(前書き)

ここから物語が進みます。

## おまけ2 鳥かご

今日もまた、同じことの繰り返し。

起きて、学びたくもないものを学ぶ。

そしてまた眠り、明日を迎える。

私は小さい頃から感情の乏しい子供だった。

けれど、それでも毎日が充実していた。

色々な話を聞いたり、図書室に行って本を読んだりするのが楽しかった。

いつからだろうか。両親が私に家庭教師をつけて以来、ほとんど図書室には行っていない。

あそこには昔の私が居るはずなのに。

本を読みあさり毎日に彩りがあったあの頃の私が。

いつも夢で昔の私が私に言う。

こんな鳥かごの鳥のような生活、楽しいの？

私は答える。

だってしょうがないもの。  
私にはどうにも出来ないの。

すると昔の私は私を冷ややかな目で見る。

あなたは諦めてるだけ。

逃げようとしないうれな鳥よ。と

そう言い残し昔の私はどこかに消えた。

両親の友人はいつも私を見て誉めてくれる。

でも私にはわかる。小さい頃から色々な人を見てきたから。

あの人も、あっちの人も、みんな両親に取り入る事しか考えていない。  
い。

本当に私を見てくれる人なんてここには居ない。

ある日の夜だった。

私が部屋で空を見ていると、彼はやってきた。

何で泣いてるんだ。

せっかくの顔が台無しだぞ。

そう言っておどける彼はどこから入ってきたのか、誰なのか。

それは分からない。でも。

私のつまらない毎日に彩りを加えてくれるには十分だった。

それから私には楽しみができた。

彼が話してくれる話はいつも面白い。

どうやって入ってきたのかとか、あなたは誰なのか。

聞いてみたけど彼は名前以外は何も教えてくれない。

私はもっと知りたい事があるのに。

ある日、私は彼に全てを話した。

全てを静かに聞いてくれた彼は泣いていた。

何で泣いてるの？

何で泣いてくれるの？

すると彼は私と約束してくれた。

あなたを必ずここから出してみせる。

それまでお別れだ。

それ以来彼は来なくなった。

私はまたつまらない毎日に戻ったけれど、いつか彼が私の鳥かごの扉を開いてくれる。

そう思うだけで毎日を生きていられる。

いつの間にかかなりの時間が経ったみたいだ。

そろそろ昼の勉強が始まる。

早く用意しておかないと。



コンコン

家庭教師がきたようだ。

私はいつも通りの声で返事をして扉を開けた。

いつの日か彼がこの扉を開けてくれると信じて。

**おまけ2 鳥かご（後書き）**

今回は2話掲載

## 第六話 飛竜の棲む国（前書き）

休みの日、起きたら昼だとすごく損した気分になるよね。

## 第六話 飛竜の棲む国

夜、俺はスイと今後について話し合っていた。

メイメルはキーキを作るのに体力を使ったらしく、もう自分の部屋にもどっている。

まだ時間的には夜の10時くらいなのであんまり眠くない。

「指輪のプレゼントとはなかなかやるではないか。見直したぞい」

そう言ってスイはくつくつと笑う。

人の色恋沙汰を笑うとはおしゃべり好きなオバサンみたいだな。俺は若干恥ずかしさを感じながらイスの背もたれに体を預ける。

「まあ酔ってたとはいえ怒らせちゃったからな。

へたしたら敵国に行くかもしれないし、魔力石の指輪は一石二鳥でいいかなって。」

スイ曰くメイメルはかなりの魔力をもってるらしい。

きっと効果も大きいだろう。

メイメルはレベル8らしいがなんで魔力がそんなにあるのか不思議だ。

「ほう、魔力石か。護身も兼ねとるんじゃない。

ところでカイルよ、他の国に行くかもしれないけどどうということじゃ？」

聞き返してきたスイは狼の姿に戻っている。

理由を聞くと人の姿じゃと襲われるからのう。  
とからかって来た。

俺はベッドに腰掛けスイは地面にうつ伏せだ。

「ああ、王様の態度や今のエスペリアの現状からすると多分敵国に  
送り込まれる可能性が高い。  
それもとびっきりの命令付きでな」

俺はひとつため息をついた。

あれだけ評価されてるんだから無茶言われるに決まってる。

「ふむ、ひと暴れしてこいということかの？」

「それは分からない。けど楽しみだな」

「そうじゃな、化け物みたいなレベルが二人じゃからな」

ふっふっふと不敵な笑みを浮かべるスイと俺。

あ、そういや

「ところで俺の好物はいつからケーキになったんだ？」

「…何のことやら」

しらを切っても無駄だ。

「スイに教えてもらったってメイメルは言ってたぞ？」

「……………」

「……………」

「……アウーン」

狼のような鳴き声を出してスイは部屋の外に出て行った。

…都合の良いときだけ狼になるのは止めろ。

翌日、俺、メイメル、スイの三人は王の間に呼ばれた。

昨晚スイと話した事とほぼ同じだった。無茶な内容も含まれていたが。

大切な部分の会話だけを抜粋してみた（そのほかはウチの騎士団にとかウチは何が有名だとかどうでもいい内容だった）

「マドラとリージアで戦争を？」

メイメルが驚いた様子で声をあげた。

王の間に呼び出され俺、メイメル、スイの三人は王様の前に立っている。

「うむ、現在マドラとリージアは一触即発の状態にある。そこに起爆剤を投下してほしいのだ」

確か国境線で小競り合いしてるんだっけか。

「なる程のう、大国で戦力が拮抗してる二国同士がつぶし合いをしてるすきに体制を整えるんじゃないな」

「戦争してる間うちに構ってる暇や余裕はないよな。攻められる心配もほとんどなくなるって訳だ」

王様の言葉に俺とスイは頷く。

まあどっちかに敵国の奇襲か何かだと思わせればいいだろうし、俺達のレベルを考えれば楽と言える。

「で、他には何もしなくていいんですか？」

「うむ、余裕があるならばリージアの王と会って同盟を結ぶか国家機密の一つや二つ持ち帰って欲しいぞ」

まあこんな感じだ。

マドラはこないだウチに攻めてきたから同盟を結ぶならリージアだろう。

しかも同盟を結んだらマドラにちよっかいかける必要が無くなる。

もし断られたらマドラを襲撃しよう。

国家機密は論外。無理です。

昼過ぎには身支度がすみ、俺達はリージアへスイに乗って向かうことに。

メイメルは来ないと思っていたがスイと俺が居ること、もし同盟の交渉になった時王族がいれば印象が良くなること、そして一度言い出したら絶対諦めないことが考慮されたくついて来ることに。

馬車を使わないのは目立たないようにするためと山道なので馬車は使いにくいためだ。

リージアは飛竜が沢山生息する山の多い国だ。

500年ほど前から長い間続いてきた歴史のある国で、森の中には遺跡や人が掘ったとみられる洞窟が多々発見されている。

エスペリア側には森、シドム側には川が流れていて守りに関しては圧倒的に優れているが、人の住める場所が少ないせいで兵力が乏しいのが弱点。

それでも飛竜部隊は戦いで一騎当千の働きをみせる。

空からの攻撃はひとたまりもない威力らしい。

宝石の出る鉱山もあるらしくチャンスがあれば宝石の一つ二つ持ち帰りたいものだ。



スイに乗った俺達はリージアの王都ゴートへ続く山道で野宿することになった。（スイは馬車だと2日はかかる距離を半日で進んでしまった）

天気は快晴、人と会うこともモンスターと会うことも無かったため俺達は旅行気分で移動していた。

野宿の準備をしていると俺達の居る所の上を飛竜が飛んで行った。俺達の周りに影がかかる。

飛竜はあっという間に遠くにいつてしまった。おそらく巣穴に戻るところなんだろう。リージアの所有している飛竜は鎧を着ているらしいからな。

「あれが飛竜ですか！？あんなに大きいんですね」

メイメルが驚くのも無理はない。

飛竜は小さくても体長が5メートルはあるし、大人になると火も吹けるようになるらしい。

日本に居た頃は一度見てみたいと思っていたが実際に見るとかなり怖い。

「まあ数が少ないのが救いってとこだな。リージアが大切にすることもわかるよ」

強いヤツほど数が少ないのは自然界の掟だから当然飛竜以外の竜族も少ない。

「でもなんでリージアに多く生息してるんでしょうか？」

「それは飛竜が高い所に巣穴を作る習性を持っておるから いう

説が有力じゃな。リージアは山ばかりじゃからの」

スイがおばあちゃんの知恵袋的な知識を披露した。

口に出したら一瞬で天国のジジイと再会決定だな。

余計なことは言わずに俺はせっせと野宿の準備を再開した。

野宿の準備が終わった。

周りはすでに暗くなっていて俺達はランタンを3つ使っている。

周りは森で虫がうつとうしい。

もう少し進めば村があるのだがスイも疲れていて、暗くて危ないし仕方ない。

適当にモンスターを狩って晩飯を済ませ俺達はすぐに眠りについた。

「…き……じゃ」

……? 誰だ?

「起きろと言っておろう!」

いきなり殴られた。ぐふっ……………。

目を開けると俺の上にスイが乗っているのが見えた。

狼の姿なのが残念だ。

顔に出ていたのか、スイがジト目で見ている。

「：何を考えてるかは何かぬが、緊急事態じゃ。敵がおる」

「なにっ！」

俺は剣を握り辺りを見回したが、敵らしい姿はない。

森の中に居るのか？

「すでに囲まれておるぞ、どうする？」

よく見るとスイの上にメイメルがヒモでくくりつけてある。

ああ：起きないんだね：

こんなに寝起き悪いヤツだったかな？

なんか調子狂うな。

森の中からガサツという音がした。

敵はすぐそこまで来ているようだ。

俺は剣を構え腰を落とす。

「俺が敵の相手をするからスイはメイメルを守ってくれ」

そう言った瞬間辺りが煙に包まれた。

煙幕か！

俺はすぐに剣技スキル『烈風斬』を放った。

烈風斬は風を起こす技だ。

発生した風は煙を一気に吹き飛ばし、見晴らしの良くなったところに敵がわんさかいる。

どうやら煙で視界を奪ってる間に袋叩きにするつもりだったらしい。

一番近い敵に接近し攻撃しようとするのと遠くから弓が飛んできた。

とっさに剣ではじく。

しかし、わずかな隙だったが注意のそれた俺に敵が切りかかってきた。

「しまっ…！」

避けきれなかった俺の左腕に痛みが走る。

「っ…！何が目的だ！」

「黙れ！国王の犬が！」

敵が剣を大きく振りかぶり振り下ろす。

俺は右手一本でそれを受けた。

俺と敵の剣がぶつかり火花を散らす。

押し返せない！

片腕とはいえ力勝負でこの世界の俺に適うヤツがスイ以外に居るのか！？

「国王の犬？何のことだ！」

敵から距離をとった俺は息を整える。

「お前…何者だ？」

「…お前こそ俺の剣を止めるなんて犬の癖にやるじゃないか」

悲鳴が聞こえ、横を見やるとスイが周りの雑魚を大分片付けていた。

「ちっ、逃げるぞお前ら！」

相手もそれに気づいたようで、もう一度煙幕を放ち逃げて行った。

俺は烈風斬をもう一度放ったが、敵はみんな逃げてしまったようだ。

「……あいつら、何者だ？」

地面に座り込んでつぶやく。

「さあの。とりあえずここは危険じゃ。移動するから早く乗るのじや」

「…す…す…す…」

「てかメイメルまだ寝てるのかよ！」

**第六話 飛竜の棲む国（後書き）**

次は10月2日

## 第七話 王都ゴート

謎の敵襲の翌日、俺達は王都の途中にある小さな村に立ち寄り休んでいた。

村は静かでほとんど人が見当たらない。

時折村人が俺の腕の傷を見て驚いていた。それほど出血量が多いってことだ。

宿屋の主人も俺を見てすぐに部屋に案内してくれた。

ついでに救急セットも持ってきてくれた。

宿の部屋は昔の俺の部屋位の大きさに妙な懐かしさを覚えた。窓の光がまぶしい。

俺は剣をおろしてベットに座る。メイメルは包帯と消毒液をとりだしている。

「すみません…全く気づきませんでした」

俺の左腕に包帯を巻きながら謝るメイメルに俺は苦笑を返す。

あの状況でスイの上に乗って寝れるヤツは多分こいつだけだろう。怒る気にもならない。

「まあ気にするなよ。スイで移動すると疲れるもんな」

「一番疲れるのはワシなんじゃがな」

ジト目で見てくるスイにメイメルが笑った。

少しだけ場の空気が和む。

「それにしてもその敵って何が目的だったんでしょか？」

「そこだよな。なんか国王の犬とか言ってたけど」

国王いったい何をしたんだろうか。

「カイルは敵の親玉に随分苦勞しておったな。そんなに強かったのかのう？」

「ああ、剣のぶつかり合いで押し切れ無かった。かなりのレベルだな」

「おぬしが力勝負で負けるとは…」

スイとメイメルが驚きの表情を浮かべる。

「まあ何にせよまずは王都に行って王様に会ってみたいなとな。止血が終わったら少し休んで出発しよう」

その日の昼、俺達は村を出た。

昨日あったことの答えはきつと国王が握っている、と信じてる。

俺は傷が開かないように気をつけながらスイにまたがった。

スイは俺の傷を気にしてるのか、割とゆっくり走っていた。



気を使わなくてもいいのだが、俺は何も言わずスイの気遣いに感謝した。

その結果また野宿することになり、見張りはスイに任せて俺達地面に転がって、目を閉じた。

その夜、俺は昔の夢を見た。

「ちょ！師匠あれは無理っすよ！」

見晴らしのいい高原地帯。

俺の目の前にはリザードナイトが立ちはだかる。

あれはレベル100位が標準なハズなんだが。

師匠の目が笑っていない。

「大丈夫だ多分いける！」

「多分って殺す気か！？畜生遅刻した腹いせか！新しい狩り場って言われてホイホイついて行くんじゃないかった！」

「ほら前来てるぞ」

「んなっ!？」

振り向くとリザードナイトが剣を振りかぶり俺に攻撃してきた。

なんとか回避した俺は師匠の居る方へ逃げたんだが

「甘ったれるな！」

今度は師匠に殴られた。何で！？

目を覚ますと辺りはまだ暗い。

師匠のパンチは眠気覚ましになったようだ。

夢の中でこの威力。師匠は相変わらずパネェな。

仕方なく起きるとスイがこちらに気づき顔を上げる。

メイメルはスイのお腹を枕にして寝てるようだ。

「ずいぶん早く起きてきたもんじゃな。何かあったのかの？」

「いやちよつと昔の夢を見て眠気が吹っ飛んだ。スイこそ大分早いじゃん」

「ワシは常に気を張って寝とるだけじゃ。おぬしらみたいに爆睡しとったら自然界では生きていけんからの」

さも当然と言わんばかりにスイが答える。

「なる程、スイがいたら見張りが必要ないな」

「ワシをこき使うとは良い身分じゃの。」

メイメルも寝てて丁度良いし、おぬしに聞きたいことがある」

「ん？またメイメル関連か？」

「違うぞい。怒らずに聞くのじゃ」

何だろうか？

「…おぬし、この世界の人間じゃないのではないかの？」

「……何でそう思う？」

「年に釣り合わないレベルに魔力石やモンスターの知識、そしてメイメルが言うとおりの山奥で育ったと言うならば、なぜケーキを知っておる？あれは貴族しか食べられぬ物じゃろう？」

「……………」

こういう所を見るとスイは長い年月を生きてきたんだなとつくづく思う。

もう隠しても無駄だろう。

「ああ、俺は別の世界からやってきたんだよ。山奥で育ったってのは嘘だ」

俺が正直にそう言ってもスイは微動だにしない。

スイは少し間をあけて口を開いた。

「ならよい。何者であろうともおぬしは大事な仲間じゃからの」

何を言われるのかとビクビクしていたがあっさりし過ぎて拍子抜けしてしまう。

「何でそんなにサバサバしてんだよ」

「…元々予想はしとったからの」

それっきりスイは目を閉じ、また眠り始めた。

俺はモヤモヤとした気持ちでなかなか寝付けなかった。

そんなこんなで翌日、早くも王都ゴートに到着。

リージアは山国だからゴートも木々が生い茂ってると思ったんだが…。

「すげ…」

大規模な開拓をしたのか。

城下町は山の斜面に沿って傾いてるとはいえかなりの広さで東京ドーム3個分はありそうだ。

一番驚いたのは大木と大木の間に橋をかけ人々が移動してること。

ツリーハウスらしきものもちらほら見える。

地上と木上、二階建ての文化遺産って所だな。

「こんな場所があるんですね…」

メイメルが俺の言葉に続く。

「とりあえず宿をとって城下町見物しましょう！カイル、スイ。早く行きますよ！」

興奮したメイメルは急ぎ足で宿へと向かった。

そして宿。

ツリーハウスは地上の宿より2割くらい高かったがメイメルが絶対こっち！

と主張したためツリーハウスに泊まることになった。

宿の番台で新聞らしきものがあつたので買ってみた。

値段もお手頃で日本語だし。

「…なにに？『マドラ軍エスペリアの秘密兵器に敗れる！一騎当千の剣豪か！？』。情報が遅いな」

「しかたあるまい。山国でリージアと間逆の場所での戦いじゃったのじゃし」

「ええ、かなり速い方だと思いますよ。新聞は刷るのに時間がかかりますし」

「そういうものかな？」

日本では情報伝達はネットとかテレビで一瞬だっただけにいまいち納得がいかない。

新聞のページをめくると今度は『レジスタンスがさらに過激に。商人多数襲われる』という記事が目に入った。

「レジスタンスねえ…昨日の山賊といい、この国も何か問題抱えてそうだな…」

伝統があるだけにそういうこともあるのだろう。

俺が記事に目を落としているとスイが覗いてきて急に目を見開いた。

何事かとスイが見ている部分に目を向けると…

昨日俺と戦った男の姿が写真に写っている。

（写真はあるのか。以外だ）

白黒だから細部は分からないが間違いない。

「こいつか！」

「こんな簡単に情報が手には入るとは思わぬ誤算じゃな」

「なにになに？『俺達は現国王が辞めるまで戦い続ける！』？国王何やっただ？」

「たしかリージアは税金の高い国で人口も少ないですから、15歳には軍に徴兵されるはずです。そのあたりに何かあるんでしょうね」

「まあこんな時代だししょうがないんじゃないかな？やるかやられるかの戦いになりふり構ってられないだろ。にしてもこれはチャンスかも知れないぞ」

「チャンス？」

「こいつらを倒せばリージアの信用を勝ち取れる可能性大だ。一気に同盟まで持って行きたいな」

「…ワシは別に構わんが何か引かかるのう」

スイは乗り気じゃ無かったが渋々納得してくれた。

「私はカイルの提案、良いと思います。私達に手段を選んでる余裕なんて無いですから」

メイメルはそう言って顔を引き締めた。

第七話 王都ゴート（後書き）

次は5日



## 第八話 城下町

宿を取り、俺達は城下町へと繰り出した。

町は広くて今日中には回り切れそうにない。

とりあえず地上のお店を回ることにしてまずは人の多い所に行ってみた。

王都だけあってどこを見ても人ばかりだが、それでも人が特に集まってる場所は一目瞭然だ。

「すごい人ですね！あれは髪飾りでしょうか？」

メイメルが見ているのは雑貨屋らしき店に並んでる髪飾りやピアス。

やはりこっちの女の子もこういうものを見るのが好きらしい。

メイメルはしばらく品定めしていたが、結局何も買わなかったようだ。

一通り歩いてみたが、人通りが多い所は食料品や衣類がたくさん売られていて、冒険者の為の物は少なかった。

「おっちゃん、武器とか売ってる場所ないかな？」

近くにいた商人に聞いてみると、商人は少し難しい顔を浮かべた。

商人に教えられた通り俺達は人通りの少ない、城下町でも端の方に  
あたる場所へ行った。

さっきの場所とは打って変わり、少し小汚い感じの人々がちらほら  
見える。

「…まあこれだけ広かったらこういう場所もあるよな。武器屋って  
どこだろう？」

「あそこの剣が並んでる店じゃないですか？」

ということで彼女の視線の先にあった武器屋に行ってみることに。

武器屋には一通り揃っているが店内は若干ホコリっぽい。

店主は50歳くらいのいかついおっちゃんだ。

俺は近くにあった剣を見て、少し違和感を感じた。

手にとって見ると、やはり間違いない。

ゲーム時代から武器にはかなりこだわってきたからすぐに分かった。

「売りモンにあまり触らないでくれ」

おっちゃんが口を開いたので間髪入れず聞き返す。

「おっちゃん、これわざと手抜いて作ってるだろ？わざと刀身曲げ  
たり、重さのバランスを変えない限りこんなの出来る訳ない。若い

鍛冶屋が作った失敗作はもつと自然な物になるし、おっちゃん腕良さそうだな」

おっちゃんは眉をぴくりと動かしこちらを睨んでいる。

メイメルとスイと俺は内心ビクビクしながらおっちゃんの返事を待つ。

「…何のことだ？人の売りモンにケチつけるたあ、失礼なガキだな」

「ケチ付けてる訳じゃねえよ。せっかくだから一番いい物見せてくれよ　って言うてるだけさ。あるんだろ？」

場の空気が張り詰める。

おっちゃんが立ち上がり俺を睨みながら近づいて来た。

立ち上がると身長は190をゆうに超え、体格も相まってかなりの威圧感を持っている。

俺達は息を呑んでおっちゃんを見る。

すると

「がっはっは！なかなか良い目をしてるじゃないか坊主！」

いきなり笑い出して背中を叩いてきた。

俺達はあまりの豹変っぷりに空いた口がふさがらなかった。

「……でな。俺はホントに目利きが出来るヤツにしか自慢の武器は売らない主義なんだよ」

話してみるとおっちゃんことバーネットはかなりの饒舌だった。

最初のあれは何だったのかと抗議したい所だ。

「確かに何にせよ物は相応しい人に使って貰ってこそですからね」

メイメルが頷く。

「でだ！坊主はかなりできると見たがレベルはどれくらいなんだ？」

バーネットさんが興味津々といった感じで身を乗り出す。

「73の剣聖だよ。武器にはこだわりがあるから今の剣にいまいち納得してないんだ。」

バーネットさんはオススメできる大剣ある？」

バーネットさんは俺のレベルを聞いて驚いたが、鍛冶屋としての血が騒いだんだろう。

いそいそと店の奥に消えていった。

少し待つとバーネットさんは三本の大剣を文字通り担いできた。

「さあ好きなの持っていきな。代金はまけてやる」

「え？いいのか？」

タダでくれるのはありがたいんだが気が引ける。

「構わん。元々坊主みたいなヤツの為に作った俺の自慢の剣だからな。使って貰えるだけで充分だ」

バーネットさんはそう言うてにこやかに笑った。

「カイルよ。今日はついておったな、あの男も自慢の剣をあれだけ気前よく譲ってくれるとは思わなかったが」

スイが俺の背中の大剣を見て顔に笑みを浮かべる。

三本あった大剣の内、俺は一番長い物を貰った。

バーネットさんいわく名前は『五月雨』さみだれと言うらしい。

あの人もなかなか趣味が偏っていそうだなと苦笑せざるをえない。

そして俺達はバーネットさんに別れを告げ宿へ戻る最中だ。

町は夕暮れ時を迎え人々の往来が緩やかになっている。

宿へ戻ったら早速モンスターを探して五月雨を振ってみよう。

「カイル、あれは何の人だからでしょう？」

そんなことを考えているとメイメルが俺の袖を引っ張ってきた。

メイメルにしては珍しい事だったので俺は少し面食らったが、確かに前方に人だかりが見える。

「何の人だからなんだ？」

俺が人だかりを作ってる人にそう聞くと、少し太り気味のおじさんが俺を見て下品な笑いを浮かべる。

「兄ちゃん剣士かい？自信があるなら喧嘩に参加してみたらどうだ」

「喧嘩？」

「おうよ。今あの兄ちゃん達が喧嘩してんのさ。」

その二人が強いなのなの。見てて恐ろしいから俺らはこれ以上近づけねえがな」

つまり冒険者か何かが喧嘩してて近づけないということか。

「なるほど、じゃあ止めてみますか」

試し斬りも兼ねてな。

「あんたら、こんな所で喧嘩なんかされると迷惑なんだが？」

俺は二人に挑発的な口調でそう言った。

二人は殴り合いを止めこちらを見る。

片方のヤクザっぽいのは顔が真っ赤になるくらい怒っているがもう片方の青年は困ったような顔でこちらを見ている。

どうやら喧嘩じゃなくて絡まれてる感じだな。

「聞こえなかったか？今すぐ止めろ。そうすりゃ見逃してやる」

「な…なんだとお！

てめえがどっか行きやがれ！」

予想通りヤクザが殴りかかってきた。

俺は軽くよけて五月雨を抜き、そのままヤクザの足を引っ掛け倒れた所に俺は五月雨を突き立てた。

傷付けないようにしたつもりだったがヤクザの頬に軽く傷が付いた。切れ味良すぎて怖いな。

「まだやるか？」

俺は優しく言ったつもりだったがヤクザの顔から血の気がみるみる引いていく。

俺はそれを降参とみて五月雨をサヤに収めた。

周りの人だから歓声が巻き起こり、青年はどこか気まずそうに目をそらしている。

「相変わらず見事な剣さばきじゃな」

スイとメイメルがこちらに寄ってきて俺をねぎらう。

気がつく人と人だからを作ってた人達がいつの間にか帰ってしまいその場には俺達しかいなかった。

「で、何で喧嘩してたんですか？」

メイメルが少年に尋ねる。

「そ、それは…」

うーん、青年は何か言えない理由があるようだ。

まあ（多分）青年に罪はないと思うし助け舟をだしてやるか。

「喧嘩の理由なんてもういいよ。  
それよりお前、名前は？」



「あ…レイと言います」

「そうか。もう喧嘩するなよ、レイ」

俺はスイとメイメルに帰るぞと言ってその場を離れようとしたが、レイが引き止めた。

「あの…宿はどこなんですか？」

おどおどしながら聞いてくるレイ。

「向こうのツリーハウスだよ。じゃあな」

あくる日の朝。

俺達は昨日の疲れのせいか、普段起きる時間になっても寝ている。

休みたい時は無理せず休みを取るべきだな。

コンコン

何かを叩く音がする。

まあ何でもいいや、眠いし。

コンコン

…またか、スイが相手してくれるだろ。

寝よ寝よ。

思惑通りスイがドアを開ける音がした。

何かを話しているのか、なかなか来客は帰らない。

そこで俺の意識は途切れた。

第八話 城下町（後書き）

次は9日

## 第九話 少年

暖かい光が俺の体に降り注ぐ。

目を開き体を起こすと外はすでに昼前らしく、人々の喧騒が耳に入る。

昔から昼まで寝坊するのはよくあることだし気にせずスイとメイメルにおはようと挨拶。

こんにちはと返されたのが少し悲しい。

「……そういや朝誰か来なかった？」

かすかにそんな記憶がある。

スイは呆れたように息を吐いた。

「起きとるなら人に任せずに出て欲しいものじゃな。」

昨日の少年じゃ。

お札に少しばかり食べ物を貰ったぞい」

スイが俺にリングゴを投げる。

キャッチした俺は一口かじって聞き返した。

よく熟成されてるのか甘い果汁が溢れてくる。

「んで、何でそんな朝早くに？」

「レイは今日忙しいらしくての。

お礼を引き伸ばすのは恥だからとわざわざ来たと言っておった」

朝早く来られるのも迷惑なんだがな。

律儀というか何というか。

「他には？何も言って無かったのか？」

「ああ、ワシらが何しにリージアに来たのかと聞いてきたの。

王様に用があるとだけ言っておいたぞ」

「そんなの言って大丈夫かよ。相手は知り合ってまだ一日だぞ」

心配して尋ねるとスイは大丈夫じゃと返してきた。

「あやつは悪いヤツじゃないと思うぞい。

むしろ助け舟になるやもしれぬ」

スイは軽く笑って答えた。

どこにそんな自信があるのだろうか。

余計心配だ。

「まあもう手遅れか。

メイメル、今日こそ王様に会いに行くんだよな？」

「え……ええ」

メイメルは緊張している様だ。

初めて他国の王様に会い、しかも同盟の交渉だもんな。  
無理はない。

俺達は身支度を整え宿を出た。

リージア城の前に到着した俺達は門番に話しかけた。

今回は国の事なのでメイメルの仕事だ。

俺とスイはでしゃばらないようにしないとな。

「す、すみません！」

若干うわずった声でメイメルが話しかけた。

「何だお嬢さん。迷子か？」

門番はあまり気にしていないようだ。

「私はエスペリア王国第二王女メイメル・フォン・エスペリアです。  
リージアとの同盟交渉に参りました。

王様と会わせて頂きたく存じます」

門番達が何かを話し合い、どこかに行ったと思ったたら何やら偉そうなおじさんがやってきた。

「始めまして。あなた方の事は連絡が入っております。

どうぞ此方へ付いて来て下さい」

連絡が入ってるとはどういう事だろうか？

俺達は顔を見合わせながらもおじさんに付いていった。

「此方が王座の間でございます。

どうか失礼のないように」

おじさんはそう言ってどこかに行ってしまった。

武器はお預かりされと思ったが、よほど近衛部隊に自信があるのだろうか？

疑問に思っているとメイメルはひとつ深呼吸をして扉に手をかけた。

扉が開く。

玉座の間には二十人ほどの近衛部隊が身動きひとつせず立っている。

正面の玉座に座るのが王様らしい。

日本だとメタボが心配される体型だ。

「エスペリアの使者とはソチらのことか？」

体もでかけりゃ態度もでかいな。

「はい。エスペリアはマドラからの侵攻を恐れています。

リージアはマドラより強いということで同盟交渉に参りました」

軽く一礼するメイメル。

それを黙って見ていた王様がフンと息を吐いた。

「断る。ワシらが同盟を結ぶメリットがない」

「そ…そんな…」

まあそうだな。

潰れかけの国と同盟結んでも意味ないって考えるのは当たり前だ。

俺とスイが後ろで静かに見ていると扉が開く音がした。



振り向くとそこにはレイがいた。

「レイ？なんでここに？」

俺は思わず口を開く。

「父上。彼女達は人格的にも素晴らしい方です。

どうか一度機会を与えて下さいませんか？」

父上って…お前王子か！？

「ふむ。確かにレイモンドの言うとおり人格は問題ない。

だが戦争では人となりではなく力こそ全て。

もしリージャを騒がしているレジスタンスとやらを退治出来れば同盟を結んでもよい。

力を示してみせよ」

レイのおかげでチャンス到来。スイの言うとおり助け舟になった。くれた。

その後、玉座の間から出たところでレイに質問してみた。

「ところで何で王子があんなところに居たんだ？」

「僕は今民の生活を実際に体験しているところなんです。

実際に体験するのとしなのとは雲泥の差ですから」

なるほど。

「じゃあ俺達の事を伝えてくれたのもレイか」

「ええ、助けられた恩を返したかったんで」

レイがニヤリと笑う。

「ところで一つお願いがあるのですが」

「ん？何の？」

「レジスタンス討伐に僕も連れて行ってくれないでしょうか？」

「それでもレベル21のナイトですから足は引っ張りませんので」

レイが頭を下げる。

うーん：王族二人も連れて行くなんてきついよなあ：

でもレイはちゃんとしたレベルだから危なくなったら逃げて貰えばいいか。

「ああ、いいよ。そのかわり絶対無茶しないでくれ」

こうして四人になったとき。



## 第十話 反旗

王様との同盟交渉が終わり、俺達は宿でダレていた。うちの王様とは違いかなり傲慢そうなやつだったし、あんなのが王様だとこの国も大変だな。

「にしてもレイには助かったな」

ベットに横になりながら呟く。

王子様なのに町で暮らしてたりああいいう場面で堂々と入ってきたり、王子とは思えないヤツだ。

「じゃな：ワシらの助けになるとは思ったが予想以上じゃな」

狼の姿になって地面に丸まるスイ。

心なしか声に張りが無い。

「：何にせよ王族と面識があるのは大きいですし、良いんじゃないでしょうか？」

メイメルまでスイを枕に横になる始末。

それだけ緊張感のある面会だったのだ。なんせ国一つの存亡がかかっていたんだから。

「何でレジスタンス討伐に付いて来るんだろうな？」

やはり疑問だ。戦闘を経験するならモンスターと戦うなりでもいい

し、リージアを騒がしてるレジスタンスだ。  
危険も大きいだろう。

「体験するのとしらないのでは雲泥の差って言ってましたし人との  
実戦を体験したいんじゃないですか？」

うーん、どうもそれだけでは無い気がするんだがなあ：

「考えても分からないし、今日はしっかり休んで明日レイに会った  
時に聞いてみるのが良からう」

スイの言うことももっともだ。

考えても答えは出ないし気にするだけ無駄だろう。

「だな、じゃあ何か食べ物買ってくるか。お前らはどうする？」

結局スイとメイメルは付いて来なかった。

「さて、何買おうかな？せっかくだしバーネットさんに挨拶してい  
くのもいいかな」

独り言を言いながら城下町を歩いていく。

果物をいくつか買ってバーネットさんの店へ行こうかな。

俺が果物を買いはじめると誰かが俺の肩を叩いた。

「カイルさん、どうも。少し話があります」

振り向くとそこには昨日と同じ市民風の服を着たレイがいた。

「んで、俺のどこに来たって訳か」

バーネットさんがコーヒーを俺とレイの前に置く。

ここはバーネットさんの武器屋の中だ。

「ああ、あんたなら誰かにばらす心配は無いからな」

さっき買った果物をバーネットさんに渡す。

レイはバーネットさんをうつとうしげに見ている。

「で、話ってのは今度のレジスタンス討伐についてか？」

「……ええ、そうです」

俺がバーネットさんを気にせず話し始めたので、レイも仕方なくといった感じで話し始めた。

机にはレイが持ってきた地図が広げられている。

「私の私兵の調査によると、レジスタンスの拠点はこの辺りにあります。」

敵は30人ほど、リーダーはかなりの強さですね」

「それは知ってる。こないだ襲われたからな」

レイは少し眉を動かしたが話を続ける。

「ここからがお願いです。」

何とかしてレジスタンスの人を仲間にできないでしょうか？」

想定外のお願いに思わず顔をあげた。

レイは決意のこもった目で俺を見ている。

「仲間にしてどーすんだよ」

「父上…いや、現国王の暗殺を手伝ってもらいます」

は……？暗殺？実の父を？

「な、何言ってるやがる！

俺はリージアと同盟を結んでもらう為にレジスタンス討伐をするんだぞ！

当の王様が死んじまったら本末転倒だろうが！」

「…大丈夫です。現国王が死んだら次の王は僕ですから。

エスペリアとの同盟は問題なく結べます」

あり得ねえ。確かに嫌な王様だとは思ってたけどそこまでののか？

俺はひとつ深呼吸をして落ち着きを取り戻した。

「…分かった、同盟は問題ないんだな。」

だが、なぜそんなことをする？ 大体戦力が天と地だろう。どうやって暗殺するんだ」

「話せば長くなりますので、先に暗殺方法について説明します。

現在玉座の間の衛兵の内、半分は僕の私兵です。

彼らにはその時が来たら裏切るように話しています。

また市民にも約千人ほどのクーデター派を集めました。

市民の生活をしているのはこのためです。

作戦はこう。

まずレジスタンスの方々に味方になってもらうのが前提ですが、いつでも外せる手錠をつけて捕らえた振りをして玉座の間に連れて行く。

合図を送ったら手錠を外し、王を私の私兵とレジスタンスの方々に暗殺です」

「なる程な、なら可能かもな。

だがリージャは今マドラと一触即発の状態だ。そんなことがあれば絶好のチャンスだと思って攻めてくるぞ」



「それも大丈夫です。現国王は誰にも知られていない白龍部隊を用意していますから。」

彼らはこの作戦に賛成してくれました。

「防衛は問題なしです」

「おいおい白龍まで居るのかよ。」

「白龍は飛竜と比べると飛行能力は劣るがとにかくタフで三日三晩攻撃しても倒せないって話があったりする位だ。」

「抜かりないってか。」

「じゃあ本題を聞かせて貰おう。」

「何でこんなことをする？」

「俺はコーヒーを少し口に含んだ。」

「レイも少し口に運び、話を続ける。」

「まずカイルさん、あなたは国王を見てどう思いましたか？」

「…傲慢なヤツに見えたな」

「ええ、カイルさんの言うとおり国王はかなり傲慢です。」

「国民の税金を増やして彼は何をしていますか？」

「砦の建築？軍の強化？違います。」

彼は国民の税金を有力貴族に渡して自分の味方をするよう頼んでいるんです」

まじかよ。あの国王何やってんだ。最低だな。

まあレイの言うことが正しいという場合だけだな。

「それが本当ならひどい話だな。

で、お前はクーデターを起こそうと思った訳か」

「ええ、こんな無駄な税金で市民が苦しみ続けるのはこれ以上耐えられないんです。

……カイルさん、力を貸してくれませんか？」

レイがすがるような目で俺を見る。

ふーむ。とんでもない話になったな。

「一日時間をくれ。メイメルやスイに無断では決められない。

三日後の昼、ここにもう一度来てくれ」

俺がそう告げるとレイはそそくさと帰っていった。

「今戻った」

僕は隠れ家の隠し通路を通り中に入る。

中にはクーデター派の主要メンバー5人がイスに座り僕を待っている。

「王子！どうでした！？」

5人の内の一人、カーライルが身を乗り出して聞いてくる。

「そう焦るな。」

返事は三日後の昼まで待つて欲しいと言われたよ。

けど、手応えはあると思う」

5人からどよめきが起こる。

「なら返事は期待出来そうですね」

城に仕えているモルダ（カイル達の案内をした人だ）が頷いた。

「ああ。このまま行けば今週中にも現国王の政権は終わりだ。

とうとうこの時がやってきたな」

「ええ、あの暴君も風前の灯火ですよ」

カーライルが不適な笑みを浮かべ、腕を組む。

僕達はその後、作戦の細部の見直しを始めた。



## 第十一話 相談

レイは帰る前、隠れ家の場所を教えてくれた。

これで俺が隠れ家襲撃とかしたらどうするつもりなんだろうな。

レイが帰った後、バーネットさんはコーヒーを俺のコップに継ぎ足した。

彼はレイが座っていたイスに腰をかけ息を吐く。

「とんでもねえ話だな。

国王暗殺なんてよく堂々と言えたもんだ。

で、坊主はどうするんだ？

受けるもよし、受けないもよし。

大体アイツの言ってる事が全て正しいとは限らないしな。

慎重に動くべきだと思うぜ」

バーネットさんはこの話、どっちに転んでも関係ないような言い草だ。

こんな人通りの少ない所に店を構える位だから本当にそう思ってるかもしれない。

俺はややあって質問に答えた。

「とりあえず保留したのはスイとメイメルに相談するだけじゃなくてアイツの話の裏を取る時間が欲しかったからさ。」

レイの言うことが正しいのなら、手伝ってやってもいい。」

そう言ってコーヒーを少し口に運ぶ。

机の上から果物が一つ落ちた。

「そうか。なら俺が言うことはもうないな。」

坊主、頑張れよ」

バーネットさんはにこやかに笑う。

宿へどうやって帰ったのかは覚えていない。

ただ果物を持って帰るのを忘れた事は覚えていた。

「……という訳だ」

俺は宿に帰り、スイとメイメルにレイがした話を伝えた。

スイとメイメルは俺が話し終えるのを黙って聞いていた。

「すごい話になったもんじゃな。」

実の息子が父親を殺そうとするなんて、レイは存外野心家じゃったというわけじゃ」

スイがうんうん頷く。スイも長い年月を生きてきたからこういう話も体験したことがあるのだろうか？

「確かにすごい話ですね。マドラとにらみ合ってる時にクーデターなんて」

メイメルは相変わらず素直な感想だな。そこが良いところでもあるが。

二人の反応を見て俺は話を続ける。

「マドラとにらみ合ってるからこそなんだろうな。」

主力が居ない間にさっさと済ませるつもりなんだろう」

「で、さっきおぬしは裏を取ると言っておったがどうやるのじゃ？」

「貴族の館に忍び込むか城に忍び込む」

「それはまた危ないですね」

「ああ、まあスイが注意を引いてる間に壁をくり抜けば侵入は可能だろ」

「またワシが損な役回りなのか…」

耳をぺたんとさせてスイがうなだれる。

最近わざと可愛く振る舞ってるんじゃないかと疑いたくなるくらいあざとい。

「じゃあ侵入は私とカイルですね」

メイメルが緊張感のある顔で言った。

あーいや、

「今回は俺一人で行こうと思う」

俺としては心配して言ったのだがメイメルが一瞬固まった。

「何ですか？」

納得いかないといった感じでメイメルはこちらに寄ってきた。

キスをされた時の事を思い出してしまい、少し顔が赤くなってしまった。

「そ、そんな危険な事に王女を巻き込むわけにはいかないだろ」

顔見られたら終わりだし。

「…王女だからって連れて行かないのは冷たいんじゃない？」

あれ？しゃべり方が…



なぜか冷や汗が流れる。

「カイル、あなたは私のことどう思っているの？  
仲間じゃなくて王女として一緒にいるの？

そんなの嫌だよ。

仲間なら危なくてもついて行くのが当たり前じゃないの？

それに私にとってカイルは大切な人だから無事を祈ってお留守番なんて耐えられない」

メイメルが何かにすがるような目で俺を見ている。

「……………」

メイメルが俺に好意を持っている。

それは分かってる。

気づかない訳ない。

けどメイメルの言うとおり王女様という肩書きに一步引いていた。それも事実だ。

だから：

「ごめん。確かに王女だからって一步引いていた部分は確かにある。  
けど俺はメイメルを仲間だとも思ってるし、だからこそついて来て欲しくないんだ。

それに、メイメルの好意に応えられる力も、危ない場面でメイメルを助ける力も俺にはない、だから…」

「…分かった。今はまだただの仲間。だけどね、いつかカイルの心、掴んでみせるわ。」

だからその先は言わなくてもいい。」

それから一時間。

メイメルは寝てしまい、今は穏やかな顔で静かな寝息を立てている。

「たまには男らしい事も言えるんじゃない。」

年甲斐も無くドキドキしたぞい」

いつものにやけ顔でからかうスイ。

俺にスイの相手をする気力はもうないので軽く流す。

「ああ、今日は疲れた。」

俺もメイメルも疲れてたんだろうな…。

言ったことは本心だけど、どこかお互いイライラしてたよ」

俺が天井を見ながらスイにそう言うと、スイはどこか懐かしそうな口調でつぶやいた。

「少年と少女はいつの時代も変わらんのう。」

見ててあきぬわ」

そう言っつてスイはふっと笑みをもらした。

きつと昔にも俺達みたいなのが居たんだらう。そう思うとスイに少し同情してしまう。

「で、館にはメイメルを連れて行かないのじやろう？」

「ああ、もしばれたら大変だからな。」

俺なら見られても夜なら人違いで済む。

五月雨も置いていくよ」

「じゃあメイメルは何をするのじゃ？」

「スイは屋敷に乱入した後メイメル連れてレイの隠れ家に行ってくれ。」

話聞いてボロが出たら儲けもんだ」

「その隠れ家ってどこにあるのじゃ？」

スイが不思議そうな顔をしている。

場所はレイに教えて貰ったが少し冗談めいた口調でおどけてみた。

「決まってるだろ？」

一呼吸空けてスィに言う。

「自慢の嗅覚でだ！」

怒られました。

## 第十二話 レジスタンス

リージアは山の多い地形だ。

あたりには木々が生い茂り、自然の要塞と言っても過言ではない。

そんな山奥に、そのリージアをかき回す組織の根城は存在する。

そう、その組織の名前はレジいたっ！

「何一人でぶつくさ言ってるんだ」

彼はレジスタンスのリーダー、リック。

何でもリージアに恨みがあるとかで一人でこの組織を作り上げた張本人でいてっ！

「だから何をぶつくさ言ってるんだ？」

言いたいことははっきり言え」

そうやってすぐに手を出すのやめて欲しい。

大体リーダーは細かいことを気にしすぎなのだ。

大変不満である。

声には出せな「出てるぞ」……え？

え、あ、うそん！？  
いや！助けてええええ！

しばらくお待ちください

言って無かったか、俺の名前はデント。  
レジスタンスのサブリーダーだ。

「で、準備の方はどうだ？」

いてて：なんて事するんだこの人。

お仕置きをされて体中が痛むがこれ以上やられたらひとたまりもない。  
い。

痛む体にムチを打って体を起こす。

「武器も防具もまだ足りないっすね。

人数もまだクーデターを起こすには足りないし、もうしばらくは時間がかかると思っす」

毎度思うがこの人も少しは手伝って欲しい。

地味な作業大嫌いだからなあ：

「そうか。だが残された時間は少ないし、商人を襲って金を集める回数も増やさないとな。

ところで、飲んべえのキーオはどこ行った？」

この根城はレジスタンスの中でも幹部クラスの人しか知らない。

頻繁に出入りしてたらバレるからだ。

そしてキーオもその幹部の一人なんだが、今日は姿が見えない。

キィ バタン

「うゝ…くそ…」

噂をすればなんとやら、キーオが酒瓶を引っさげて帰ってきた。

「キーオ、どこに行ってたんだ？」

リーダーが聞くとキーオは急にその場に座り込んだ。

「…聞いてくださいよリーダー。

町歩いてたらのこのこと王子様が歩いていてよお…ひっく

痛い目見せてやろうと絡んだら…ひっく

バカでかい剣持った冒険者に返り討ちにあっちまったんだよお…」

キーオはついに泣き出してしまった。

彼は酒が入ると涙腺が緩くなるのだ。

俺はキーオの背中をさすりながらリーダーを見る。

「リーダー、大剣使いの冒険者ってもしかして…」

俺の言わんとすることをリーダーも察したようだ。

キーオに聞いてみた所、どうやら水色の髪をした美人さんが人混みの中に居たらしい。

間違いなくあの大剣使いの仲間だ。

「アイツ王子とつながっていたのか？」

「いや、多分何も知らずに助けに入っただと思うっすよ。

につくき王子は護衛を連れない事で有名っすから」

リーダーが暴れそうな雰囲気を出していたのですぐにフォローを入れる。

「まあ、それもそうだな」

幸いすぐに落ち着きを取り戻してくれたようだ。

状況を見るにレジスタンスに残された時間は少ない。



だからこそケンカなんてしている場合では無いのだ。

「これはこちらから動くべきかもしれないな」

「動くってどうするんすか？」

「とりあえずあの大剣使いの今後の動きを見て、チャンスがあれば王子を暗殺しよう。」

何人か町に派遣してヤツらを探せ」

「探すと言ってもどうやって探すんすか？」

「大剣持ったり水色の髪してたりするんだからすぐに見つかるだろう？」

「なるほど。それもそうっすね」

翌日、大剣使いが有力貴族の館に忍び込む姿が確認された。

翌日の夜、俺達は貴族の館にやってきた。

流石に警備は厳重でこれ以上は近づけない。

「じゃあスイ、頼んだ」

「合点承知じゃ」

スイは狼の姿で館の門に向かった。

この後スイはメイメルと合流してレイの隠れ家に移動。

ボロが出たら儲けもの作戦敢行だ。

門の方に警備兵達が走っていくのが見える。

どうやら上手くやってるらしい。

「『居合い切り』」

俺はバーネットさんに貰ってきた普通の大きさの剣で壁を切った。

この剣もかなりの切れ味で壁にはきれいな四角形の穴が空いた。

俺はほふく前進で壁の中に入り、バレにくいようにくり抜いた壁をはめ込んだ。

暗い間はバレないだろう。

さて、みんながあたふたしてる間に実写版メタル○アといきますか

「よし、俺達もあの穴使って侵入するぞ」

「うっす」

「おう…ひっく」

### 第十三話 勘違い

◇カイルサイド◇

館は結構簡単な作りになっていて、門の前に正面入り口、左手奥に行くとな俺が侵入した庭がある。

庭を奥に進むと裏口らしき場所があるようだ。

事前に行った下調べによるとこの館に住むのはクラークという貴族で周辺の住民からも怪しい噂がわんさか出た。

ここを選んだのも王様と繋がってる可能性が高いと踏んだためである。

もちろん間取りなども出来るだけ調べてある。

予定通りこの庭にある茂みに隠れながら進む。

すると館の兵士達の会話が聞こえてきた。

「なんで急に狼が現れたんだ？」

「さあな、この館には大した物なんてないし、近くの山から迷って来たんじゃないか？」

「ちげえねえ。この館に住む貴族はかなりのゲスだから天罰でも当たったんだろ」

そんな話をしながら兵士達は門に歩いていった。

なるほど。やはりこれは王様と繋がっている可能性が高いな。

よし、慎重に茂みを進も…う？

「誰だ！」

前を向くと兵士がこっち見てる。  
ヤバくね？

「だ、誰か援軍をぐわっ！」

安心しな、峰打ちだ。

こういう時は叫ばれる前に気絶させるに限る。

すぐには見つからないように茂みに隠してっと。

よし、先いこ。

◇レジスタンスサイド◇

「やつはこっちに行ったんだな？」

「ええ、ここだけ草が痛んでるっす」

「リーダー…吐きそう…ひっく」

「飲み過ぎだ馬鹿」

キーオ、こういう時位飲むの止めろよ…

少し進むとなぜか兵士が茂みの裏で伸びている。

「も…もう無理」

「「あ…」」

キーオが吐いた。

兵士の上に。

……………

「…先、行くぞ」

「…うつす。ほら、キーオ早く」

「もう帰りたい…うつ」

ごめん、名も知らない兵士さん。

後日この兵士がしばらく避けられるようになったのは別のお話。

◇カイルサイド◇

「さて、どうしようかな…」

館に入ることに成功した俺は取りあえず近くの部屋に入って隠れている。

長テーブルにロウソクが等間隔に置いてある。ここはディナールームかな？

せっかくだから何か使えるものがあるかもしれないと思い、俺は部屋を物色してみた。

5分後

食べかけのシチューを手に入れた！

ナイフとフォークを手に入れた！

臭い靴下を手に入れた！

カイルはやる気無くした！

ダメだ。まるで役にたたねえ…

こんなところ探しても意味がない。部屋の外を探そう。

そう思いドアに向かうと外で足音が聞こえる。

足音はだんだんこっちに近づいているようだ。

ドアを開けられたら困る。

俺はドアノブを固く握りしめ足音が遠ざかるのを待った。

来るなよ…来るなよ…

そんな俺の願いが通じたのか、足音が遠ざかるのが分かる。

助かった。

そう思い俺はドアを背に座り込んだ。

◇レジスタンスサイド◇

「で、結局キーオは帰ったのか？」

リーダーがやれやれといった感じで首を振る。

キーオは後ろから来た兵士の囀に使わせて貰った。



兵士は飲んべえが紛れ込んだと思ったのか、キーオを館の外に連れて行ってくれた。

まあ狼騒ぎでそれどころじゃ無いんだろう。

ここは館の廊下だ。

丁度二人組の兵士が来たので鎧を奪う、もとい借りてきた。

リーダーが強いと何かと便利だ。

「ところで今回は何でリーダー来たんっすか？いつもは部下に押しつ…任せるのに」

てっきりまた俺一人かと思ってた。

「ああ…貴族に攻撃できる数少ないチャンスだからな。

それがどうかしたか？」

「い、いや、何でもないっす」

間違いなく何かあるな。

あのリーダーがたったそれだけの理由で来るわけない。

「さて、どっちに行くんすか？」

階段をのぼるか通路を進むか。

「え？ああ、とりあえず階段を上ってみるか」

うーん、やっぱりどこか落ち着きがない。

でもこんな場所で考え事はだめだな。

理由は後で問いただそう。

俺達は静かに階段を上った。

カイルが同じ手を使ったのは、そのすぐ後だった。

◇カイルサイド◇

「この手があったか」

俺は兵士の一人を気絶させ鎧を借りた。

カブトを深めにかぶり、ディナールームを出て通路を歩く。

こういうのは堂々としてりゃ案外バレない。

しばらく歩くと階段があった。

「大体ボスって上に居るよな。ドラ○エとかでもそうだな」

というわけで2階へレッツゴー。

さて、二階はどうなってるのかな…

「……………」

階段を上がると兵士と目があつた。

兵士二人キター!?

これは…いきなり詰んだか…

何やら兵士達がコソコソ話している。

ああ、きっとアイツ怪しいよな的な話してるんや…

階段で立ち尽くす俺に兵士達が近づいてきた。

なぜか動きがぎこちない。

「よ、よお! お前何してんだ?」

兵士Aがカクカクしながら聞いてきた。

もしかして…バレてない?

なら言い訳を並べるまで!

「お、俺はクラーク様に報告に行くところさ。

クラーク様どこに居るか分かるか？」

ホント下調べしといて良かった：

「え？ああ、俺達もクラーク様を探してたんだ。良かったら一緒に探さないか？」

そう言うてはにかむ兵士A。

良くなーい！それ死亡フラグだから！

絶対最後でバレルパターンだから！いやパターンって何だ！

「お、おう。そうしよう」

でも断れないっ！断ったら怪しまれる！

こうして俺はスリル満点な状況に陥った。

◇レジスタンスサイド◇

「この部屋はただの物置だな」

リーダーが言うとおりにここは物置。

ほこりっぽい。

「リーダー、ここに居たら見つかった時怪しまれるっすよ」

狼騒ぎの真っ只中物置にいる兵士二人。

怪しすぎる。

リーダーはそれもそうだな、と納得して部屋の外に歩いていく。

俺もそれに続いて外に出ると

階段から兵士が登ってきたのが見える。

俺とリーダーを見るその兵士。

（ど、どうするっすか！？）

捕まったら今まで積み上げて来たものが水の泡になるかもしれないという状況に俺はかなり焦っていた。

（どうするも何も逃げるしか…）

ためらいながら答えたリーダーに反論する。

（駄目っすよ！怪しまれるだけっす！）

（ふゝむ、なら何か言われる前にこっちから話しかけてなんとかしよう）

なんでそんなに落ち着いてるんすか…

リーダーは落ち着いた口調でそう言って兵士に近づく。

ダメだ！動きがガチガチすぎてパントマイムみたいになってる！

その後奇跡的に兵士をごまかすことに成功したのは何故だろうか……？

## 第十四話 お姫様

◇カイルサイド◇

夜の静まり返った廊下に響く足音。

ここはリージアの有力貴族クラークの館。

言うまでもなく不法侵入。

そして隣を歩く兵士二人。

絶体絶命のピンチが続くが幸いクラークの部屋を知っているようだ。  
このまま案内してもらおう。

無言で館の二階を歩く俺達。

「と、ところでこないだのあれはやばかったな」

一番前を歩く兵士がそう言ってこちらを向く。

え？急に何の話だ？

「ああ、あれは大変でしたね。後始末が特に大変でした。あんたも  
大変でしたでしょう？」

大変？後始末？

ああ、そうか。

きっとこれは…

「ああ、みんな倒れて大変だったよな」  
宴会でみんなが酔いつぶれたんだろう。宴会は後始末が大変だからな。

すると再びコソコソ何か話す兵士二人。  
宴会じゃ無かったのか？

俺が兵士じゃないってバレた？

焦る俺だが、何故かそれ以降何も聞かれなかった。

訳が分からん。

しばらく歩くと一番前を歩いていた兵士が止まった。

どうやらクラークの居る部屋について：

「……ここ、どこだ？」

え？迷子？

兵士が自分の勤めている館で迷ったらダメだろ。

いやそもそも何であんな自信満々で歩いてたんだ？



◇レジスタンスサイド◇

（みんなが倒れるって何やったんすかね？）

後ろの兵士が訝しげにこちらを見ている（気がする）。

そもそもリーダーがいきなり話を振るから悪いんだ。

もしここで判断を誤ったら間違いなくバレる。

そうなるにあの大剣使いの目的をつかむことも不可能になる。

（わ、分からん。きっとモンスターと死闘を繰り広げたんじゃないか？）

リーダーの答えも一理ある。

死闘だと死体の後始末とかしんどいし。

（ていうか何でそんな話したんすか）

（いや、その…後ろからの視線が怖くて…）

（……………）

前から思っていたがリーダーはメンタル弱い節がある。

こないだプリン食べたのを怒ったらクッキーも食べたってあっさり  
自白したからな…。

レベル52っていう奇想天外な強さがあるからリーダーなんだけどね。

だから作戦を考えるのはいつも俺とキーオだ。

(まあ過ぎた事はいいっす。それよりちゃんと道合ってるんすよね?)

俺が念を押すように聞くとリーダーは急に立ち止まった。

ま、まさか…

「……ここ、どこだ？」

やっぱり迷子になってる！

後ろの兵士もなんで黙って…

そこで俺は全てを悟った。

そうか！

こいつ、新米か！

初めから何も言わなかったのも、後ろからついて来たのも、まだここに来て間もないからなんだ！

そりゃ道が間違っても分からないのも当然だ。

俺はリーダーに全てを伝えた。

リーダーもそうか！って感じで頷いてくれた。

（こうなったら自分達も新米の振りをしてごまかすしかないっす！）

◇カイルサイド◇

「いやゝ、実は俺達ここに来て間もないからさ。道うろ覚えなんだよ」

一番前を歩いていた兵士がそう言ったのを聞いて、俺はなる程と思った。

コソコソ話していたのは道が分からなかったからなんだな。

「そうなのか。実は俺も新米なんだ。  
仕方ないし手分けして探そうか。俺はあっち行くからそっちの方の探索よろしくな」

相手の勘違いには乗るしかない。

これでひとまず離れられるハズだ。

「いや、せっかくだし一緒に探さないか？また迷うかもしれないし」

お、おう。

どうしてこうなるんだ…？

◇レジスタンスサイド◇

（せっかく離れてくれそうなどこだったのになんでそんな事言うんすか!？）

（相手が新米と分かった以上顔を見られても怪しまれないだろ？相手は兵士全員の顔を覚えてる訳じゃない）

あ、なる程。そういうことか。

俺達はその後部屋を見て回った。

なかなかクラークが居る部屋は見つからない。

「疲れたな」

新米兵士がそうつぶやいて壁にもたれかかる。

カチッ

「「「ん?」「」」」

これ、何の音だ？

突然の事にうろたえていると

ウウーウウー

警報が鳴りだした。

どうやら兵士が異常を知らせる非常警報魔法のスイッチを入れてしまったみたいだ。

暗くて見えなかった。

「や、やべえぞ！」

新米兵士が走り出した。

俺達もそれに続く。

「警報で駆けつけた兵士がくる前にここに入るぞ！」

新米兵士は走った先にあったドアの前で剣を抜きドアに切りかかった。

見事に穴が空き彼が入る。

どこだ！こっちか！

後ろから兵士の声が聞こえ俺達は急いで部屋の中に入った。

部屋の中には机やベッドがある。

「……………」

そしてベッドの上で一人こちらを向く女性。

髪は茶色、端正な顔立ちは貴族にふさわしいものだ。

彼女はゆっくりとした動きで窓を指差した。

「…窓を割って」

「は？」

なんで？

「いいから早く。割ったらベッドの影に隠れて」

俺は言われるままに窓を割ってベッドの裏にかがんだ。

すると窓の割れる音を聞きつけ何人かの兵士が駆けつけてきた。かなり息が荒い。

「ミーナ様！ご無事ですか！？」

「…大丈夫、窓から逃げた。今なら追いつけるはず」

ミーナと呼ばれた彼女は窓の外を見てそう言った。

兵士達はすぐに一階に向かい駆け出して行き、部屋は再び静寂に一つまれる。

「あの…なんで助けてくれたんすか？」

俺がそう聞くとミーナさんはこっちを見て軽い笑みを浮かべた。

「リック。久しぶりね」

リーダーのお知り合い！？

窓の外からは兵士達の喧騒だけが聞こえた。

## 第十五話　なんだかんだで

「ちょ、ちよつとリーダー知り合いなんすか!？」

兵士の片割れが先頭を歩いていた兵士に詰め寄る。

リーダーと呼ばれたヤツはあたふたしながら兵士の片割れと貴族のお嬢さんを見ている。

あのゝ状況説明してくれないか？

兵士に話しかけようにもとてもじゃないが口を挟めそうに無い。

どうしようもないし傍観安定。

リーダーさんはしばらくはあたふたし続けたが、少し時間が経って落ち着いたようだ。

彼は貴族のお嬢さんに向かい正座。

なぜに正座…。

「ひ、久しぶりだなミーナ。元気してたか？」

リーダーさんは恐る恐るといった感じでそう言った。

それを見てお嬢さんはプイッと顔を背けた。

顔が整ってるからかなり様になっている。



「まったく。突然居なくなっと思ったら変な組織作って何がしたいの？」

「いや、それはお前を助け出す為にだなあ…」

なんか聞いている限りヘタレの夫としっかり者の妻って感じだな。哀れだ。

兵士の片割れがそれを聞いてリーダーさんにまた詰め寄った。

「リ、リーダー。そんな理由でレジスタンス作っただんですか!？」

おいおいちょっと待て。何でそこでレジスタンスが出てくるんだ。

待てよ。レジスタンス、リーダー、……………まさか!

俺は正座してるリーダーさんに勢い良く飛びかかりカブトを外した。

中から出てきたのは…

「やっぱりお前かあああああああああ!」

やっぱりアイツだ!

何でこんなところに!

「は?…どっかで会ったっけ?」

いまいち誰か分からないといった感じのリーダーさんに俺は反射的に叫んだ。

「お、俺だよおおおお！」

俺も勢い良くカブトを外す。

「……………」

「……………」

静寂。そして

「「なんでここに!？」」

ハモった。

「で、俺の後をつけてきたって訳か」

ひとまず落ち着いた俺達はミーナさんの命令により武装解除。

武器持つてると喧嘩しそうだと言われた。

まあこないだ斬り合ったしね。

さっき俺が叫んだせいで兵士にばれるかとヒヤヒヤしたが幸い周辺の捜査に行ったのか近くには誰も居なかったようだ。

「ああ、お前らの目的が分からなかったからな。ついて行けばそれも分かるだろうと」

あぐらをかいているリックが答える。

「私に会いに来たんじゃないのね」

隣にいるミーナさんは少し不満気に会話に入ってきた。

軽く睨まれたリックが目をそらす。

少しうろたえながら

「俺もまさかお前の屋敷だとは思ってなかったよ。まあそれは置いてだ。もし良かったら王子が何しようとしてるのか教えてくれないか？」

と返した。

向こうは話題を変えようとしたんだとおもうがこれは好都合。

今回の作戦はレジスタンスに協力してもらわないといけないってとこで向こうから聞いてきてくれるとは。

俺は二つ返事で王子の王様暗殺計画を説明した。

俺が話を進めていくにつれ、場に緊張が張りつめていく。

俺が一通り話し終わるとまずミーナさんが口を開いた。

「とんでもないわね。確かに税金は高いけどマドラとにらみ合ってる時にする事じゃない」

「そうっすね。俺達に協力してもらって言うって実はレジスタンスを捕まえる嘘ってこともあるっすから。手伝うにも信頼できる証拠を取らないとダメっすね」

「だな。偽の手錠が本物でした、じゃひとたまりもない」

「三人の言うとおりの話はまだ裏が取れてない。

だからここに来たんだけどな。ミーナさん、クラークは王様とつながっていたりするのか？」

娘なら多少は目撃してるだろう。

そう思いミーナさんに尋ねると、彼女からは有力な話を聞いた。

クラークと王様は2年くらい前から仲がいいとかで夜中にコソコソ何かを手渡す場面も見えたことあるようだ。

ミーナさんの証言で裏がとれた上に、ミーナさんにもぜひ実行して欲しいと言われ、リックとその部下（名前聞いてねえ）が作戦に手を貸してくれると約束してくれた。

「で、リック」

「は、はい？」

「私をほったらかしにして帰るなんて事は無いわよね？」

「え？でもそんなことしたら」

「無いわよね？」

「はい、ありません」

その後リックはミーナさんを館からかつさらって行くところを見られまた新聞に載ることに。

写真の中でお姫様だっこされているミーナさんは幸せいっぱいとい

った顔をしていたので、どっちが悪者なのかは何とも言えない。

スイとメイメルは結局兵士から逃げ切れず（俺のアシストをずっとしてくれたんだが）王子の所には行ってなかった。お礼は今度きっちりもらうとか言ってたのは忘れよう。

その翌日、俺達は王子の教えてくれた隠れ家に俺　スイ　メイメル　リックの四人で向かい、作戦の詳細を聞き、ゆっくり寝るため早めに解散した。

下はその内容

「カイルさん、本当にレジスタンスを説得するなんてすごいですね」

「いや、説得したというか成り行きでこうなったというか…。  
そんなことよりさっさと作戦会議といこうぜ」

「そうですね。今回一番大事なことはレジスタンスの人に王様を殺してもらおうことです」

「…一応理由を聞かしてもらおうか」

「カイルさんやスイさん、僕が王様を殺してしまうとエスペリアは敵扱い、新しい王様は暴君扱いになること。そしてレジスタンスが国民の支持を得ていることです」

「レジスタンスって支持されてるんですか？」

「ええ、商人は襲われているものの税金の額や性格の悪さで嫌われている現国王に真っ向から向かって行ってますから」

「なるほどのう」

「じゃあ捕まったふり作戦で一氣にいくか」

「ええ、王宮の周りは僕の仲間達で塞いで市民には被害が出ないようにはしますんで安心してください」

俺達は手をがっちり組み静かにうなずいた。

明日、歴史に新たな1ページが加わる事になる。

## 第十六話 結末

「入れ」

王様の許しを得て俺達は王の間に足を踏み入れる。

この前来たときと同じで両脇の兵士達は微動だにしない。

嵐の前の静けさってヤツだろうか。

王の間を静寂が包む。

「この度はレジスタンス討伐、大儀であった」

玉座でふんぞり返る王様に一礼。

「では同盟の件は結んでいただけるでしょうか？」

メイメルが王様に問う。

「おお、そうであったな。エスペリアとの同盟は約束通り結んでやろう」

ご機嫌な王様が大声で笑う。

残念ながらレジスタンスは王の間につれてこれなかった。

今は王子の私兵が庭先で捕まえてるふりをしている。

間もなくして兵士が一人、息を切らして入ってきた。

「お、王様！レジスタンス達が手錠を外し王宮内で暴れています！」

「な、なんだと！早く兵士を集めて鎮圧しろ！」

「では俺も鎮圧に向かいましょう」

国王側のな。

「お、おお頼む」

何も知らない王様に従うふりをして俺は王の間を飛び出した。

しばらく廊下を歩いていく。

「あ、いたいた」

一人でいる兵士発見。そーっと近づいて…………

「ぐあっ…………」

振り向く前に頭を殴りつけ気絶させる。

「…………よし、いくか」

所変わって中庭



「リーダー！敵が多すぎるっす！」

現在敵はこっちの二倍は居るだろう。

レベル差もあるしかなり厳しい。

「何人かでまとまって戦え！」

絶対無理するな！」

かくいう俺もこれで10人は相手にしただろうか。

避けきれず喰らったダメージがジワジワきいてきた。

「また増援だ！」

キーオが叫ぶ。

また敵が増えたのか。

他人ごとのようにそう思いながら一人、また一人と斬りつけていく。

「次は俺だ！」

さっききた増援の一人が剣を振るう。

跳ね返そうとするもつばぜり合いになる。

俺と互角に戦えるってもしかして…

「そのまま黙って話を聞け」

やっぱりお前か。

また変装とはこりないやつめ。

「ここは俺とスイが引き受けるから先に行け。いいな」

ひとつ頷き距離をとる。

そして俺は何人かを回収して王宮に走り出した。

「逃げたぞ！追いかける！」

それをみた兵士が叫ぶ。

だが

「おらっ！」

「ぐあっ！何をする貴様！」

カイルが行く手を阻んだ。兵士の格好をしてカブトをしているので誰かはばれていない。

遠くからは狼の遠吠え。スイのものだ。俺は背中を預け中庭を突き抜けていく。

王子の部下のカーライルには事前に兵士が手薄な場所を教えられている。

ほとんど戦闘もしないうちに王の間の前まで到着。

「来たぞ！」

後はここを突破するだけだ。

「くそ！キリがねえ」

中庭を引き受けたはいいが敵が無限沸きなのかと疑いたくなるくらい多い。

王の間の方が騒がしい。リックが何とか着いたようだ。

こちらとしても早く加勢に行きたいんだが。

するとスイが兵士をなぎ倒しながら走ってきた。

「これを使うんじゃ！」

渡されたものは野球ボール位の黒い塊。

「それはワシがメイメルを詰めた爆弾じゃ。魔力を加えて投げれば一気に爆発するようになっておる」

ああ、なる程これで庭を一掃か。

「オーケーありがたく使わせてもらうぜ」

爆弾に魔力を少し加えると爆弾からシューって音が鳴り始めた。

「くらえええええ！」

（この時レジスタンスも巻き添えだってことに気づかなかったのは秘密）

俺が投げた爆弾は真っ直ぐ前に飛んでいく。

「どこに投げとるんじゃああ！」

明後日の方向に。

シュー

「ん？何の音だ？」

「リ、リーダー！爆弾っす！全員伏せろおお！」

伏せたと同時にとんでもない爆音がなり俺達は吹き飛ばされた。

なんとか起き上がると爆発はとんでもない威力で、敵はほとんど居なくなっていた。

どうやら伏せたのが幸いしたようだ。

「……………」

無言で王の間に入る。

「ま、待て！こんなの有りな訳が」

うろたえる王様。

あゝ、まあ。何だろうな。

とりあえず

「死ね」

俺は王様の首をはねた。

現国王の死はリージア全体に瞬く間に広がっていき、首都ゴートには『祝　レイモンド王』といった旗が沢山並ぶ。

でもこれはレイモンドに対する期待ではない。

前国王の不人気がここまでの騒ぎにしているのだ。

そういう意味でレイには大きな期待と責任がつきまとうだろう。

リックとミーナさんはその後めでたく結ばれ、リックはレイの直属の親衛部隊の隊長に任命された。

レジスタンス時代散々暴れ回ったせいで反対意見が多かったが前の親衛隊長を力でねじ伏せたようだ。

ミーナさんが元々有力貴族の娘だったこともあり彼女の一押しも効いたみたいだ。

「ま、俺達も同盟国としてサポートしてやらないとな」

「そうですね。お互いに助け合っていけたら」

メイメルはそう答えた。

ちなみに俺達はスイの上に乗リエスペリアに帰る途中だ。

個人的にはレイの晴れ姿も見なかったが国の指令で来てる以上長居は出来ない。

「にしてもあんなにぱっと同盟結べるなんて思わなかったの」

走りながらスイも話に入る。

「だよな。街で偶然レイと会えたのがでかいよ」

「神様が見ていたんじゃないですか？」

ふふっと笑うメイメル。

うーん、あのヒゲジイがそんな事するかな：

俺が渋い顔をしているとメイメルがあっと声をあげた。

「そういえばツリーの上の店に行ってませんね」

「あ、確かに」

忙しかったし完全に忘れてた。

ツリーの上：そう言われると気になるよなあ：

「スイ、今から戻ったりはできねえかな？」

後ろ髪を引かれるのでダメもとで頼んでみる。

「無理じゃ。それは今度の楽しみに取っておけばよろう」

「そうですね。また今度来たときの楽しみにしておきましょう」

「えー…」

俺達はにぎやかに山道を進んでいく。

遠くの空で飛竜が大きな声をあげた。



## 第十六話 結末（後書き）

2章からは不定期更新になるかもしれません

1話当たりの量を4000字程度まで引き上げる予定なので  
てゆうか書き溜めがもうないんです

## 第一話 王宮での生活

リーグアでの騒動からはや1ヶ月。

秋を迎え紅葉がキレイな季節になった。

この世界に季節があるとは少し意外だったが季節の移り変わりは生活に彩りを加えてくれる。いいものだ。

話は変わるが、リーグア新王レイモンドが同盟関係の調印、ならびに親睦会を行う為に3日後エスペリアを訪れるらしい。

城下町も以前の活気を取り戻し商人や旅人が毎日行ったり来たり。

かくいう俺も軍の訓練に参加したり、1ヶ月前に会った子供達に城下町を案内してもらったりと充実した毎日を送っている。

一ヶ月前はレベル5にも満たない新兵達もなんとかレベル10前後に育って俺としても鍛えた甲斐があったと満足感がある。

まあ同盟国の王様に頼りない兵士を見せるわけにはいけないから新兵達にはかなりのハードスケジュールをこなしてもらった。

脱落者が出なかったのが一番の収穫だ。

このように忙しい毎日を過ごす日々

メイメルからお願い事をされたのはそんなある日の事だった。

「ほら！そんなんじゃリーグアの国王に鼻で笑われるぞ！気合い入れて戦え！」

時刻は昼前、時間的には10時前後くらい。

俺は兵士達を連れて付近の山にやってきた。

最近ここら近辺に住む住民がベアーウルフやコボルグの被害に悩まされているそうで軽く討伐しに来たのだ。

この世界にはギルドというRPG御用達の組織はあるにはあるのが戦乱の世であるため特定の国に雇われていたり違う国に出かけていたりと人手がとにかく足りない。

そして彼らを雇うにもそれなりのお金がかかるため一般的な村人達はよほどの事が無い限りは彼らを雇わない。

以上の理由で軍が討伐にやってきたという訳だ。

国民の軍に対する信頼を得るだけでなく新兵達のレベルアップも兼ねているので一石二鳥。

ただ体を鍛えるだけでも経験値は入るのだが実戦とは雲泥の差があるのも大きい。

「やあっ！」

ラルクが最後のベアーウルフを倒し戦闘は終了した。

「よく頑張ったな。今日は俺に頼らなかった分昨日より一歩前に進んだと胸を張っていいぞ」

戦闘後、村に戻り休憩をとる新兵達にねぎらいの言葉をかける。

ラルクは新兵の中で一番レベルが高い。

12レベルの彼は素振りのしすぎで倒れた事があるくらいの実力家で今日も張り切って先頭に立っていた。

「あ、はい！ありがとうございます」

ラルクは俺の言葉を聞いてパツと笑顔をみせた。

生真面目な性格だから隊長には向いてないんだよなあ、と内心苦笑しながらラルクの隣に腰を下ろす。

「で、手応えはどうだ？ 実戦はまだ3回目だしまだ慣れないか？」

「ええ、まだまだです。自分の予測してない動きに対応するのは難しいですね」

ラルクは率直にそう言った。

だがその顔には充実感があるのを俺は見逃さない。

「まあお前も俺みたいに国を引っ張っていつて貰わないとな」

ラルクみたいなタイプは目標を高めにしないと伸び悩む傾向があるから満足されちゃ困る、というメッセージだ。

もちろんラルクはそんな意図は知らない訳だが。

「僕もカイルさんみたいな英雄になれるでしょうか？」

「なれるかどうかじゃなくてなれるように努力するのがお前の仕事だよ」

そう言って俺はラルクの背中を叩いた。

王宮に戻った時にはすっかり日も暮れて外は真っ暗になっていた。  
新兵達に解散の意向を伝え俺は部屋に戻った。

「あー疲れた」

ベッドに倒れ込み今日の出来事を振り返る。

「大体こっちに来るまではただの高校生だったヤツに皆期待しすぎなんだよ」

その原因を作ったのは俺なんだがな。

ベットの上で寝転がると疲れも手伝ってまぶたが重い。

コンコン

「ん？」

誰だろう？夕飯にはまだ早いはずなんだが。

開けていきなり刺されるとかは無いと思うので返事をしてドアを開けてみた。

「失礼します」

なんだメイメルか。

こんな時間に来るとは珍しい。スイとケンカでもしたんだろうか？  
メイメルはピンク色のドレスを着て頭にはカチューシャ（って言うんだっけ？よく分からんが）をつけている。香水のいい匂いが俺の眠気を吹き飛ばした。

「おう、どうしたんだ？何かマズい事が起きたか？」

「いえ、そういう事で来たんじゃないありません。今日はお願いがぁあつてきました」

メイメルがお願いとは珍しい。

いつもはスイを使えばしりさせるのに。

老体はいたわるものじゃ・・・と嘆いていたのが記憶に新しい。

メイメルにそれを言ってみたら護衛だからねとか言いそうだ。

「カイルは今日も新兵を特訓しましたよね？」

「ん？まあそれが仕事だしな。それがどうかしたのか？」

「……私にも特訓してくれないでしょうか？」

え？何の？夜の？

…冗談は置いといて

「特訓って魔法のか？ならスイの方がいいと思うぞ」

魔力とかほぼ感覚的にしか使っていないから頼られても困るんだよな。

「いえ、魔力の特訓はスイにしてもらってますから」

え？じゃあ

「剣の特訓か？」

俺がそう聞くとメイメルはこくりと頷いた。

なんでも話を要訳するとメイメルはレベルを上げておきたいんだと

いう話でそのための剣の特訓らしい。

「でもなんで急にそんな？」

「皆さんに守ってもらっただけっていうのが耐えられないんです。多  
少なりと自分の身は自分で守れるようになりたいんです」

それだけ？もっと何かあると思ったんだけど。

まあメイメル of 気持ちもよく分かる。ゲームでも助けられっぱなし  
のお姫様とか多いし。

いざという時に本人が強かったら有利だしな。

「じゃあ明日の朝、新兵達の訓練が始まる前に来てくれ」

俺がそう言うのとメイメルはもう一度頷いて部屋を出て行った。

翌日、新兵達の訓練が始まる約2時間前。

広い中庭へ足を運んだ俺は1人の姿を視界に捉えた。

「あ、カイルさんおはようございます！

今日は早いですね」

ラルクだ。

努力家というのは重々承知していたがこんな朝早くに居ると思わ  
なかった俺はラルクに

「お前毎日こんなことしてんのか？」

と聞いてみた。

ラルクはさも当たり前といった様子ではいと返事を返した。  
そりゃ新兵一強いわけだ。

「カイルさんは何か用事があるんですか？」

「ん？ ああちよっと訓練をお願いされてな」

「へえ、カイルさんが直々に訓練とはお相手はだ…れ…」

ラルクが急に黙る。

振り返るとちょうどメイメルがこっちに歩いてくるのが見えた。

「よ。時間通りだな」

いつものドレス姿とは違って変わって動きやすそうな膝くらいの丈のスカートをはいていて、そこからスラッとした足が伸びている。  
長い髪もまとめられ腰には細いレイピアがあり、本人のやる気が見てとれた。

「カイル、彼は？」

近づくなりメイメルがラルクを見て尋ねる。

「あいつはラルクって言って新兵達の中でも一番の努力家だよ。  
レベルも新兵で一番高い」

俺の説明を聞きメイメルはラルクに歩み寄って

「はじめまして。メイメルです。将来エスペリアを守る騎士にな



れるよう頑張って下さいね」

「は、はいっ！」

いきなりのメイメル登場に顔を赤らめガチガチである。

「挨拶はそれぐらいにしてさっさと始めよう。時間が惜しい。とりあえずメイメルの实力を知りたいから全力で向かってきてくれ」

そうやって俺は訓練用の木刀をメイメルに渡し少し離れる。

メイメルもレイピアを腰から外し、木刀を両手で持って構える。

「それじゃあ、行きます！」

メイメルは地面を蹴り下から上に木刀を切り払う。

それを軽く受け流し一步後ろに下がると今度は右手一本で突きが飛び、とっさによける。

メイメルの木刀に俺が斬りかかりにいくとメイメルの左手が淡く光っているのが見えた。

「おっと」

攻撃をやめ大きく距離をとる。

直後。

俺がいた場所の草が切りとられ空を舞う。

風の初歩魔法 ウインドカッター 風刃だ。

「ずいぶん容赦ないじゃねえか」

剣筋も悪くないし魔法もちゃんと攻撃の流れに乗せて使える。思った以上にメイメルは強いようだ。

「それはどうもっ！」

再び斬りかかるメイメル。よく見るとこの時も風砲ウインドショットの反動を利用しているらしい。

だが二度は通用しない。

俺は真正面からそれを受けメイメルの勢いを殺す。

間髪入れず片手で木刀を振るいメイメルの木刀をはじいた。

「…予測以上ではあるが攻撃がワンパターンすぎるし魔法ももっと使い道がある。まだまだダメだな。」

「ちょ、ちよっとそれは言い過ぎですって」

焦った様子でラルクがこっちに走ってくるが俺は無視して話続ける。

「実戦で使える魔法はあれで全部か？」

「風魔法はなんとか使えるんですが他はまだ…」

そう言っとうなだれるメイメル。

さすがに言い過ぎたかな、反省しよう。

「なるほど。ならそれでなんとかしよう」

といっても俺の考えてる技はかなり時間がかかりそうなんだが、剣で風魔法って言ったらあれは外せないだろう。

「カイルさん、そろそろ時間ですよ」  
「ん、了解」

ステップや剣のさばき方を教えたところで時間切れとなり、その後ラルクも魔法を学びたいと言ってきたので明日からはスイも呼ぶことにした。

「へえー！じゃあ兄ちゃんってすげー人なんだ！どーりでお金持ちだと思った！」

子ども達の内の1人、タイトが驚く。

夕方、予定していたメニューが早めにこなされてしまったため時間が余り、城下町の子ども達に会いに来た次第だ。

明日からはもう少し量を増やすかな。

子ども達の案内のおかげで大体の場所は1人で行けるようになったが、たまに様子が気になるのでちよくちよく顔を出すようにしている。

今は俺の素性が分からず、子ども達の親にかなり警戒されたのでざっと説明を済ませたところで、一応持ち歩いていたエスペリアのバツジも役に立ち、タイトの家にお邪魔した俺は一瞬で子ども達に囲まれて質問攻めをくらっている。

「じゃあ綺麗なメイメル様ってやっぱり近くで見たらもっと綺麗？」

口を開いたのは一番年下の少女、マリーだ。

初めてこいつらに会った時はタイトの影に隠れていたんだがいつの間に懐かれたのか、俺に積極的に話しかけてくるようになった。

「ああ綺麗だぞ。今度メイメルからお菓子か何か貰ってきてやるよ」

マリーがぱあっと目を輝かせる。

「ホント！？楽しみだなあ。メイメル様ってどんなお菓子作るの？」

「こないだはケーキをご馳走になったよ。今度はクッキーにしてもらおうかな」

俺の言葉にわあっと沸く子ども達。

クッキーはなかなかの高級品だから気持ちも分かる（エスペリアは森が多く、小麦を商人達の輸入に頼ってるためだ）

「ついでにおこづかいもちよーだい！」

「それは無理」

タイトの頭に軽くチョップ。

マリーが楽しそうに笑い、釣られてみんなも笑った。

「ところで兄ちゃん、最近町でヘンなうわさが流れてるんだけど知ってる？」

「変な噂？なんだそれ」

そんなもの聞いたこと無いんだがよくある都市伝説か何かだろうか？

「さいきんね、王宮の裏にある森から夜になると不気味な音がするって話。

なんでもこないだの戦争で死んだ兵士のオンレイだとか」

そう言ってお化けのポーズをとるマリィ。

それはキヨンシーだろ。

「……な、なんだ、よくある怪談話じゃないか」

ほっと胸をなで下ろした俺だったがタイト母がとんでもない事を言い出した。

「じゃあもしよければ調べてくれませんか？

うちの子が探検に行きたい行きたいと言って困ってるんです」

は？

「いや、でもただの噂でしょう？わざわざ行かなくても…」

大体なんで俺？

俺には新兵を鍛えるという役目があってだな

「いえ、カイルさんみたいな頼りになる人になら安心して頼めます。ダメでしょうか？」

いや、そうは言ってもだな…

あんた最初俺を警戒してたじゃんか。と突っ込みたいのをなんとか我慢。

「…兄ちゃん、もしかして怖いのか？」

何を言う、マリーよ

「そんなことあるわけないじゃないか！」

「じゃあお願い！」

俺の顔を下からキラキラした目で見るマリー。

いやいや別にロリコンとかじゃなくてだな、こう勇者としてのプライドとか色々あるわけで。

結局任せろと言ってしまった俺であった…

子どもに甘いだけということにしといて下さい。

時間も時間なのでタイト達と別れて大通りに向かう。

暗い路地裏に俺の足音だけが静かに響く。

城下町に出る時は腰に一般的な剣を一本つるしているだけなので自然と警戒しながら歩いてしまう。

決してさっきの話のせいではない。ないんだ！

ガタンッ

ビクッと飛び上がるように後ろを向き剣に手を運ぶ。

「にゃー」

「な、なんだ、ただの猫かよ」

脅かしやがって。

帰ろ帰ろ。

「……………にゃー」

つたない足取りで俺の後ろをついてくる猫。すりすり。黒猫なのか、暗い路地裏では鋭く光る目だけが見える。

「……………」

「にゃー……………」

王宮の廊下にて

「あれ、カイル。その猫どうしたんですか？」

「ああ、汚れてるしお腹すいてそうだから拾ってきた」

あんなかわいそうな猫ほっておけるほど俺は冷たくなかった。

部屋に戻った俺は非常に葛藤していた。

「今日行くべきか、いや明日でもいいよな…」

無論今日タイトから聞いた怪談話のことだ。

言わなくても分かると思うが俺は重度の怖がりだ。

そんなの行きたく無いに決まってる。

だがこっちに来てから責任感あるポジションに居続けてしまったために一度引き受けた事は全うすべきだという信念が出来上がってしまった。

昔はもっとあきらめの早いヤツだったんだけどなあ：

どうしたもんか。

晩飯を済ませ、煮詰まった俺は結局一つの結論を出した。

「旅は道連れ、みんなで行けば怖くない」

巻き込めるだけ巻き込もう、そうしよう。

結論を出した俺はそのまま体を横にして目を閉じた



## 第二話 新兵達をいじ……鍛えよう（前書き）

いまさらながら活動報告というものに気づいたW

今度からちよくちよく書いていくんでよかったです  
お願ひします

## 第二話 新兵達をいじ……鍛えよう

日本時間では12時くらいだろうか。

窓の外から月の光が差し込み、鈴虫のような鳴き声が聞こえる。

秋独特の風景を眺めていると昔の人のように俳句を詠みたくなる。

俺は立ち上がり水をひとくち口に含んで窓を見やった。

「……………」

ね、寝れねえ…

今日は一日中動いてたから疲れてるハズなのに全く眠くならない。

…きっとあの話を聞いたせいだ間違いない。

窓の外を眺めていてもらちがあかない。

寝れないならかなり古典的ではあるが羊でも数えてみよう。多少は効果があるハズだ。

目をつぶって、と

羊が1匹

羊が2匹

羊が3匹

・  
・  
・  
・

・ ・ ・ ・ ・

羊が100匹

羊が101匹

「眠れねえ！」

ダメだこんなじゃダメなんだ！

明日も朝早いしヤバいつて！

……いや

焦れば焦るほど泥沼化していくだけだ。

一旦落ち着いて…

ガタンッ

「ひうつ！？」

何だ？何の音だ？

ガタンッ

ドアから音がする。

え？死神来た？

森行っていないのに来ちゃった感じ？

ガチャン キィ…

「ぎゃあああああごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

布団にくるまりガクブルする俺。

ヒタツ ヒタツと歩く音が近づいてきた。

俺のベッドの前で足音が止み、

そして

「……………にゃー」

……………え？

布団から顔を出すと俺が拾ってきた黒猫（俺の名前からカイと命名した）

が可愛い声で鳴いていた。

「…お前かよ脅かしやがって」

緊張の糸が切れたのか、なんか急に疲れてきた。

ベッドで横になるとそれまで眠れなかったのが嘘みたいに俺は夢の世界に飛び立った。

俺の眼前には一面晴れやかな草原が広がり吹き通る風が心地いい。

どこかで見たことあるような場所だか思い出せない。

「ここは…夢の中だっけ」

そういや寝たんだった。

「久しぶりだな、カイル」

ん？後ろに誰か居るみたいだ。

振り向こうと試みたがなぜか振り向けない。いや、振り向きたくないのか？よくわからん。

「黙って話を聞け、これから世界はお前を中心に回る。

その時、お前は一つの選択を迫られる。正しい選択をする必要はない。お前の選択が正しい道へ導くだろう」

ああ、誰かと思ったら師匠か。最近夢によく出るねホント。

でも何で振り向けないんだ？

夢だからか？

1人でうなっていると師匠が俺の背中の手を伸ばした。

「あのカイルがまさかこんな事に巻き込まれるとはな」

どうでもいいけど俺の夢なのに何で俺に権限がないの？

勝手にしゃべらないでほしい。

「なんで？それはお前が居るのはお前の夢の中じゃないからだ」

読心術でも使えるのかアンタ…

じゃあここどこよ？

「ここがどこか、いずれ分かるときが来るさ。……時間が来たよう  
だ。また今度会おう。」

最後に一つ、人の好意を自覚しろよ」

後ろから人が遠ざかる気配。

振り向いた時には一面に広がる草原に人影はなかった。

「にゃー」

耳元でカイが鳴いている。

腹が減ったと言いたいのか、俺の腹に鎮座してしっぽをぱたぱたさせている。

「んあ…」

体を起こすとカイが俺の体から降りた。

目をこすりながら背伸びをすると昨日見た夢の内容がフラッシュバックした。

『お前の選択が正しい道へ導くだろう』

「選択って何の事だ？」

なんか世界がどーたらこーたら言ってたのも気になる。

「にゃー…」

「おっと、早く準備しないと遅れちまう」

夢は夢。正夢とは限らないしな。

そしてメイメル特訓2日目

「今日は魔法と剣の連携を確認しよう。風魔法は昨日使った2つしか使えないのか？」

ウインドウォザリアボール

「他には風壁と火玉くらいですね」

「魔法の結合は？」

「できません」

魔法には基本的な属性が、風 水 火 電気 光 闇の6つ存在し、高度な魔法になると上位互換である嵐や炎になる。

高度な魔法に限らず、初歩的な魔法で嵐や炎と同等の威力を作り出すことも可能で、それを俗に属性魔法の結合と言う。

水と火を混ぜると水蒸気になったりといった具合だ。

結合魔法は消費MPが少なくて済むがその分習得が難しい。

「ならワシが今度教えてやるかのう」

スイさん久しぶりの登場。

メイメルに付きっきりだったらしく満足に散歩も出来んのじゃとグチっていた。

年をとっても散歩したくなるのは狼の習性なのか、はたまたそういう趣味があるだけなのか。

「じゃあ結合魔法は任せるよ。風壁が使えるならそれを使ってみるか。風壁の特徴はこちら側からの攻撃は通すところだからな。戦闘中に使えりゃ便利だろ」

「えーっと、実は風壁は両手使わないと使えないんです」

じゃあ意味ねえじゃん…

「ふいー」

メイメルの特訓2日目が終わリホットミルクをすすする。

ホットコーヒーはないのかと聞いたらコーヒーとは何かと聞き返された。

無いと恋しいな、コーヒー…



「何涙目になつとるんじゃ？故郷の風景でも見えたのかの」

そこへスイがやってきた。

今日はラルクに付きっきりだったハズだ。

「あ、いや昔居た世界にあった飲み物が恋しくてさ」

スイには俺の事情を説明してあるからな。

相談できるただ一人、いやただ一匹の仲間。仲間って大事だよん。

「ほう、どんな飲み物なんじゃ？」

「あれはな、黒くて…」

「ほう、黒い飲み物とは興味深いの」

結局コーヒーについて新兵達が揃うまで語り続け、新兵達は聞き慣れない単語に首をかしげていた。

カイルとの朝の特訓を終えた後、王の間にて

「お父様、レイモンドは結局いつ参るんですか？毎日毎日まだ決ま  
ってないと言わないんじゃ準備のしようがありません」

レイモンドが来ると話されて早くも3日が過ぎた。

リージアから全く連絡が来ないらしいが王様自ら同盟国に行くなんて重大な事連絡が来ない事がおかしい。

非難がましい目でお父様を睨むとお父様がうろたえた。

一国の王としてどうなのかしらね、まったく。

（実はこうやってメイメル様がしつかり者に育ったんだがそんなこと本人が自覚しているはずもないよな）

（まあうちの王は優秀だけど気が弱いつてことで有名だからな）

あれ？

今何か聞こえたような…。気のせいかしら。

心なしか親衛隊の居る方から聞こえた気がする。

でも親衛隊の人達はいつもと変わらない雰囲気だし：

そんなことを考えてるうちにお父様が恐る恐る口を開いた。

「メイメル、ワシも伝書鳩を出そうとしたがリージアは飛竜のテリトリーじゃ。確認しようにも方法がなからう」

「お父様、リージアから来た小飛竜に手紙を持たせれば良かったじゃないですか！？なんで何も持たせずに帰すんですか！」

私はつい怒鳴ってしまい無表情を貫く親衛隊達も一瞬たじろいた。

「いや、まさかこんな事になるとは思わなかったんじゃ」

「こんな事？何か私に隠してる事があるんですか？」

するとお父様はあからさまにしまったという顔をした。

ここで引いてなるものか。

「やはりそうなんですネ。今なら許してあげます。説明して下さい」

（これではどっちが王様か分かったもんじゃないな）  
（まあ将来頼りになりそうだしいいじゃないか）

む、今度は間違いなく聞こえたわ。  
親衛隊も暇なのかしらね。

私はお父様をじっと見て返事を待った。  
そしてお父様が話したのはとんでもない内容だった。

その日、私は訓練終わりのカイルを捕まえてスイと共に私の部屋に  
戻った。

ここなら誰かに聞かれる心配も無いと思ったためだ。

「これから話すことは絶対漏らさないでください」

カイルとスイが頷く。

「レイモンドが我が国に来ることは知ってますね？結論から言うと  
それは延期になりそうなんです」

「なんでなんだ？まさか本格的にマドラとの戦争が始まったのか？」

「いえ、戦争が始まった訳じゃありません」

カイルの言葉に私は首をふり答えた。

カイルはじれったく感じているのか、無言で私の言葉を待っている。

「じつはレイモンドから連絡があって『エスペリアにスパイが忍び込んでいます』みたいなんです」

「スパイ？また急な話じゃな。なんでスパイがおるとわかるのじゃ？」

「実はリージアにもスパイが紛れていたみたいでついこないだそれが宝物庫に侵入した時に捕まったらいいんです。その捕まった人がエスペリアにもスパイが忍び込んでいる」と

「そんなのウソかもしれねえじゃん」

「ウソかもしれんと言っても王を危険にさらす訳にはいかぬからもう。延期するのも当然じゃ」

「ええ、だから私達でそのスパイを探さないといけません。だからカイルとスイに頼もうと思ったんです」

カイルもスイも二つ返事で引き受けてくれた。

スパイについての情報がほとんど無いのが現状だ。

とりあえず怪しい行動をしている人をピックアップするしかないだろう。

カイルは心当たりがあるのか、何かぶつぶつ言いながら部屋を出て行った。

メイメルから聞いたスパイの話。

タイト達から聞いた怪談話。

つながりがあるかどうかは分からないが早めに確かめるべきだろう。

問題はメンバーだ。

あまり大勢で行けばスパイに気づかれ逃げられる可能性がある。

逆に少人数だと敵の数によっては危険を伴う。

スイは確定として他に1、2人は欲しい。

メイメルは論外。お姫様を危険にさらすのはアウトだから。

となると…

「アイツを誘うか」

久しぶりに会いに行こうと心の中で決め、ベッドに横になった。

朝起きると隣でカイが丸くなっていた。

どうやらここが気に入ったらしい。

カイは時間感覚がかなり正確らしく、メイメルとの特訓30分前に起こしてくれる良いヤツだ。

拾った恩をしっかりと返す律儀な猫である。

メイメルとの特訓はいつも通り終わり、俺は中庭の正規兵が集まり訓練している場所に向かった。

たくさん人が居たが労する事なく目的の人物を見つけ、話しかけた。

「よ、久しぶりだな、メイル」

（メール。作者が適当に名付けたためメールと混ざりややこしくなってしまった人物。作者の予定では二度と出さない予定だったが話の都合上再登場した。  
クトラ族特有の緑髪を持つ。）

「何よいきなり。あれっきり来ないから忘れられたと思ってたんだけど」

メールは皮肉めいた口調でそう言った。

いや、俺も完全に忘れてたよはっはっは。

「何言ってるんだ。俺はそんな薄情な人間じゃないぜ」

「どーだか。で、要件は何？」

「ああ、実はかくかくしかじかでさ」

「で私について来て貰おうってことかしら？ずいぶん都合のいいこと」

不機嫌だなあ…。

何とかしてついて来てもらわないと。

「大体そんなのアンタ1人で行けば良いじゃない。何で私を誘うのよ」

「え？だって怖いじゃん」

俺がそう言うのとメールのツボに入っただのか急に笑い始めた。

「ア、アンタもしかしてビビりな訳？」

「だったらなんだよ」

「じゃ、じゃあついて行ったら面白そうね。いいわ、ついて行って

あげぷっ」

「話してる時に笑うのは止めてくれよ」

まあメールの勧誘は成功したしいいか。

「……………」

「ん？」

……………

「……………気のせいかな」

「どうしたの？」

「いや、今誰か居たような気がしたただけだ。多分気のせいだから気にすんな」

まさかスパイかな？

気をつけないとな。

「カイルさんっ…きついっす！」

ラルクがうめき声をあげ助けを求める。

「いや、俺は嬉しいぞ。日に日に成長してくれて」

それを微笑ましく見る俺。

（こんな目にあうなら手を抜けばよかった…）  
（バカ、聞こえるぞ）

「ほい、お前ら追加」

「「ぐああああ」」

聞こえてないとしても？

「な、何をしとるんじゃお主…」

声の主はメイメルの専属護衛さん。

「おう、スイか。たくましい新兵達に特別メニューを施してるだけだぞ」

決していいじめではない。

「いや…これはただの拷問なのでは…」

スイがかなり顔をひきつらせている。

視線の先には新兵達。

俺の師匠直伝、地獄吊りだ。



地獄吊りとは足をロープで縛り付け王宮の裏にある崖に吊したものだ。

重石をつけてあるのでかなり厳しいと自負している。

「こんな事平気でするとはお主悪魔か」

「いや、これを考えた師匠に言ってくれ。俺は師匠の教えに従ってるだけだからな」

「「あ、悪魔ああ!」」

なんとでも言うがいい。俺も一度同じ道を通ったのだ。

「ところでこんなとこに何か用か？」

「おお、そうじゃった。ラルクに頼まれとった魔力石を埋め込んだ剣ができての。後で渡してやってくれぬか？」

そう言っ腰に巻いてある剣を差し出した。

「魔力石? どういうことだ？」

「この魔力石は持ち主の魔力を剣に伝えるためのものじゃ。アヤツなかなか筋がいいぞい」

へーそんな使い方もあるのか。

「じゃあメイメルの方もお願いできないか? アイツも剣と魔力を混ぜれば戦いやすいだろうし」

メイメルもきつと喜ぶだろう。

俺がそう言うとき、スィは少しにやけた。

相変わらず噂好きのおぼちゃんみたいなヤツだ。

メイメルの方もすぐでき次第持ってきてくれると約束してスィは王宮に戻っていった。

みんな前に進んでるんだ。俺も頑張らんな。

「よしそこまで！1人ずつ上げるから動くなよ！」

その前にコイツらの相手が先か。

早く強くなってくれよ。

自分の事に手が回らねえからな。

「遅かったな」

「ええ、少し取り込んでましたから」

「王宮内の様子はどうか？」

「…何も変わりはありません。このままいけば我々の目的も果たせるでしょう」

「そうか、ならいい」

「おや？どちらへ？」

「ただ喉がかわいただけさ。飯もまだだしな」

「では私はこれで」

「ああ、くれぐれもボロを出さないようにな」

「…行ったか」

**第二話 新兵達をいじ……鍛えよう（後書き）**

週一更新は守りたい

### 第三話 城下町で

1週間がたった。

秋の季節も中頃。落ち葉の量が増える一方で城下町の方も冬に向けた動きが活発化している。

秋の終わりが近づくのと時を同じくしてメイメルとの訓練も終わりに近づいてきた。

メイメルは日に日に動きが鋭くなっている。

レベル差がなければ危ない相手だろう。成長の速いやつだとカイルは苦笑する。

そしてもう一つ。

タイト達に頼まれた幽霊話の確認もまだしていない。もうじき新兵達が正規兵に仲間入りする予定なのでそれが終わったら行くつもりだ。

決して物怖じしてる訳では無いんだ…と自分に言い聞かせる。

予定ではスイ 俺 メイルの3人で向かうことにしている。

そして今日は新兵の昇格試験の日

「よし、全員揃ったな。今日は知っての通り昇格試験の日だ。俺の地獄メニューをこなしてきたお前ならきつと合格できると信じてるぞ」

新兵達から引きつったような笑い声が起こる。

まあ分からんでもないよ、うん。カイルもその苦しみを知っているためか、つられて笑う。

「じゃあ試験の内容を説明する。今回は数人一組で実戦を行ってきってもらう。

いつも組んでるメンバーだから名前は呼ばないぞ。

呼ばれた組から順に実際に王宮にきている被害届から好きなヤツを選んで行ってこい。

期限は明日の夕刻までできちんと依頼をクリアできたかは実際に村を訪れ確認する。

確認をとれたものから順次正規兵の鎧や武器を渡す。

以上だが何か質問はあるか？

………無いようだな。じゃあ1班から順に選んで行ってこい」

1班のリーダーが前に出てゴブリン退治の依頼を取る。

続けて2班 3班と依頼を受け取り、数分後には中庭から全員が消えた。

「さて、アイツらの中で一番に帰って来るのはどの組かな」  
「ホントはもう分かってるんでしょ？」

振り返るとメイメルが後ろ手を組んで立っていた。  
気配も消せるようになるとはいよいよヤバいかな。  
だがまだそんな事を思えるくらいメイメルの気配は読み取れた。

「びっくりするからそういうのは止めろ」

「別に良いじゃないですか。首を取ろうって訳じゃ無いんですから。  
それに気づいてたんでしょ？」

「……何でそう思う？」

「だってホントに驚いたなら奇声を発するハズですから」

……ピンポーン

「お前の気配くらい読めないと面目丸つぶれだからな。何か用か？」

するとメイメルは俺の前に回り込み両手を前に出す。

「はい、どうぞ」

「…クッキーか」

「ええ。今度子ども達に持って行く約束したんでしょ？  
久しぶりに行ってきたらどうですか？」

いたずらっぽい笑みを浮かべるメイメル。

「どうですかって行ってこいってことだろ？このクッキー」

そんな遠まわしに言う必要も無いだろうに。

「あら、そんなこと無いですよ。行かないならスイに食べてもらいますから」

「俺にはくれねえのかよ！」

せっかくのクールキャラが台無しになってしまいが突っ込みを我慢出来なかった。そこ、クールじゃないと言わない！

仕方ない。行ってくるか。

カイルは右を向いて城門へ歩いていった。

昼頃に城下町に出るのは久しぶりだ。

夕方とは人通りも雲泥の差で歩くのもままならない。

ドンッ

「いたっ！」

「おっと、大丈夫か？」



小さい子が走ってきてカイルにぶつかった。飴を手を持っていたらしく粉々になった飴を泣き出しそうな目で見ている。

仕方ないか。そう思いカイルはぶつかってきた少女の右手に銅貨を2枚手に握らせた。

「ほら、これで飴買ってきな」

頭をなでてやると少女は不思議そうに首を傾げた。

「おにーさん、だれ？」

「ただの優しい戦士だよ。ほら、お父さんとお母さんが呼んでるぞ。早く行ってこい」

「うん！ありがと、やさしいせんしさん！」

人混みの先から駆け寄って来た父と母に向かい走り出す。

父母の間に入り手を握るその少女を見て、カイルは母の姿を見た。

母さん元気してるかな？俺が居なくなっただけ山泣いたろうな…。

俺は近くの焼き鳥を売ってる店で二本焼き鳥を買った。

この時間でも路地裏は閑散としている。だから路地裏なんだけどな、と自分で突っ込む。

「おや？」

歩いていくとタイトとマリーが何やら口げんかしている場面に出くわした。

2人はカイルに気づき言い争いを止めた。

「よ、何ケンカしてんだ？」

カイルが聞くとあからさまに嫌な態度を出し、互いに指を指して

「マリーが悪い」

「タイトが悪い」

同時にそう言った。2人を見ていると少し微笑ましい。

昔の自分もこんな感じだったなあ、と懐かしむ。

俺は袋からクッキーを一枚取り出しわざと音を立ててかじった。

2人がこつちを振り向いたところでもう一枚取り出し見せびらかす。

「ほら、ケンカするヤツにはクッキーやらねえぞ」

「「え!？」」

「まだケンカするか？」

「「しないから!」」

泣き出しそうな顔で謝るタイトとマリー。

カイルも昔はこうやってお菓子抜きにするって聞いた時は必死に謝

った記憶がある。

お菓子無しは子ども達にとって死活問題だから。

「じゃあタイトの家みんな集めてクッキー食べようか」

そう言うのとタイトとマリーが走り出した。

「じゃあ（ポリポリ）、まだお化けの話は（ポリポリ）、まだなんだね（ポリポリ）」

マリーがクッキーをかじりながら話に入ってくる。

食べながらしゃべるなど言ってみたがどうやらクッキーを食べるのは初めてらしい、全くやめる気はないようだ。

喜んでいたとメイメルに伝えないとな。

必死にクッキーの取り合いをしている姿を見ていると思わず笑ってしまう。

カイルはタイトの後ろに座るタイト母に話を振った。

「ところで最近何か変なことはありませんでしたか？」

「いえ、特には」

「そうですか。それは良かった」

怪しいヤツの噂とかは無いか。

さすがはスパイと言っておこう。

城下町は噂がすぐ広がる。怪しいヤツが居ればタイト母の耳に届かない訳がないし、やはり王宮内の誰かだろうか？

思案しているとマリーが指を舐めながらカイルを見上げた。

「なんかカイルお兄ちゃんってぜんぜん強そうに見えないよね」

「なんで？」

「だって強い人ってせーかく悪い人多いもん。お兄ちゃんはすごく優しいし戦ってるところも見たことないから」

「いーんだよ、平和なのが一番なんだからさ」

子供らしい発言にそう答えて背中の大剣『五月雨』を横目で見る。

それにこっちに来る前は普通の高校生だったしなあ。

立ち振る舞いに威厳が無いのも当然だろう。

自分で自分を納得させテーブルを見やるといつの間にかクッキーがなくなっていた。

「なんだ、もう食ったのか」

「だ、だってうまいんだもん」

「そうか、じゃあメイメルに作ってもらおうよ。また今度な」  
少し照れ気味のタイトの頭をなでて俺は立ち上がった。

外はまだ明るい。今日はゆっくり休めそうだな。

さっさと帰ろう。

日頃の疲れを取るためカイルは家をあとにした。

しばらく歩き、門へつくと王宮前でカイが待っていた。

「にゃ」

尻尾を振ってアピールしているカイの背中を撫でてやるやると尻尾をもう一度振った。

「わざわざ出迎えか？」

良くできた猫だ。

だがカイはなぜか俺のズボンのすそを王宮と逆の方向に引っ張る。城下町に何かあるんだろうか。

「にゃにゃ」

ついてこいと言わんばかりに歩き始めるカイ。

カイルは意味も分からぬままそれについて行った。

カイは迷いなく城下町を突き抜けていく。

カイの体は夕日に照らされ闇に染まっているみたいだ。

そしていよいよ城下町も終わり入り口の門が見えてきた。

「おい、どこ行きたいんだよ」

「にゃ」

カイルが口を開いたのと同じ時、カイが突然足を止め道のレンガを尻尾でパタパタ叩きはじめた。

もちろんこの世界には下水道も完備されておらず地下室もよほど金持ちでも無い限り無いはずなんだが、とカイルは訝しんだ。

「そこに何かあるのか？」

「にゃ」

どうやらそうらしい。言葉は分かるわ道案内もするわ賢い猫だ。

とりあえずカイが指すレンガに手をかける。

するとレンガの下にはもう一つレンガがあった。

確かこの城下町の道はレンガを二重にしているなんて事はなかったハズだ。

二層目のレンガも取り出した。

下にあったのは

「か、隠し通路？」

スパイのアジトだろうか？

カイがなぜこんな事を…？

疑問は後回しにしてカイルは地面に座りこっちをじっと見るカイを肩に乗せ、中に進んでいった。

「暗いな」

通路の中はひんやりとした空気が流れ、俺の足音（極力抑えてはいるが）が中に響く。

カイルは左手をかかげ

「ライト」

と唱えた。

RPGでは定番の明かりを灯す魔法である。MP消費も少なめ。

よく見ると通路はそんなに長い訳ではなく目をこらすとかすかに扉があるのがわかる。

（パタパタ）

「そうだな、さっさと行くか」

カイがじれったそうに尻尾で俺の頭を叩いた。

もしかしたらカイはある程度の知能を持ったペット型モンスターの一種なのかもしれない。

この世界ではほとんどのモンスターが戦闘型モンスターに分類されペットになんかとてもじゃないが出来ない。

だが小さいモンスターにはペット型モンスターが結構いるので女性プレイヤーはリスとか子犬をよく連れていた。

（でも黒猫なんて居なかったよな）

そこが引つかかるところだ。普段の行動を見るに間違いなく知能はある。でも黒猫を連れてる人なんて居なかったしwikiにも載っていないかった。

（おっと、もう扉か）

扉の前に到着。

中から聞こえる音を聞くにどうやらすでに準備万端のようだ。  
なら隠れても無駄かな？



カイルはスキル居合い切りで扉を破り中に入り込んだ。

中にはフードをかぶったヤツが1人。

その他が3人だ。

「な、何者だ！」

こっちのセリフですよ。

躊躇なく五月雨で雑魚Aを斬りつける。

もちろん峰打ちだけどね。

あっという間に雑魚3人を片付けフードをかぶったヤツに向き直る。

「誰だ？何が目的で」

そこまで言ったところでフードのヤツが急に叫んだ。

「あ、あー！お前、カイルか！」

え？なんで俺のこと知ってるんだ？

狼狽するカイルをよそにフードを被った敵が笑う。

「いやゝ久しぶりだよなあ。元気してたか？」

腰に左手を当て右手で頭をかくしぐさを見てカイルは相手が誰なのかを察した。

「まさか、シンシア？」

「何言っただよこの顔忘れたのか？…ってフードしてたんだっけ。わりーわりー」

あははっと笑いながらフードを取って謝るシンシア。

シンシア、賢者Lv67でカイルとパーティーを組んでいた。見た目はきゃしゃで名前も女っぽいがれっきとした男。

パーティーの迷惑を考えず攻撃魔法をぶっ放す、パーティー内での愛称は『笑う破壊兵器』。

「久しぶりだな、破壊兵器さん」

「おいおい再開していきなりそれかよぶっ放すぞ」

右手を構えるシンシアを冗談だと言ってなだめる。  
こんな至近距離で魔法を使われたらひとたまりもない。シンシアは火気厳禁なのだ。

シンシアになぜここに居るのかという質問をしてみるとこっちのセリフだと返された。

「俺の家に勝手に上がり込んでそれはないだろう」

「い、家？ここがか？」

「おう、ひんやりしてて気持ちいいんだぜ？」

そういやコイツ結構変な趣味あったな。

クモ好きで女の好みが『がちりしたヤツ』とか言ってたっけ。  
気にしてもしようがない。カイルはシンシアだからな、と納得して近くにあったイスに腰かけた。

「んで、なんでお前この世界に居るんだ？」

「それはこっちのセリフだったの。気づいたらこの世界にいたんだ。ログアウトもできねえし参ったぜ」

「あれ？じゃあ神様には会ってないのか？」

「誰だソイツ？知らねえぞ」

おかしいな。俺の時は神様に呼ばれてシンシアの時は何も知らせずにこの世界に飛ばしたのか。

俺には干渉してくるくせになんで？

「あ、そうか。メイメルがいたからか？」

「メイメル？　ってこの国の王女様の？」

「ああ、神様にメイメルを助けてやってほしいって言われてこっちに来たんだよ」

「ふーん、で今お前はどこで寝泊まりしてるんだ？」

「もちろん王宮に決まってるだろ。メイメルもいるし」

「死ねええええええええええええ！」

「え？　おいやめろ！」

その日ルインで大きな地震が起きた。

#### 第四話 仲間が増えて：

「げほっ…げほっ…こ、殺す気かてめえ！」

「ついカッとなっちまったぜ。まあ許してくれ」

「誰が許すか！謝る気ねえだろ！」

「うにゃ！」

部屋の中にあったイスとテーブルは丸焦げで原型を留めていない。なんとか間一髪でよけはしたものの衝撃はかなりのものだった。

「てかなんでこの壁壊れねえんだ。堅すぎだろ」

「ふっふっふ、こんな事もあるうかと壁に魔力耐性をつけていたのさ」

「やる気満々かい！」

何も変わってないと思ったら悪化してやがる。

シンシアは服についたススをはらいつつ俺の前に歩いてきて俺の肩に手を置いた。

「な、なんだよ」

「いやゝ俺が地下でひもじい生活をしてるといいうのにお前は王宮で優雅に暮らしてたとはなあゝ」

「い、いや俺も結構苦労したんだぞ？」「ほう？どんな？」「エスペリアを攻めてきたマドラを撃退したりリージアの王様暗殺したり」

そう答えるとシンシアが急に小刻みに震えだした。

「う、嘘はいけんな嘘は」

「いや嘘じゃねえから。新聞にも載ってただろ？」

「新聞買う金などない！」

「自信満々に言うことじゃねえだろ！」

本格的なホームレスになりつつあるシンシアの行くさきが心配だ。

「まあ心配するな！なんとかアテが出来たからな！」

「そのアテってまさか……」

「おう！紹介頼むぞ！」

やっぱりそうなるんだな。自分で何とかしようという気は無いらしい。

ため息混じりに横を見るとカイが不機嫌そうに尻尾を振っていた。

「そーいやその後ろでノビてるのは誰だ？」

「ああ、こいつらは借金の取り立てに来てたヤツらさ。おかげで助かったよ」

「……………はあ」

「というわけで連れてきました」

「う、うむ」

所変わって王の間。

王宮に連れてきた方がいいが俺が説明すると王様は難色を示した。（ちなみにシンシアは別室待機だ）

あいつが居たらいつ王宮が破壊されてもおかしくないからな。冗談抜きで。

「どうしますか？」

「カイル。おぬしはどうすればいいと思う？」

やはりかなり迷っているようだ。あいつの対処法なんて数えるほどしかないので王様に

「そうですね、とりあえず離宮に住んでもらうか、軍の仕事で遠征させるか、魔法耐性のある壁で作った部屋を用意するか、ですかね？」

と提案した。

「うむ。Lv67の賢者となれば是が非でも引き入れたいところじやが…そんな危険人物だとは…」

うんうんうなる王様。個人的にはシンシアに居てもらえと（性格はあれだけど）助かるんだよな。俺前衛だし。

しばらくうなっていた王様もついに決心したらしい。

「…じゃが、今の世は1人でも切り札になりうる者が欲しい。このまま別の国に行かれる位なら多少のリスクは覚悟するとうしよう」

と言っのけた。

「分かりました。本人に伝えておきましょう」

「いや、ここに連れてきてくれ。一目見ておきたい」  
「分かりました」

俺は立ち上がりシンシアのもとへ向かうべく歩きだした。

「あ、王様良かったらアイツの借金の肩代わり頼みます。結構借りてみたいなんで」

「……………うむ」

王の間全体に深いため息が流れた。

俺はカイルに案内されついに王宮入りを果たした。

王宮ですよ王宮！ゲーム時代はLv150以上用のクエストでしか入れなかった場所なのにこんなあっさり入れていーんでしょうか！もうね、ジメジメした地下生活に飽き飽きしてただけにね。地獄が一転天国入りですよはい。

庭ではもう暗いと言うのに衛兵さんが見張りしてるし廊下には真っ赤なカーペット。  
テンションまじあがるわ。

俺は衛兵さんの1人に離宮の一部屋に案内されしばらくここで待つと言われた。

「待つって言ったって落ちつかねえなあ」

こんな場所で待たされるとか初めてだし。  
とりあえず暇つぶしに部屋の中調べてみるか。小さなメダルとか薬草があったら面白いし。

「って何もねえじゃん」

あるのはソファアとテーブルにろうそく台だけ。  
来客用の部屋にタンスとかベッドがある訳ない。  
人の家だからタンスがあるのだよ。

「もういいや、寝よ」

ソファアに横になり目を閉じる。  
地下室の地べたに布団をしいて寝ていた俺にとってソファアの柔らかな弾力は強烈な睡眠作用を持っていた。



「ここだな」

衛兵から聞いた話ではこの部屋にシンシアが居るらしい。  
コンコンとノックをしたが返事がない。

「まさか逃げ出したか？」

アイツの性格を考えると可能性は高い。

俺は扉の中に入り、シンシアが寝ているのを見て安堵した。  
考えうる限り最良の状況だ。

「おい、起きろ」

シンシアの頭を軽く叩く。彼はすぐに目を覚まし大きく背伸びした。  
相変わらず女っぽい仕草だ。

「あーよく寝た。でどうだった？」

結果次第ではお前ホームレス決定なのにその余裕はどこから来るのか  
か教えて欲しいものだ。

「ああ。結果から言えばエスペリアの魔導軍に所属になった。

一応この部屋がお前の部屋になるから後でダンスとベッドを用意する。それ以外は勝手に買うなり何なりしてくれ」

俺がそう告げるとシンシアはうっひょー!と叫んだ。

彼がどれだけ辛い生活をしていたのか考えると少し同情してもいいだろう。

「給与は月の基本月給に仕事内容が加味される。

たくさん討伐なり護衛なりすれば給与は増えるし『物を壊したり人にケガさせたりしたら』給与は減る」

「そ、そんなに強調して言わなくてもいいんじゃないか?」

「お前は信用ならん」

「ひっど!」

事実だからしょうがない。

「でだ。早速任務に来てもらいたいんだがいいか?」

「:!? 今からか?」

「ああそうだ。内容は……………という任務だ」

俺は今日の夜に裏の森の幽霊騒ぎの真相をつかむべく向かう。

その旨を王様に伝えると民からの依頼だから給与を出そうと言ってくれた。つまり任務扱いである。

シンシアが居るのと居ないのでは大違いなだけあって今回誘うことにしたのだ。

幸いシンシアも久々にカイルとパーティー組むのもいいなと言ってくれた。

また後で迎えに行くと言って俺はその場を後にした。

時は少し前にさかのぼるリーグアでの出来事

私達は馬で山道を走り抜ける。

このまま進めばリーグアの王都ゴートの裏手に出るであろう。

そのためにわざわざこのあたりを調べ通りやすい道をえらんでおいたのだ。

王宮が遠くに見えた。私は馬を止め、仲間達もそれにならう。

私は仲間達の顔を一通り見て口を開いた。

「ここから先は予定通り二手に分かれ行動します。

Aチームは王都内でリーグア兵を引きつけること。Bチームは私についてきなさい」

Aチームのリーダーが部下に合図をおくり王宮へ駆けていった。彼らの姿が見えなくなるのを確認し私達も馬を走らせた。

しばらく走ったところにそれはある。

普段は兵士が常に見張りをしていて異常事態があればすぐに援軍が来るようになってる。

それだけリージア、いやこの世界にとって重要な場所なのだ。

私達は馬を森の中、いつでも逃げ、馬に乗れるような場所で地に降りた。

足音を殺し様子をうかがうとやはりこの間よりは警備が薄い。

「行きましょう。目的のために」

私達は駆け出した

「なっ！敵襲！？」

いち早く私達を視認した兵士の1人が叫び全員が武器を構える。オタオタしない辺りは流石ここを守るだけあるということか。

だが

「ぐっ！」

絶対的に私に劣る。経験、奇襲による精神的安定、何よりも実力で。私はまるでただの殺戮マシーンさつりくのように敵を切り刻んだ。

最初の1人は首だけになった。

2人目と3人目は心臓が壊れた。

最後の1人はこの場所の事を吐くだけ吐いてミンチになった。

全てが終わった時、私は横たわる死人の山をすでに人として認識していなかった。

「ここか」

私達の中に入り奥に進んだ。なぜか返り血が増えたような気がするが私が斬ったのは人ではない。ただの敵だ。だから気にしない。私は悪くない。

それよりも目の前のことだ。

この場所はいわばスイッチ。世界の力を目覚めさせる、私達にとって最初の出発点になる場所。

スイッチの入れ方は簡単だ。ただ魔力を注ぎ込むだけ。

「さあみんな、台座に手をあてて」

目覚めさせましょう。世界を、この大地を、そして醜い争いを続ける4つの大国を。

しばらく魔力を注ぎ込むと大きな音とともに台座が輝き始めた。  
スイッチが入ったのだろう。

私はその光に魅入られさらに魔力を込める。  
さらに輝きを増していき最後には神殿全体に作られた溝に光の波が  
脈をうちはじめた。  
これでもう大丈夫だろう。

「長居は無用です。帰りましょう」

魔力を使いすぎたのか、体がふらつく。私は壁に手をつきながら森  
に向かった。

#### 第四話 仲間が増えて…（後書き）

もう少しすれば設定やあらすじをまとめたヤツを出せると思います  
設定ややこしいよ とか 誰だっけ？ っとなった人用ですねw  
次回は明日の夜7時掲載です

## 第五話 三段深林

「王様、盗賊達の内2人を捕まえました」

リックが王の間に入ってきてそう報告した。

「そうか、この夜分大規模に暴れまわるとは何か目的が有りそうだな。縛ってここに連れてこい」

そう命じるとはつと返事をしてリックが部屋を出る。

ただでさえ政権交代して間もなく忙しいと言うのに余計な事をするものだ。

心の中で軽く毒づく。

「カーライル、お前は思う？」

隣にいる宰相カーライルに尋ねてみる。正直気を落ち着かせるためだけに聞いたのだがカーライルからはしっかりとした答えが返ってきた。

「狙いといえはあそこしか無いでしょう。賊達には全く益の無い行動である以上狙いは…」

「封印の祭壇か。だがあそこにはよりすぐりの兵士を配備しているし第一あそここの封印を解くには膨大な魔力が必要になる。そんな魔力持っているのはエスペリアの第二王女メイメルくらいだろう？」

「いえ、メイメル殿のような魔力を持っている者が1人とは限らない。となればその可能性も考慮するのは当然でしょう」



カーライルの言うことももつともだが正直その予想だけは当たって欲しくないものだ。

「王様、連れて参りました」

リックが2人の賊を縄で縛り付け連れてきた。2人の賊を玉座の前に座らせる。

「では詳しい事を教えてもらおうか」

僕がそう言うと賊の1人が口をニヤリと曲げた。歯並びの悪い歯が悪者面を一層引き立てる。

「クックッ、俺が知ってる事なら何でも答えてやるぜ？」

「なんだ、やけに素直だな」

「当たり前さ。俺達が今更しゃべったところでもう手遅れなんだからな」

「なんだと？」

「封印の祭壇の封印を解いた。お前らに再び封印し直すのは不可能だろ？だから必死に守っていたに違いないからな」

「なっ…！おい、誰か祭壇の確認をするんだ！」

焦る僕を見て賊の1人が下品な高笑いを浮かべる。

だがそんなことはどうでもいい。あそこの封印が解かれたなんてマズいことになった。いやこいつの出任せかもしれない。そうであつて欲しい。

「もういい。こいつらを牢獄に入れろ。明日緊急会議を行う」  
「はっ！」

焦る気持ちを必死に抑えリックに命じる。

しばらくすると見張りの兵士が駆け込んできて賊の言ったことは全て本当のことだと知らされた。

しなければいけない事は沢山あるがとにかく同盟国であるエスペリアに連絡しないと。

僕は小飛竜に急いで筆を走らせた手紙を持たせエスペリアに向かい放った。

夜も深くなり、王宮も寝静まった頃、俺、メール、スイは中庭に集まった。

「シンシア以外は揃ったな。アイツやっぱ来なかったか」

まあ分かっていただけだね。

とにかくラチがあかないので早速起こしに行こうとしたが

「別に居なくてもいいんじゃない？」

メールが不機嫌そうに拒否した。何かあったんだろうか？

「いや、少数で行動する以上高レベルの賢者は居た方がいいだろ？」

「スイが居るじゃない」

「ワシも魔法を使える者が居るなら居た方がいいと思うぞい」

「うう…」

スイにそう言われメールはしぶしぶ引き下がったがさらに不機嫌度が増したような気がする。

「わりー！遅れちまった」

何か声をかけるべきか迷っているとシンシアが歩いてきた。  
自分からやってくるとは明日は雨だな。

「いやあ時計が俺の部屋なくてさ。時間が分からなかったんだ」

※この世界の時計、標準時について※

アザーワールドでは4時間ずつに区切った時間表示が一般的。これは正確な時間を計るのが困難なためであり、2セット（つまり8時間）で朝昼晩が区切られている。

それぞれの時間表示は以下の通り

朝

3時～7時…水の刻

7時～11時…火の刻

昼

11時～15時…風の刻

15時～19時…地の刻

夜

19時～23時…光の刻

23時～3時…闇の刻

それぞれ時間帯によって魔法が強くなったり弱くなったりする。（水の時なら水魔法が強く火魔法が弱いといった具合だ）

ちなみに魔法の優劣は水↓火↓風↓地↓水

光と闇は優劣が存在せずクセの強い魔法や特徴的な魔法が多い。代表的な魔法に光は辺りを明るく照らすライト、闇は辺りを暗くするディップなどがある。

俺のフレイムソードなどスキルの属性もこれにならう。

※時計、標準時の説明終了※

「シンシア、お前ただでさえ時間にルーズなんだから早めに買っつけよ」

「へいへい」

「何よあんだ。待たせという謝罪のひとつも無いなんて失礼なヤツ

ね」

全く悪びれる様子がないシンシアにメイルがくっつかかる。  
シンシア自身もその指摘に異存は無いようで軽く頭を下げた。  
そして顔を上げ

「じゃあ行くぜ！久々のクエストだからな！」

この有り様だ。

メイルの不機嫌オーラが収まるわけも無く俺達はギスギスした空気  
の中森に向かった。

闇の刻に入って間もないだろう。夜風に吹かれ薄気味悪く葉が揺れる。  
る。

先頭はやる気満々のシンシア、次いで俺、メイル、スイと一列になり森の奥へと進む。

歩くたびに地面に落ちた枯れ木がパキッ、パキッと鳴るのも不気味感を助長していて正直帰りた。

「いやあ、なんか不気味だな」

「全く緊張感の無いヤツね。カイル、こんなのが先頭で良いわけ？  
心配なんだけど」

「お、おう。別に問題ないだろ。道はスイが分かるから迷う心配はないし」

若干声がうわずってるのが自分でも分かる。最後尾のスイがクスクス笑ってるのがいい証拠だ。

ガザッ

「!？」

びっくりして音が鳴った方を見やる。

茂みから見える暗闇の中に鈍く光る球体が2つ。

だが俺は安堵した。なぜなら

「…にゃ」

その球体の持ち主はとても小さく、俺が拾ってきたものだからだ。

カイルはカイを抱え上げ首をかしげた。

大方なぜここに居るのか? と思っっているに違いない。

正直私も不思議に思った。けどそれよりもムカつきの方が大きい。さっきからずっと思う。

（なんであの女ばかりひいきすんのよ！）

シンシアという名前、そして仕草などをみると口調は男っぽいが間違いない女だ。

確かにカイルの話だと昔パーティーを組んでいた仲間らしいし昔話にふけるのも分からないでもない。

でももっと許せないのは彼の私に対する態度だ。

私がなんで怒ってるか分かってない。

大体私がカイルを好きなのは周りから見ても私の態度で分かると言われた事もあるのになんで当の本人が全く気付いてないのかはなはだ疑問だ。

（むー）

カリカリしてもしようがないのは分かってる。

でも人は簡単に自分の心をコントロールできないもので、私は楽しそうに歩くシンシアを睨みながら足を動かした。

よくわからないがカイはいつの間にか私達の後をついてきていたらしく、カイルの肩に乗って目を光らせている。

「ん？なんかあっちの方に誰か居るみたいだぜ。静かに近づこう」

先頭を歩くシンシアが言うとおりでよく見るとかすかに人影が動いているのが分かる。普通この距離で分かる人なんて居ないんだけど、カイルはこれを見越してシンシアを先頭にしていたのだろうか？

私の中で少しだけシンシアの評価を上げて忍び足で人影に近寄る。

茂みにしゃがみこみ耳をすませると会話がわずかだが聞き取れた。

「おかしいわねえ。封印を解いたのになかなか見つからないわ」

女性の声だ。

年齢は20代半ばから後半かな？

周りには4、5人の部下らしき人がいる。

隣で息を潜めるカイルにこっそり見つからないように話しかける。

（封印を解いたって何のことかしら？ 森から聞こえる音と関係ありそうね）

（ああ、とりあえず話を聞いてみよう。ヒントがあるかもしれない）

「町の人のウワサだとかここにあると思うんですけどね」

「そうね。これじゃわざわざリージアから飛ばして来た意味がないわ。あと調べてないのはどの辺り？」

「えー……あとは奥の方ですね。闇の刻の間に全て済ませたいですし早く行きましょう」

そこで会話を終え謎の集団は森の奥へ消えていった。

少し間をとり警戒する。……どうやら行ったみたいね。

私達は茂みから出て木陰に隠れながら作戦会議を始めた。



「リージアの封印を解いたと言っておったな」

スイが木にもたれながら腕を組んで言った。

「もしかしたらあいづらが例のスパイなのかもな」

「カイルの言うとおりその可能性は高いわね」

「スパイって何の話？」

「そうか、シンシアは知らないんだったな。実はリージアの新しい王様が本来ならエスペリアに同盟の締結<sup>ていけつ</sup>に来るハズだったんだがエスペリアにスパイが紛れ込んだという話が出て中止になったんだ」  
「なるへそ、でアイツらがそのスパイじゃないか？って話か」

「そういうことじゃ。闇の刻の間に終わらせようと言っておったところをみるとあのリーダーらしき女は闇魔法の使い手のようじゃ。シンシアよ、闇の刻は光魔法の力が弱まる。気をつけるのじゃ」

「分かってるって。闇は弱点魔法が無いからな、俺の得意魔法で――」

「それは止めてくれ。命がいくつあっても足りない」

「えゝいいじゃんよゝ」

「ダメだお前の魔法は無差別すぎる」

「いや、でも相手が強かったら――」

「喧嘩してないで早く追いかけてましょ？」

メイルに俺とシンシアの足を踏みつけながら怒られた。

俺達は一時休戦してヤツらが消えていった方向の奥へと足を踏み入れている。

王宮の裏にある森は正式な名前は無いが通称『三段深林』と呼ばれている。

森は王宮から見て奥に行けば行くほど深くなり飛竜に乗って上からこの森を眺めた人が茂り方が三段になっているように見えるという事でこの名前を付けたのが始まりらしく、俺が新兵達を鍛えたりしていたのは一段目と呼ばれる場所である。

そして俺達は二段目にあたる場所に足を踏み入れた。

一段目は森の中からでも空がよく見えるが二段目に差し掛かるところどころ空が葉で覆われ暗くなっている場所がある。

とメイメルが言っていたが初めて二段目に来た上に闇の刻でどこも暗いので今ここが二段目のどの辺りなのかは分からない。

道が分からないのでスイが鼻を頼りにスパイ達を追っているのを信じてついていくだけしか出来ない俺達。

だが結論から言えばついていく必要なんてなかった。

なぜなら

「おっ？さっきからコソコソついてきていたウジ虫どもはっけ〜ん。ねえ君達はどうかやって死にたい？気が向いたら聞いてあげるぜ〜」

敵が待ち伏せていたからだ。

木の上でサルのような座り方で見下ろすソイツは右目が赤く輝いていた。



## 第六話 敵、そして

「なんだお前は」

剣に手をかけ警戒する。相手はひとつ笑って返す。

「シッシッ。それはこっちのセリフってやつだぜ？ 返答次第では死刑が惨殺刑になるぜ」

「何かうつとうしいヤツだな」

「アンタといい勝負ね」

「な、なんだと？」

「喧嘩しとる場合か！ さっさと構えるのじゃ！」

「お、おう」

スイの言葉に陣形を素早く組む。前は俺、スイ。真ん中にメイル、最後尾にシンシアが構える。

「あれあれ？ やる気満々って感じ？ じゃあ俺もやる気だしてくぜ。出しちゃうぜ」

敵（ウザモンキーと命名）が両手にナイフを素早く構え投げつける。すかさず俺が五月雨ではじき後ろからシンシアが水流弾アクアバレットを放つ。

「おっとっと」

ウザモンキーが乗っていた木の枝に当たりウザモンキーがよろめいて地面に落ちた。

ウザモンキーはすぐに態勢を整え、地面を蹴り上げて短刀でメイルを狙う。

メイルは剣でそれを受け、勢いに負け後ろに吹き飛んだが、スイが狼に化身しすかさず襲いかかる。

意表をついた攻撃はウザモンキーの肩をかすりウザモンキーが後ずさった。

「あつぶねー。まさか狼が居るとは思わなかったぜ。何者？てか肩いてえぜ！シッシッ」

「黙れウザモンキー。耳障りだ」

「ひどっ！何そのあだ名」

「あら、ぴったりじゃない。何が不満なワケ？」

「不満しかねえぜ！」

今度はナイフではなく長めの細い剣を両手に構え俺に飛びかかる。

左の細い剣で俺の五月雨を流し、その勢いのままウザモンキーの右の細い剣が下から跳ねるようにあがってきて頬から血が吹き出した。そこに吹き飛ばされた後、タイミングを計っていたのかメイルが横から上段突きを繰り出す。

これも虚を突いたが軽く流され敵には届かない。恐ろしく反応が速い。

「カイル大丈夫！？」

メイルの方がダメージはあるはずだが俺を心配する。

「ああ、軽く切れたただ。問題ない」

「シッシッ。多勢に無勢たあこのことだぜ。だけどもうやられねえぜ」

「減らず口をたたく前に後ろに気をつけるんじゃない」

後ろから忍び寄ったスイがとっさに身を引いた瞬間、スイが居た場所にはヤツが最初に投げた物と同じナイフが飛んできた。

「お？避けられたか。久しぶりにマトモなヤツと出会ったぜ！」

「これは糸にナイフを付けたものじゃな。いつの間にこんな物を？」

「減らず口を叩いてる間だぜ！」

右から左からナイフが大量に降り注ぐ。

烈風斬で弾き返したが俺から遠い何本かは防ぎきれずメイルやスイが必死に受ける。

「今のは危なかった。俺達と1人でこれだけ戦えるなんてお前Lvいくつなんだ？」

「シッシッシ！聞いて驚けなんとLv68だぜ！」

「んなつ…じゃあお前も転生者か！？」

「シッシッ。あんな能天気なヤツらとは違うぜ！そしてそんな大事なことホイホイしゃべるわけないぜ」

転生者じゃ無いのになぜ転生者について知っているのかとか言いたいことはいろいろあるが…

「…まあいいや。シンシア、そろそろ用意出来たか？」

「おう、いつでもおっけーだ」

「じゃ、やっちゃって」

戦闘にほとんど絡んでなかった（ディップを使って隠れていた）シンシアに合図を送り構えをとく。

それを見て何か危機感を感じたのか、ウザモンキーがとっさに森に隠れた。

「シッシッ。これでどこに居るか分かるまい！」

「ほい」

「ぐぼらっ！」

地属性魔法大地の槍。<sup>アーススピア</sup>発動までに時間がややかかるが地面を隆起させ敵を貫く魔法。貫通性能は全魔法中トップクラスだ。また発動までに時間がかかる分攻撃範囲と効果時間もかなりのものである。主に集団戦で使う魔法。

信じられないといった様子で自分の腹を貫くものを見るウザモンキィ。

「な、なぜ場所が分かった…？」

息も絶え絶えといったウザモンキィが聞く。

「声のする方に攻撃しただけだ」

シンシアの答えにがっくり来たのか、ウザモンキィががっくりとうなだれた。

「シ、シッシッ…こうなりやしょうがねえぜ。あれ使うぜ」

「まだ何かあるのか？みんな離れて攻撃に備えろ」

俺の指示通りに全員が距離をとる。

そしてウザモンキィの出方を見ると

「秘技！脱出！」

「え？あ！」

大地の槍<sup>アーススピア</sup>を無理やり碎き腹に風穴を空けたまま逃げてしまった。

「くそっ！逃げやがったか」

だがあれだけダメージがあったらすぐ死ぬだろう。俺達はそう思い無言で先に進んだ。

少し離れた場所にヤツの姿はあった。腹から血を流しながらもその跡で追いかけられないように力を振り絞ってここまで逃げてきた。  
だが

「シ…シ…シッシッ…マズい…このままだとチカらが抑エラれない  
…シッシッ…ン？」

ウザモンキーに近寄る人影。身長は190くらいあるだろうか、引き締まった体が大きく見せて居るのか。

その男はまるでゴミを拾いに来たような顔でウザモンキーに話しかけた。

「わざわざ残したのに失敗したか」

「グ…ゼノン…か。シッシッ…わざわざ笑イニきたノカ…？」

「…禁断覚醒と世界の反抗が始まる前に殺さねばならないんだが…」

「グ…？マ…マサカ？」

「…ちよつと眠ってもらっただけだ。……凍結」  
フリーズ

「ンナ！それだ…ケ…ハ」



ゼノンと呼ばれた男はウザモンキーを一瞬で氷漬けにし、地獄へ運んでいった。

「リーダー、殺してきました」

「あら、ご苦労様。まったく情けないったらありやしないわね」

「…ならほつといっても良かったのでは？ 暴れてくれればおいしいですし」

それでは自分の苦労が報われない。とゼノンは思ったがそれが冗談であることも分かっていた。

「ふふふ。それはそれでいい足止めになるかもしれないわね」

「…ところでリーダー、あそこに見えるのは我々の探している物では？」

「ホントね。早く行きましょ。闇の刻はまだあるわよね？」

「ええ、今四分の一が過ぎたくらいです。急ぎましょ」

2つの人影がいくつかの影を引き連れ森の最深部に足を踏み入れたその頃。

「こっちじゃ。急ぐぞい」

スイは早足で森を進んでいく。  
その表情はかなり険しい。

「お、おい。そんな急がなくても良いんじゃないか？ 戦闘で疲れてるんだし」

「ワシもそうしたいところじゃが急がないと大変な事になるやもしれぬ」

「大変な事？ アイツらが言ってた封印とかの事か？」

「それじゃ。それが問題なのじゃ」

「急がないと封印が解かれるって事は俺も分かってるが…」

「…ウザモンキーが最後に使った技。あれは闇の禁術魔法のひとつ、  
限界解放。<sup>マニユミット</sup>

身体能力を際限なく引き上げる代わりに自身の体を破滅へと導く魔法なのじゃ」

その言葉を受け俺達の間に張り詰めた空気が流れる。

しばらくは皆黙って歩いていたが、とうとうシンシアがしびれを切らした。

「な、なあ。体を破滅へと導くって具体的にどうなるんだ？」

「限界解放は今から100年程前、とある凶悪な魔導士によって作り出された魔法でな、使用にも段階があって1段階目で1週間ほど身動きが取れなくなり、2段階目で使用前と比べ格段に体の基礎体力が落ちる。3段階目に達すると確実に体に障害が生まれ、4段階目で自我を失い辺りを破壊し尽くす。  
自分の体が動かなくなるまでの。」

じゃがそれだけの代償と引き換えに2倍3倍と自身の力を引き出すのじゃ」

「じゃあアイツとその仲間は相当ヤバいってことか」

「うむ。禁術を平気で使うようなヤツらじゃ。ヤツらが解こうとし

ている封印がどんなに危険な物か自ずと知れるじやろう？何が何でもワシらで防ぐのじゃ」

「よし！そうと決まったら早く行こう！」

「ったくまた1人で突っ走りやがって！」

シンシアの言葉を受け俺達は走り出した。

三段深林もついに三段に突入した。そしてそれを裏付けるように俺達の目の前に何やら古めかしい神殿が現れた。

あれがヤツらの探していた物か、と大きなそれを見上げる。

見た目からも危険な香りがしてやがる。

俺の緊張が伝わったのか、カイが俺の肩の上で小さく震えた。

スイの話を聞く限り俺達では勝てないかもしれない。でもやるしかない。

決意を胸に神殿の中に入る。

中は全面石造りの広い広間につながっていて、その中心部に女神像をかたどった石像が置いてある。

そしてその中心部から少し離れた場所に人影がちらほら見える。

「あれは…森の中で見たボスらしき女か」

「ええ、そうみたいね。周りのヤツらもかなり強そうよ。正面から行っても返り討ちね」

「よし、じゃあこういう作戦はどうだ？」

シンシアが作戦を説明する。こういう時は頭の回転が早い。

「ふむ。他に手は無さそうじゃしそれでいこう」

俺達はひとつ頷きあって作戦を開始した。

## 第六話 敵、そして（後書き）

次は火曜日の12時頃予定

## 第七話 神殿内で（前書き）

10センチの超能力者 という小説を開始しました。  
こちらでもごひいきに：

<http://ncode.syosetu.com/n69555/>

## 第七話 神殿内で

「この石像の下から感じるわね。すごい力を」

彼女の言葉に促され石像の下を見る。まっ平らで普通の石のタイルにしか見えない。

「…何も無いですが？疑ってる訳では無いですがあちらの通路のどれかでは？」

自分にはこの下に何かあるようには見えない。リーダーの良いところは自分の聞こえ方によつてはリーダーを否定しているように取れる事でもちゃんと聞いてくれるところだ。だから自分の意見も臆せず言える。

リーダーはそれを聞いて怒るところかどや顔で説明を始めた。

「ふふっ、それはダメーよ。あの通路はトラップだらけで奥には高価そうな宝石類や武器があるわ。ホントに大事なものの、封印について気づかれないようにね」

リーダーは不思議だ。確認もしてないのになぜ分かるのか、という質問は全く無駄であるように聞こえてしまう。

そして実際にそれが当たっているのだ。そういう場面を自分は何度も見てきた。だから今回もそうなんだろうと納得できる。

「ではどうやって下に行きますか？」

「任せなさい。私が壊すわ」

普通の人が見たら無理せず自分に任せろと言うだろう。

「せーの、よいしょっ」

可愛いかけ声と共にとんでもない威力のパンチが地面にたたき込まれる。

土煙がかなり舞ったがしばらくして土煙が無くなるとリーダーが壊した場所にすっぽりと穴が空いていた。

「ね？あつたでしょう？」

「はい。自分が間違っていました。無礼、許していただきたい」

「やだ、頭なんて下げないでよ。私は怒ってないからさ。頭下げる前にすることもあるし」

「？することですか？」

「うん。ほらあそこ。モンキーちゃんを取りこぼしちゃった子達が付いて来たみたいなのね」

「なっ！もう追い付いて来たんですか！？」

「ええ。モンキーちゃんとの戦いで疲れてるはずなんだけどねえ：私達の目的も知ってるみたいだしちょっと痛い目みてもらいましょ」

「ヤツらがこっちに気付いたわ」

「シンシア、準備はまだか？」



「おう、今終わったぜ。じゃあみんなこの円に入ってくれ」

シンシアに言われるまでもなく俺達は円に入る。すると円から光が生まれ俺達を包み込んだ。

「よし、じゃあ行くか」

「すごいわね：こんなに能力が上がるなんて」

「まあ俺の秘技だからな！」

シンシアが使ったのは光の導き（ライトドライブ）というレベル制ではなくイベントで手に入る特殊魔法だ。

効果は『円内に居る全員のLvを平均し＋Lv20』というチート能力である。

ただし効果は半日、発動には円を書いたり使用者の最大MPの8割消費と余裕がないと出来ない魔法で使用後は全員丸一日眠り続けるデメリットがある。

「これ手に入れるのに夏休み丸々つぶしたもんな」

シンシアが携帯していたMPハイポーション（MP100回復、シンシアの最大MPは600くらい）を口に流し込みながら言う。

「ああ、懐かしいな」

俺がまだゲームとしてのこの世界に居た頃を思い出す。

師匠に振り回されたりシンシアに振り回されたり、大変だが楽しかった。

「よし！長々と話してる時間は無いしさっさとやるぞ」

「あいよ。じゃあ俺は大地の槍の準備するんでここに残る。もし敵

が来たら逃げるさしてもらうけど」

「薄情なヤツね。まあ私達で敵の処理くらい十分出来るけど。」

「じゃあ俺とスイとメールで特攻するか。カイはここで待ってな」  
「うゝゝゝ」

さ、行こう。

俺は敵に向かって飛び出した。

「あら、むこうから来たわ。てっきり通路の狭さを利用すると思ったんだけど」

「リーダーは先に行きますか？自分はここで食い止めますが」

「あら、仲間外れはやーよ。あなたも早く構えなさいな」

敵はもうそこまで迫っていた。  
言われた通り剣を抜き構える。  
負ける訳にはいかない。

「らあっ！」

普段より五月雨が軽く感じる。光の導き（ライトデイルライブ）の効果を実感しながら背の高い男に斬りかかったが苦もなく勢いを止められた。

ウザモンキーがあれだけ強かったんだ。驚く事はない。剣を引き今度は足払いを狙う。

敵の足が浮くのを確認した俺は剣の勢いを殺さず下から斬り上げた。

「くそっ、これでもかすり傷すらなしかよ」

「そんな口叩く暇などあるまい」

後ろから殺気を感じ剣を振るう。

ザコ敵が2人胸の辺りに大きな傷を負って倒れていった。

「おあいにく様、ザコは敵じゃ無いんでね」

「ふむ。では自分からも動くでしょう」

その言葉が終わると同時。

目の前に白く輝く剣が迫る。

すんでのところで回避した、ハズだった敵の剣は俺の右肩を食いちぎった。

「グルアアッ！」

スイの牙と彼女の拳がぶつかる。  
拳に当たったとは思えない金属音が鳴り響いて衝撃が生まれる。  
彼女はチラリとカイルとゼノンの居る方を一瞥し再び拳を突き出す。  
だがスイには遅すぎる。軽くかわし彼女に肉薄したスイは相手の体に傷をつけた。

「あら、ただの獣って訳じゃないのね。むこうは大丈夫そうだしもう少し楽しめそうな予感がするわ」

「ほざけ。ワシはお主と戯れる気は無い。さっさと片付けてやろう」  
再び牙と拳がぶつかる。

「だからそんなんじゃない私にダメージは…あれ？」

彼女の拳が小刻みに震えている。

だが彼女は怒ることも驚くこともしなかった。  
ただ久しぶりに骨のある敵に出会った喜びだけが彼女を満たす。

「これは…封印も大事だけどあなたとの戦いの方が楽しそうね。もつと…もつと私を楽しませて頂戴！」

「グルアアッ！」

「なによアイツら。カイルとスイが苦戦するなんて」

だが自分が助けに行ければ勝てるかもしれない。そう思いメイルはザコ相手に苦戦している自分に苛立つ。

敵は3人、戦った限りでは前衛が2人に後衛が1人。

「おら！」

「くっ」

ザコ1の攻撃をよけ反撃の剣を繰り出す。

「おっと」

ザコ2がそれをカバー。片方を潰さないとラチがあかない。

光の導き（ライトディライブ）でレベルは絶対に私の方が高い。だが相手の連携を崩す術がない。

なすすべ無しの状況に舌打ちした。

その瞬間。

「グアッ！」

地面から出た石の槍がザコ2の腹を貫通する。

「てやあっ！」

それによつてザコ1に生まれた隙を見逃さず相手の腕を切断する。  
残った1人も石の槍の餌食になり戦闘不能になった。

シンシアが大地の槍アーススピアを撃ってくれたのだ。

シンシアの方を見ると何やらジェスチャーで伝えようとしている。  
多分自分はMP切れだからカイル達の助太刀に入ってくれ  
ってことだろう。

2人の状況を確認するとスイは互角。

カイルは傷を負って劣勢だ。

メイルはスイに心の中で謝りながらカイルの元へ向かった。

右肩から鮮血が溢れる。心臓が早鐘のように動き鋭い痛みのせい  
か剣が重い。

「な、なぜ…」

「ふむ。なぜ避けたはずなのに当たったのか？その理由が知りたい  
みたいだな。だが教えん。種明かしするのは最後の時だ」

「くっ…！」

またくる。今度こそ避けようとカイルは剣を構える。

そこにメールが助けに入った。  
ゼノンの剣をはじきカイルを支える。

「大丈夫!？」

メールはそう言いつつカイルの肩にポーションをかける。  
普通は飲む物だが傷の痛みを和らげる力もあるのだ。

「気をつけろ!そいつの剣は普通じゃない!」

「忠告しようが我が剣は破れぬよ」

ガキンッ

「さつき遠くから見てたけどあんたの腕って伸びるのね」

ゼノンの眉がピクリと動く。

カイルはメールの言葉に驚きを隠せず目を見開いた。

「ふん。よく見破ったな。だが見破ったところで対策がなければどうという事はない」

「それはどうかしらね!」

再び打ち合う2人。

メールは手数ของ多さを利用してゼノンを封じ込めていたが突然、ゼノンの剣速が速くなる。

「ぐっ……」

「……隙有り」

ゼノンが腕を伸ばし突きを繰り出した。今度はカイルにもはつきり

それが見て取れたが、カイルにはメイルの口元がニヤリと曲がった気がした。

今度はメイルの動きが突如として速くなりゼノンのふところに迫る。

「あんたは腕伸ばすとガードが甘くなるのよ」

メイルがゼノンの右腕を一閃した。

ぼとりと気持ち悪い音を立て地面に落ちる右腕。

それは戦いの終わりを告げる音となった。

スイと激しく打ち合う彼女にもその音は届いた。側近がやられたにもかかわらず彼女はマイペースを崩さない。

「あゝ、ゼノンがやられちゃったか。相手の力をはかり違えたってことね」

彼女はスイと距離を取ると拳を下ろし諦めたような口調で

「いいわ。今日は諦めて帰らしてもらいましょう。ゼノンは回収して行くけどね」

と言った。



そして彼女の足元でトンッと音がした瞬間

フッと彼女の姿が消えた。

「じゃあサヨウナラ。また会うときはもっと強くなつていてね」

カイル達は驚愕した。今の一瞬で彼女はゼノンと彼の右腕を回収し出口に繋がる通路まで移動したのだ。

「ま、待て！せめて名乗っていけよ！」

この状況でかなり素っ頓狂な質問ではあるが、彼女は指を口にあて、少し考えた後それに答えた。

「この子はゼノン。私はエルナ。よろしく。ちなみにあんたらが戦ったモンキーちゃんはアルバート。もう死んじやったけどね」

そう言って彼女、エルナは通路に消えていった。

「なんだよあれ…全く見えなかった」

俺は肩の傷が開かないようにゆっくりとその場に座った。

スイとメールも側に座る。

「おい、シンシアはどうした？」

「え？ 確か通路に隠れて…あ！」

「座ってる場合じゃねえ！ 速く助けに——」

「待つんじゃ。ワシとメールで行くからカイルはここで待つとれ」

「で、でも…」

「その傷では足手まといじゃ」

その言葉にしぶしぶカイルが納得し、スイとメールは通路へ走っていった。

「あら、姿が見えないと思ったらこんなところにいたのね」

人生最大のピンチ到来なう。

ってやべえよ！ もうMP無いよ！？ ただの一般人だよ俺！

ガクガクしながら敵を見ている俺を見て敵が笑う。

「ふふっ。そんなビビらなくても攻撃する気は無いわ。……道を塞ぐなら別だけど」

「どうぞこちらですっ！」

俺は高速で道を空けた。シュババツって感じに。この状況で道を空けないやつがどうか？ いやいまい。

敵は言ったとおり道を空けると脇目も振らず歩いていった。

その後しばらくするとスイとメールがシンシアを連れて戻ってきた。エルナに脅されたのかシンシアはしばらく震えていたが、俺の傷の痛みが和らいだ頃にはいつも通りのテンションを取り戻し、地面の穴を見ながら切り出した。

「なあ：封印されてたものって何だろうな？」

「そう焦るな。休んだら俺も見に行くつもりだったんだから」

「気になるわよね。あんなヤツらが解きたがる封印。考えただけでゾッとするわ」

「ワシらには知る権利があるはずじゃ。これからこれを守っていくのはワシらなんじゃから」

「お！みんな乗り気だね。じゃあカイルも大丈夫そうだし行こうぜ」

「ああ。光の導き（ライトドライブ）の副作用が出る前にな」

「丸一日だっけ。あれを使ったのが闇の刻の中頃で今がもう水の刻に入った位ね」

「時間はまだあるが三段深林を歩いて戻らんといけぬからの」

こんな感じで満場一致という事で。

俺達は穴の中に飛び込んだ。

## 第七話 神殿内で（後書き）

次は日曜日予定。

個人的には自分は文章力に欠けるような気がしますのでここはこう  
した方がっていう所を指摘して頂ければ嬉しいです。

あと週刊ユニークが1000を超えました。こんなに沢山の人に読  
んで頂け恐縮です！

## 第八話 アルピナ・フォン・エスペリア

下に降りると俺達の戦闘のせいだろうか、砂ぼこりが舞っていて煙たい。

中は暗かったのでライトを使い周りを照らすと、どうやら迷路のような作りになっているらしく道が二手に分かれている。

シンシアがふざけて目が！目があああ！と叫んでいたが無視。構う体力は無い。

天井の高さは3メートルくらいだろうか？横幅も人4人が並べるくらいの広さがありとてもじゃないが地下通路の規模では無い。

「なんかヤバイ雰囲気たっぷりだな」

「ああ。これはいいよ大変な事になってきたな。とりあえず右行くか左行くかなんだけど…」

「にゃ！」

「お？お前の飼った猫は右だって言ってるぜ」

「にゃにゃ！」

「まあどっち行けばいいか分からないしカイの言うとおりでいいんじゃない？」

という訳で俺達は右へ進んだ。

進んでも進んでもモンスターが居る気配は無い。おそらくトラップがあるだろうと警戒していたがそれも無かった。

カイは俺の肩から降り率先して前を歩き分かれ道も迷わず突き進む。迷いの無いカイに心配になりつつも行き止まりに当たったわけでもないで黙ってついて行く。

足が重いし、シンシアのテンションがウザい。

「にしてもホント何もねえな。ホントに何か封印されてんのかな？

心配になってきたぜ」

「さあ。それは分らんが歩き始めてはや四半刻（1刻の4分の1。1時間くらい）じゃ。かなりの広さじゃな」

「戻るのも一苦勞ね。副作用が出る前に帰れるかしら…」

「いや、流石にそろそろ着くだろ…と思っていたな……あ、何か見えたぞ！」

近づいてみると台座に宝玉が埋め込まれ、隣に何やら書いてある。なになに…

この先へ進まんとする者

その魔の資質を持ちて力を示せ

「…なんかすげーデジャヴなんだが」

「懐かしいわ。スイの居た洞窟にもこんなのあったわね」

「今回は謎解きじゃなくて何かしろって事か」

メイルと頷きあう。シンシアはともかくスイも首を傾げているという事はあれを作ったのはスイでは無いのだろうか？

俺の疑問をよそに話は進む。

「魔の資質ということは魔力を流せばいいって事じゃな」

「でも俺達へロへロだぜ？そんな魔力ねえよ」

「まあ一回やってみてダメだったら…」

「ダメだったら？」

「歸ろう」

「……ここまで来て帰るのかよ。それは嫌だな」

「成功すればいいんじゃない。みんなで行くぞい」

俺達は手を台座に置き、息を合わせて魔力を注いだ。

「はあ……骨折り損すぎだぜ……」

「シンシア。黙って歩け。副作用出たら終わりなんだから」





昨晚、カイル達はどこかに出掛けていたみたいで帰って来るなり泥のように寝始めてしまった。

肩に大きな傷があったので手当てしようとしたら無視されてしまい少し悲しかった。(後で寝ている時に手当てしておいたから良いけどね。良いんだけどね！)

そういえば今日新兵達が帰って来たらどうするのかしら。起きたら何があったのか聞いておこう。

私は立ち上がりミルクをカップに注ぎつつ何があったのか考えた。思えば、昨晚は森の中がいつもより騒がしかったような…そんな気がする。

コンコン

城のメイドさんがドアをノックした。おそらくシャーリーだろう。

「はい、何ですか？」

「メイメル様、王がお呼びです」

ドア越しに返ってきた言葉に首をかしげる。

お父様がわざわざ私を呼ぶなんて珍しい。この間のレイモンドの話の続き？

でもあれは延期したって言ってたし…

「分かりました。すぐに参りますと伝えて下さい」

「はっ」

何にしてもお父様から聞けば分かること。

私は王の間に向かうための身支度を始めた。

「失礼します」

「おお、メイメル。よく来たな」

「よく来たって呼んだのはお父様でしょう？」

「ま、まあそうじゃな」

（王様大分焦ってるな）

（よほど失礼なことが書いてあると見た）

例のごとく親衛隊がひそひそしゃべっているが気にしても無駄だろう。

彼らもただ突っ立っているだけでヒマを持て余しているのだ。私は色々忙しい身なので同情しかねるが。

「ところで早く用件を説明して下さい。お互い忙しい身なんですから」

「実はな、しばらく音信不通じゃったアルから連絡があつたのじゃ」

「え！？アルお兄様から？何でそんな急に」

アルピナ・フォン・エスペリア

私の兄でありエスペリアの第一王子、才能豊かではあったが一般市民に恋をして、この間の滅亡危機以来音信不通だった。よく言えば一途、悪く言えば身勝手なお兄様。

今頃その女性とイチャイチャしているに違いない。

いつか私もカイルとあんなことやこんなことをっ…！

「メイメル！？テーブルがメキメキいっとるが大丈夫か！？」

「あっはい。すいません。つい」

ニコツと笑っておく。最近こっそりモンスターを狩りに行ってレベル上げをしているから力加減が…（実は毎日忙しいのはそのために仕事を早めに終わらせているためだったりする）

（おい、みたか？）

（ああ、ありゃ間違いなく）

（（姫の皮をかぶった悪魔だな））

…後で力加減を間違えて殺しちゃうかもしれない。間違えただけだったら許してもらえ…訳ないか。

親衛隊のおしゃべり2人を闇に葬るのは諦めて話を戻す。

「で、その内容は？」

「…『結婚するから金を送って欲しい』とだけ書かれておっ—」

「はああああ！？」

バキン！

（（テーブルが真っ二つ！？））

「ば、バカじゃないんですか！？何でそこまで面倒見なきゃならな

いんですか！兄様はニートですか！？」

（ニートってなんだ？）

（さ、さあ…。よく分からんがワガママってことだろ）

「お、落ち着くのだメイメルよ。ワシもタダでアルのお願いは聞かんつもりじゃ」

「は、はあ…じゃあどうするんですか？」

「とりあえず今アルピナがどんな生活を送っているのかを確認する。アルピナは才能豊かなヤツじゃし出来れば王宮で国の仕事をしながら暮らしてもらいたいんじゃない。今の生活によっては引き戻す事も不可能では無いと思うとる」

「ということは私が呼ばれたのって…」

「うむ。護衛を連れて見に行ってくれ。実の妹が行けば効果も大きいだろう」

にっこり笑うお父様。お父様…私は便利屋じゃ無いんだけど。

お父様もなかなか周りを振り回すタイプだし似た者親子と言うことだろうか。

頭の痛い話だ。私はアルお兄様のワガママに憤りを感じながら部屋を出た。

（で、テーブルはどうすんだ？）

（さ、さあ…）

「ロイド！リー！私についてきなさーい！」

私は中庭へ赴くと稽古をしていた2人に声をかけた。

いや怒鳴ったという方が正しいだろうか。まあどうでもいい。問題はそこではない。

ロイドはいきなりそんなことを言われ困惑しながら

「メイメル様。いきなりどうしたのですか？」

と言って稽古用の剣を納めた。少し息があがり白い息が出ている。

説明をしていない事に今更ながら気づいた私は一呼吸してざっくり説明。

「なるほど。アルピナ様がそんなことを…」

「メイメル様がなぜ怒っているのかよく分かりましたよ」

ロイドとリーが頷いて微妙な顔をする。2人がまともな人で良かった。

「スイはまだ寝てますし護衛となるとあなた達しかいないんです。引き受けてくれますか？」

「ええ、もちろん。ただ準備もあるので出発は昼過ぎまで待つて下さい。ところでアルピナ様が居るのはどの辺りなんですか？」

ロイドの質問に私は手紙の内容を思い返す。

「えーっと……ここから北に行った所にあるバルタの外れですね」

「バルタですか。ずいぶん静かな場所を選びましたね」

「小さい頃から周りが騒がしかったのもあるんじゃないですか？」

「かもしれないね。それでは2人ともお昼を済ませたら中庭に集合して下さい」

「はい。分かりました」

ロイドとリーが宿舎へと歩く。

自分の部屋に戻る私を冷たい風がひと撫でしていった。



バルタは大きな農場とこの森の中にある鉱山で有名な所だ。町の中はとても静かで人気が高く、そこに私の兄は居るらしい。兄が好きになった人はルインに住んでいたハズなんだが：見事に駆け落ちしたというわけだ。

私は袋に食料と着替え、腰にはレイピアをつけ準備万端といった具合だ。

「メイメル様、バルタに行くには着替えが多すぎませんか？」

カップに紅茶を注ぎながらシャーリーが尋ねる。紅茶の香りが心地いい。

彼女は蒼髪を短く切りそろえた背の高いモデル体型の美人さんだ。化粧も最低限しかしないので元々顔が整っているということだろう。作法も完璧だし。

「アルお兄様の事だし多分長く向こうに滞在しなければならぬかもしれないからね」

その言葉にシャーリーがそうですねと笑い、私の前にカップが置かれる。

「アルお兄様は我が道を行くタイプだから説得も大変でしょ？これでも少ないくらいよ」

「確かに小さい頃から頑固者で手を焼きましたね。一度クッキーの焼き加減に文句を言われた時は本当に困りました」

「ああ、あったあった。焼き方がなっていないと言って厨房行つてやけどしてきたやつね」

シャーリーと2人で笑いあう。小さい頃から面倒を見てくれた彼女は自分にとって母親のような存在だった。お母様は忙しかったり体調を崩したり大変だったから。

「それにしてもメイメル様は私と話す時だけは昔のように話してくれますね」

「うん。だって一番気楽に話せるんだもん。たまには息抜きしないと疲れるよ」

紅茶をすする。少し冷めてきて飲みやすい。  
シャーリーも椅子に座り紅茶を口に運んだ。

「それもそうですが、カイル様にもその話し方でいって見たらどうですか？」

「ぶっ！な、何でそうなるのよ？」

何とか紅茶は吹き出さなかったもののシャーリーはニヤニヤを隠せ

ないみたいだ。

「よそよそしい話し方より親しみのある話し方の方が仲が深まりやすい。当たり前のことでしょう？」

「うっ…それもそうね」

「ええ。カイル様は見た目も中身も素晴らしい人です。もたもたしてると違う人に取りられちゃいますよ？」

「そんな事言ってるシャーリーはどうなのよ？めばしい人は居るの？」

「いいえ。居ませんよ。仕事柄男性と会う機会は少ないですから」

当たり前といった感じで平静を装っているがやけににやけてるような…。

そういえばこの間

『シャーリー、今日は少し遅めに夕食をとるわ』

『はい。では光の刻の始めくらいでよろしいでしょうか？』

『うん。それでいいよ』

『メイメル様今日は何か用事が？』

『ああ。ロイドと軍の現状とか編成の会議があるのよ。ロイドは疲れてるって言ってたしみんな忙しいみたいね』

『…そうですか。ではこちらをお持ち下さい。疲労回復に効果のある紅茶の葉です』

『それはいいわね。ありがたく貰っておくわ』

『いえいえ』

『何笑ってるの？』

『特に何も。では私はこれで失礼します。ロイド様にもよろしく言うっておいて下さい』



なる程

「あ、ロイドー」

（ビクッ!）

特定しました。

「なんだ、シャーリーってダンディーな感じが好みなのね」

「な、何のことですか？そ、それよりもう時間ですし中庭に…」

「あー」

時計は丁度風の刻の四半刻をさしている。ロイドとリーももう中庭に居るかもしれない。

シャーリーをもっといじりたかったが仕方ない、紅茶のお礼を言つて立ち上がり最後の荷物チェック。うん、問題なし。

「じゃあ行ってくるね」

「はい。行つてらっしゃいませ。帰つて来た頃には新しいお茶が入つてると思いますので」

…それは楽しみね。

中庭にて

「ロイド、リー。待たせてしまいましたか？」

「いえ。我々はメイメル様を待たせる訳にはいかないので」

「そうですか。そういえばロイド。この仕事から帰って来たらシャリーが新しい紅茶を振る舞ってくれるらしいですよ」

「本当ですか。この間彼女に貰った紅茶はとてもおいしかったので楽しみです。その時は私も一緒に貰ってもよいですか？」

「ええ。もちろん」

それが狙いだからね

第八話 アルピナ・フォン・エスペリア（後書き）

次は水曜日…かな

## 第九話 出発

中庭に集まった私、ロイド、リーの三人はまず馬小屋へと向かった。馬小屋は中庭の中でも一番門から遠い位置にあるのでしばらく落ち葉の踏まれる音が場を満たす。

「そういえばスイ様とカイル様は居ないんですか？ 私達が護衛ということは何か他に重大な任務を？」

リーは二人分（私の分も持ってくれている）の荷物を担ぎ後ろから質問してきた。

「それはですね、二人とも寝てるんです」

「寝てる？もしかして何か重い病でも？」

心配するリーに首を振って答える。

「いえ。今朝とても疲れた様子で帰って来たんですけど、カイルは肩口に大きな傷を負って、しかも手当てもせずに」

「寝てしまった、と。カイル様がそんな傷をもらうとは信じがたいですね」

「そうですね。起きたら詳しい事を聞いてみようと思います」

そう言って視線を空に向ける。

冷たい風が落ち葉を拾い上げカサカサと音を立てた。東の空を覆う雲は夕方くらいにはこの辺りに雨を振らせるだろうと思った。

馬小屋にはおよそ300に及ぶ馬が飼育されている。だがマドラには1000頭もの馬がいると聞くしリージャには飛竜が居る。これでも数は少ない方だろう。

私は事前に話を通しておいた世話係のおばさんが案内に従い奥へ進む。

一番奥に案内された私はツヤのある毛を持った一頭の馬を見つけ、背中を撫でながら話しかけた。

「ビューネ、元気してた？」

よしよしと私に撫でられ目を細めたのは私の愛馬、ビューネだ。高い知能と長寿が特徴でペットに出来るモンスターの一種。ブラックホースだ。

その他にもシルバーホースやブラックホースなどが居るがそれらの中で一番スタミナがありビューネは2日間走りつづける事ができる。ちなみにブラックホースは戦闘力、シルバーホースは速度が売りだ。メイメルをパートナーと認めるビューネは私の手をなめた。

小さい頃から私はビューネに乗って裏の森に遊びに行ったりしていたのもう10年の付き合いになるがその脚力は衰えを知らない。私はビューネに今回のいきさつを説明。もちろん乗せていってくれと言ってくれ、ビューネを小屋の外に出す。

ロイドとリーが連れてきたのは部隊用の一般的な軍馬だ。私はビュ

ーネにあまり飛ばしすぎて置いてけぼりにしないよう念を押す。ビューネは不満そうに地面を蹴ったが彼女も大人の一級馬。大丈夫そうだ。

「では行きましょう。ビューネ、いいよ」

ロイドとリーが乗ったのを確認した私は合図を送りビューネが走り出す。以下2頭の軍馬もそれに続いた。

風を切り城下町の喧騒の中を走り抜けるのは久しぶりだ。（事前に話がいつていたようで道を空けてくれていた）ビューネも久々に私と一緒に出かけるせいか楽しそうに足取り軽やか駆け抜ける。

私はその風の向こうに昔の懐かしい光景を思い出しながらバルタへ向かった。

兄はどんな生活をしているんだろうか？

そんな事を思いながら走るメイメルに世界を動かす一歩が待ちかまえていることを本人は知らない。

一方その頃、バルタの町外れでは仲むつまじい男女が薪割りに精を出していた。男女と言っても薪を割るのは男の方だけ、女の方はそれを切り株に座り眺めているだけだ。

言わずもがな。メイメルに迷惑をかけることとなった、アルピナ・

フォン・エスペリアとそのフィアンセ、ニニアンである。

ニニアンは何が楽しいのか。薪が割れる音を聞いて嬉しそうな顔を浮かべ、それに気を良くしたアルピナの動きが良くなる。いわゆるバカカップルである。

「お疲れ、様」

「おう、サンキュー」

一通り薪割りを終えたアルピナはニニアンに手渡されたタオルで顔をふき、ニニアンの隣に腰を下ろす。

「手紙、届いた？」

「もう届いてると思うけどまだ帰ってこないね」

「お金、無いなら…」

「心配するなって。絶対盛大な式をあげるからさ」

「…うん、楽しい」

生活面を心配するニニアンも気が弱いからか、はたまた結婚式を楽しむにしているのか。すぐに引き下がった。

その時、王都ルインのある方角から一羽の鳥が飛んできた。

いや、鳥と言うにはでかすぎるだろう。縦には成人男性の腰辺りほど、横には小太りな人と同じくらいの体を持つそれはこの世界ではベルイーグルと呼ばれ、ベルイーグルが訪れた人は結婚出来るという神話を持つ。自分で食べ物をまかなえる他、郵便配達や道案内も出来るため最近では結婚するカップルが飼い始めるケースが多い。確かに持ち主は結婚しているが神話とは全く逆である。

ベルイーグルはニニアンとアルピナの前に降り、口にくわえていた手紙をアルピナの膝に置いた。

「おかえり、ライズ。その手紙は俺にかな？」

（コクコク）

「じゃあ早速。なになに………ほうほう」

「何、書いてあった？」

「読んでみ」

アルピナがニニアンに手紙を渡す。ニニアンは手紙を広げ目を通して始めた。



拝啓 アルピナへ

この度はとんでもないお願いをされ、非常に動揺した。されどワシも一国の王であり一人の父親なり。

お主らのお願いを聞くかどうかはメールアドレスの報告をもって決めようと思う。後日メールアドレスが護衛数人を連れそちらに参る手筈になっておるゆえ、失礼無きようよろしく頼む。

ただし、王宮に戻るならば無条件で盛大な祝いをしよう。

エスペリア第42代目国王 カージナ・フォン・エスペリア宛



「どうしよう。私、礼儀作法、知らない」

手紙を読み終えたニニアンは心配そうにアルピナを見た。

そういうオドオドしたところもアルピナは好ましく思っているので（ニニアンは家事等諸スキルに関しては万能であるが）彼はニニアンを抱き寄せメールアドレスは作法を気にしないタイプだから大丈夫だと



ニニアンを励ます。

「にしてもメイメルが直接来るとは思わなかったなあ」

「どんな、人？」

「どんな？…うーん、自分の意思をしっかり表に出すヤツだな。家事も出来るし自慢の妹さ。ニニアンもきつと仲良くなれるよ」

「…家事出来るって、私よりも？」

「？俺はお前の手料理が一番だよ」

ニニアンはそのメイメルという見たこともない妹に対抗心を燃やしたようだ。唯一勝負出来そうな家事で自分の方が上という満足な答えを得たニニアンは内心ほっとした。

アルピナはなぜそんな事を聞かれたのか分かっていないがニニアンに合わせて笑っておくことにした。

森から鳥の群れが飛び立って森に音が生まれる。いつもこの時間に聞く音だ。

「…そろそろ風の刻が終わるな。メイメルはまだ来ないし家に戻ってニニアンのクッキーが食べたくなったよ」

「ん。わかった」

ニニアンは任せろと言わんばかりにひとつ頷く。アルピナは斧を拾い上げ、左手にニニアンの手を包みながら家へ戻った。

家の前にて

「あ、しまった。ちょっと忘れ物しちゃったみたいだ。悪いけど先帰ってくれるか？」

「忘れ物なら、ついてく」

「いや、先帰ってクッキー焼いてくれると嬉しいんだけど」

「…なら先帰る。すぐ帰ってきて」

「わかったわかった」

そう言ってニニアンと家の前で別れたアルピナは薪割り場へＵター  
ンした。

アルピナは森の中を進む。薪割り場とは違う方向へ。

しばらく歩くとアルピナは木にもたれる男を見つけ、足を止めた。  
その男はピエロのような仮面、白い手袋をつけフードを着ている。

「相変わらず仲がよろしいですね。羨ましい限りですよ」

一国の王子に対する態度とは思えない口振りにもアルピナは気にも  
とめない。

「ならお前も探せば良いだろう。そんなふざけた格好を止めて。大  
体覗き見は止めろと言っただろう」

「いやいや。私の顔は人を恐れさせますからね。それにモテないん  
で羨ましいんですよ」

その男はやれやれといった感じで肩をすくめる。アルピナも仮面の下を見たことはない。

内心ふざけた格好だけが理由じゃ無いと思ったが、この男のどこまでが本気なのか分からない言動に付き合っていては時間がかかる。そうなるにニニアンに訝しがられるだろう。

「で、現状は？」

「はい。残念ながらリージアの封印は解かれました。エスペリアの封印はまだ無事なようですよ」

「エスペリアは無事？　どういう事だ。奴らはエスペリアに侵入していたんじゃないのか」

「どうやらメイメル王女の仲間が数人で食い止めたようです。妹さんは仲間に恵まれたようですね」

「ほう。奴らに対抗出来る者がエスペリアに居るとはな。正直エスペリアは捨てて勝負はシドムだと考えていたが思わぬ朗報だな」

「あなたが居れば奴らの2人や3人どうってことは無いでしょうに、ガリレオ殿」

「……その名前はもう捨てた。今はアルピナだ」

「ええ、そうでしたね。ではこれからどうします？」

「メイメルがもうじきここに来る。俺はあいつに動いて貰うように働きかける」

「まさか全てを話すんで？」

「いや。それとなく誘導するさ。それにたとえ話さなくてもいずれ知ることになるだろう？　そろそろクッキーが焼ける頃だしこの辺で失礼するぞ」

「確かにいずれ知られる事ですが……。ああ、補足ですがメイメル王女の仲間の名前はカイル、スイ、シンシア、メールの四名ですね」

ニニアンの元へ戻ろうとするアルピナは一瞬足を止めたが、また何事もなく歩き始めた。

アルピナの姿が見えなくなったのを確認した男も森の奥に消えていき。鳥のさえずりだけが残された。

「おかえり」

「ただいま。クッキー焼けた？」

「うん。今日は奮発、した」

「お、チョコクッキーじゃないか。どうしたんだこれ？」

「安かった」

「へえ。いくらくらいだったんだ？」

「100グラム銅貨3枚、だった」

※この世界ではチョコはあまり作られておらず100グラム銅貨3枚は通常の半額くらいである※

アルピナはもう一度へえと声を上げひとつつまむ。

口の中をチョコの甘い味とサクサクのクッキーの歯ごたえが包んだ。焼きたてでまだアツアツだ。

片付けを終えたニニアンも木の実ジュースを2つ持って隣に座る。

えへへと笑うニニアンにアルピナも頬を緩めた。

「そういえば」

「ん？何？」

「忘れ物って、何だったの？」

「ああ……近くにいい感じに成った木の実を取りに行くのを忘れたんだよ。ほらこれ」

腰に付けてあった袋からブドウ色の木の実を取り出す。

「ジュースに出来そう」

「うん、俺もそう思って取ってきたんだ。後で一緒に飲もう」  
「楽しみにしとく」

すんなり納得してくれて内心ほっとする。ニニアンを巻き込むわけにはいかないから、騙してでも隠していこうとアルピナは思っている。

「大丈夫？ 難しい顔してる、けど」

「え？ うん大丈夫だよ」

「じゃあ、はい」

クッキーをひとつ手に取りアルピナの口元に近づける。

励まそうという気持ちは何よりも嬉しく、アルピナは口をあけた。

第九話 出発（後書き）

次は土曜日

## 第十話 銀色、再び

王都ルインからバルタへ続く道の途中にはターメルという町がある。バルタよりもさらに小さな町であるが王都へ続く道の間にあるため冒険者や商人の多くが宿泊していく。

そのため町には多くの宿が店を構えて経済的にはかなり裕福な町のひとつになりえている。

しかし私達がターメルに着いたのは風の刻が終わるかという時間帯だったため、その宿に泊まる事は出来なかった。

仕方なくターメルの町の外側を通って先に向かう事にしたんだけど……。

「「グルル…」」

「「ギギッ」」

見事にモンスターと鉢合わせる事となってしまった。

「どうします?」

「どうするもこうするもやるしかないでしょ」

「ですね。ビューネ、闘える?」

「フルルッ」

（あ、そんな鳴き声なんすね…）

相手はコボルグ2体にゴブリン2体。

おおよそ私達の敵にはなりえない組み合わせだろう。

前衛にロイド、リー後衛に私、ビューネが位置どり、戦いが始まった。

まず勢い良く接近してきたコボルグAにロイド、Bにリーがそれぞれ対応。

ゴブリンは後ろから木の弓で援護射撃を試みるも私の風壁に弾かれる。ウインドウォール

ゴブリンがやつきになって矢を放つ所にビューネが接近。勢いある踏みつけ攻撃でゴブリン2体が銅貨2枚を出し消滅した。

※この世界では食べられるモンスター以外の死体は消滅する。このためモンスターの毒に当たる心配は無い。ただしペットの場合は食べられる如何に問わず死体が残る※

ロイドとリーの剣とコボルグの爪が激しい音をたてぶつかる。

私は遠くから火玉をコボルグの頭に放つ。ファイアボールとっさによけられはしたがロイドとリーの剣が首を切断し戦闘はあっさりと終了した。

「珍しい事もあるもんですね」



ロイドが剣に付いた血を拭き取りながらつぶやく。

私は何が珍しいのか分からずロイドに何かおかしいのか聞いてみた。

「コボルグとゴブリンが協力して襲ってくる。おかしいと思いませんか？」

彼はコボルグの死体に目をやりそう答え、そういえばそうだと私も死体とゴブリンがいた場所を見た。

「どういう事なんでしょうか？何かが起こっている？」

「いや、珍しいだけでこういう事もありえない訳ではありません。

私も初めてで驚きましたが勉強になりましたし、気を取り直して先へ行きましょう」

リーが軽い足取りで馬にまたがる。

その時私はまだ2人の言うとおりに珍しいな、という程度にしか考えていなかった。

バルタとターメルの間は普通の馬で2刻ほど。軍馬、並びにビューネは普通の2倍は早いのでうまく行けば地の刻の終わり位にはバルタへ到達出来る見通しだ。

私達が出発した頃にはまだ遠くにあった雲が私達に雨を降らせ始め

た。

私はビューネに足元への注意を促しながら長年人々が通り整備された道を進む。

空を見るとこのまま時間が経てば大雨になるだろうと見て取れるだけに足並みが早くなる。今は地の刻も残り四半刻。あと少しだ。

いや、だったと言わねえか。

足を止めた私達の前に盗賊団が現れたからだ。

「よう。お前ら結構良い馬乗ってんじゃないか」

盗賊は7、8人。数の利を良しとした盗賊達は偉そうな態度でこっちに近づいてくる。

私達は馬を下り軍馬2体は後ろに、ビューネは私の横に位置どる。

「あいにくだが、そこをどいて貰えないだろうか？ 雨に振られて困ってるんだ」

ロイドが優しい物腰で盗賊の頭らしき男に話しかける。もちろんそんな話し合いで引くくらいなら最初からつかからないだろう。向こうの返事はやはりNOだった。

「見りゃそっちの女、貴族じゃねえか？ こんな上玉ほいほい見逃してりゃ商売上がったやないんだよ！」

盗賊達が一斉に襲いかかる。私はすかさず風壁を張りビューネは氷柱を放った。  
ウインドウォール  
アイス  
シンガン

そして誰も動かなくなった…。

「……………」  
「……………」  
「……………」

「「弱っ!?!」」

余りの弱さに全員で叫ぶ。これは無い!盛り上がりも無さ過ぎるよ!

「ぐ…っええ…ガクッ」

口でガクッと言っちゃった!とことんザコキャラだ!

何のために出てきたのかは知らないけど先に行こう。雨も強いからね。

私達が再び馬に乗り走りだそうとした

その時

「なるほど。ただ守られる存在という訳ではなかったか」

私達の後ろ、たった10メートルの場所に1人の男が立っていた。ラフな格好に腰に巻くのは長く大きな剣。白色というよりは銀色という言葉が似合う短い髪。そして右目が赤く、焼けるように輝いている。

私達では適わない、逃げようとも私を乗せたビューネでは追いつかれる。彼を一目見た瞬間から体が言うことを聞かない。

そんな私達の気持ちを知ってか知らずか、銀髪の男はこちらにゆっくりと語りかける。

「どうも、はじめましてメイメル王女。私の名前はゼノン、とある

方からあなたを殺すよう命令され、参りました。あなたのような美しい方を手にかけるのは非常に残念ですよ」

「な、なぜ私がここに居ると分かったのですか」

こわばった口を必死に動かして答える。

彼、ゼノンはなお落ち着いた口調で続ける。

「なぜあなたがここに居ると分かったのか。残念なことにその質問には答えられません。ただ、強いて言うならば世界が私を導いた、ということでしょうか」

そして静かに剣を抜き、一步。また一步近づいてくる。

「メイメル様！逃げてください！」

ロイドの叫び声で私は我に帰った。無我夢中でビューネにまたがって走り出す。

だがゼノンは文字通り桁違いだった。

ロイドとリーを無視して私に襲いかかろうとしたゼノン。

彼の剣が斬ったのはロイドの左腕だった。

「ロイド！」

「ぐ…」

「ほう。とっさに庇おうと身を呈するとは、忠誠心のある男だな」

「らああああ！」

ガキッ

「人が話している時に襲いかかるクズもいたか」

ザクッ

「グハッ……」

遠目に胸を貫かれ地面に崩れ落ちるリーが視界に写る。

私は泣き出しそうな気持ちをこらえながらビューネを走らせる。

「では、忠誠深き騎士よ。主君を守れぬ自己のふがいなさ、悔やみながら……死ね」

「……っ」

もはやシルエットでしか分からない程の距離でもゼノンがその大きな剣をゆっくり構えるのが分かる。

そして

私の耳に響いたのは金属のぶつかる音だった。

「うちの妹をあまりいじめないでくれ。久々に会うのを楽しみにしてたんだ」

「ア、アルピナ……様」

意識が朦朧とするロイドは目の前で起きている事が信じられなかった。  
ゼノンは驚きというより予想通りといった顔を浮かべ、一步後退する。

「ふん。まさかき…が……はな。 ……」

もはや何を言っているのかも聞き取れない。

左腕を失い、血と雨に濡れたロイドはそこで意識を失った。

目が覚めるとそこは素朴で小さな木の家だった。窓の外ではまだ雨が降っている。

自分は助かったのか。

「っ……」

体の左側が痛む。顔を傾けると左腕の切断面に包帯が巻かれていた。さっき痛んだのはこの傷のせいだ。

物音を聞きつけたのか、扉が開き今回の目的でもあったアルピナ様

が入ってきた。服は一般的でラフな格好だが髪の毛がまだ湿っている。そう長い間眠っていた訳ではないようだ。

「やあ、気分はどうか？ 一応止血は済ませたからあまり激しい運動は控えてくれ」

「あ、ありがとうございます」

守るべき人に守られた俺は兵士として落第だろう。助かったのに複雑な気分だ。

「あの：メイメル様とリーは怎么样了？」

俺の質問にアルピナ様は顔を暗くした。

「メイメルは傷一つ無い。今はリビングでニアンと一緒に居る。

リー：といったかな。彼は心臓を貫かれて：」

「……そうですか。それはリーも本望でしょう。あの銀髪の男：ゼノンはどうしたんですか？」

「なんとか退けたよ」

さらっと言つてのけるアルピナ様に苦笑する。小さい頃から才能豊かな人だったがここまで強くなっているとは思わなかった。

「さ、ニアンの作ったお粥を持ってきた。食べるといい」

「はい。何から何までありがとうございます」

「いやいや。メイメルをしっかり連れてきてくれたお礼だと思ってくれ。俺はメイメルに詳しい話をしなきゃいけないから失礼するよ」

最後にお大事にという言葉を残し部屋を後にする。  
お粥は塩味でとてもおいしかった。



メイメルがアルピナ宅へ到着する少し前

「ア、アルお兄様！」

私は精一杯叫んだ。私の声が届いたかどうかは分からない。遠くから響く金属音だけが返事を返す中、私はバルタの町へ入った。

市民の人々が雨の中何事かと入り口に集まって来ていた。

人々は私に何が起きてるのかを聞いてきたが私は敵に狙われ、逃げてきた。今戦ってるのは私の知り合いと私を狙う敵だと言えなかった。

「まさか！あそこで戦っているのはアルピナ王子では！？」

人々の中からそんな声が挙がる。

「という事はあなたがメイメル様ですか！」

「え？ええ。そうです」

「そういうことならアルピナ王子から話は伺っております。この先にあるヒナドリという宿でニニアン様がお待ちですのでどうぞこちら



らへ」

ニニアン？確かお兄様の伴侶の名前だったわね。  
なぜここまでお兄様が予測していたのかは分からないが時は一刻を  
争う。

私は青年の後をついていき、ヒナドリへ向かった。

「ここです。すぐにニニアン様をお呼びしまー」

「その必要は、ない」

ヒナドリへ着くとすぐにフードを被った女性が中から現れた。

背は普通の女性の平均くらい、フードをかぶり顔はよく見えないが  
はみ出ている髪の色は緑。クトラ族の証だ。

口調はおっとりとした話し方。お兄様はうるさい人は苦手そうだし  
タイプど真ん中だったんだろう。

「あなたがニニアンさん、ですか？」

「うん、そう。馬を連れてくる」

宿の隣にある小屋へ歩いていき、すぐに馬を連れて戻ってきた。慣  
れた動作で馬にまたがり、青年に一言礼を言う。

「付いて来て。私達の家以案内、する」

「お兄様とニニアンさんの？そんなのすぐに見つかってしまうんじ  
ゃ…」

私の心配をよそにニニアンの馬が走り出す。私もビューネに合図を  
送り後を追う。

森の中、道無き道を迷いなく走るニニアン。しばらく走るとその足  
が突然止まった。

「着いた」

「え？着いたって」

立ち止まった場所は一面木しか見えない。一体どこに家があるというのか。

「違う。着いたのは決着。アルが勝った」

「え！？ホントですか？」

なぜそんな事が分かるのだろう。

詳しく話を聞こうとしたが、ニニアンは家に早く向かおうと言ってまた走り出す。

仕方ない。私もずぶ濡れでこのままだと風邪を引くのは避けられなくなる。

元はといえば今回はお兄様の生活を観察するのが目的だったのだ。それがどうしてこうなったのか。私はカイルかスイを連れてくるべきだったと後悔しながら後についていった。

「着いた」

ニニアンと私が走った距離は恐らく町の郊外と呼べる範囲を逸脱しているだろう。そこまでして静けさを求めていたのか、と内心お兄様に同情する。

家は普通の木造二階建て。特に変わった様子は無い。家には。家のすぐ隣に大木があり、その大きな枝が家をすっぽりと覆ってし

まっている。

しかも大木は一本だけではない。さらに言えば『普通の木がない』。ここまで大木の並ぶ場所を見たことがなく私は言葉を失う。

「入って。タオル、貸すから」

「あ、はい」

ニニアンに促され私は家の中にお邪魔した。

入る間際、木々の隙間から見えた空はしばらく雨を降り続かせるだろうと思った。

## 第十一話 禁断魔法

タオルで体を拭き服を着替えた私はリビングに案内された。

リビングにはテーブルが1つ、イスが4つ置いてありテーブルの上にはクッキーとコップが2つ残っている。

テーブルから少し離れた場所には暖炉があり、隣に水おけがあるところを見ると発火対策はされているようだ。

暖炉は絶賛活動中で雨の中冷え切った体にありがたい。

暖炉の前には先客がいた。

小さく丸まって寝ているのは恐らくベルイーグルだろう。起こさないよう静かに暖炉の横に座る。

パチパチと音を立てる暖炉を見ているとまぶたが重くなってきた。

隣でベルイーグルが気持ち良さそうに寝ているのも原因に違いない。

「眠たい？」

「え？ あ…はい、少し」

「なら、寝てていい」

ニアンはわざわざかけ布団を持ってきてくれたみたいだ。

それ自体はありがたいんだけど…

「すいません。アルお兄様やロイド、リーが私のために頑張ってるので、頑張って起きてます」

「そう。なら眠くならないように、話相手になる」

そう言ってニアンが私の隣に座る。次いで私に質問した。

「なんで、自分で来た？ 兵士に任せれば良かった」

「それはたまたまウチの主力がついてこれなくて、私が行けばお兄様も快く迎え入れてくれるだろうと」

「それだけで危険を冒した？ 危ない事はダメ。あなたの代わりは居ない、から」

「ええ。そうですね：確かにそうかもしれませんが。でも私だって自分の意志で動きたい事もあるんです」

「そういうもの？」

「はい。ニニアンさんだってお兄様についていきたい、って思うでしょう？ 私も自分で行きたいって思ったんです」

「なるほど」

「そういえばニニアンさんとお兄様の出会いはどのようなものだったんですか？」

「ニニアンでいい。私がアルと初めて会ったのは草原。私はまだ部族にいた」

「草原の部族と言うと、やはりニニアンさ：ニニアンはクトラ族出身なんですか？」

「うん、そう。アルはあの頃から強かった。手も足も出なかった」

私はその言葉に驚いた。

お兄様と戦うとは：ニニアンは見た目以上に強いらしい。

とてもじゃないが怒ったお兄様は見たくない私にはできそうにない。

「じゃあニニアンはお兄様に負けて恋したんですか？」

「うん。負けたのは初めてだった」

「……ニニアンってレベルはどれくらいなんです？」

「48」

「……」

私の周りは化け物ばかりなようだ。

しばらくするとアルお兄様がロイドを担いで帰ってきた。  
リーが居なかったのは……そういう事なんだろう。  
ロイドをニニアンと共に介抱して戻ってきたアルお兄様もすぐ着替え暖炉の前に座った。

「おー寒い寒い」

両手を前に出し火に当たるお兄様が老人のような言葉を口にする。

「お兄様、敵はどうなったのですか？リーは……やはり」

「ああ、敵はなんとか退けたよ。彼は残念だが……」

「私達が遅かった」

「いえ、そんな事は……」

2人が謝るのを私は制して話を切り替える。

「ところであの敵は一体誰なんでしょう？命令されてきたと言っていましたか」

「さあ。俺も会うのは初めてだったから分からないな。ただ者では無かったが……」

「でもアルの方が強い」

「あ、そうだ。良かったらお粥作ってくれないか？動き過ぎて小腹

がすいた」

少し自慢気に笑うニニアンにお兄様が思い出したように言う。なぜそんな事をいきなり言い出すのかは分からないが、ニニアンは二つ返事で台所へ向かい、私とお兄様の2人（とベルイーグル1匹）だけになった。

「メイメル。今から話すことはニニアンに絶対言わないでくれ」  
「お兄様？ どうしたんですか急に改まって」

ニニアンに聞かれたくない話とは：よほど大事な話らしい。

「実はヤツらはこの世界を滅ぼそうと目論む組織なんだ」

「な、なんですって！」

「わっ！ バカ！」

ヒョコッ

「メイメル、何かあった？」

「い、いえ何も。あはは」

「？、ならいい」

スタスタスタ

「ニニアンに気づかれないように話せよバカ！」

「いきなりそんな話をされたら誰だって驚きます！」

「アルとメイメル、やっぱり何かある？」

「「何でもないぞ！（ありませんよ！）」」

「む：やっぱりおかしい」

そう言いつつも台所へ戻るニニアンにほっとする。  
とりあえず

「落ち着いて話しましょう」

「最初からそう言ってるつもりなんだかな……。まあいい。ヤツらの名前は『フリード』。禁断魔法に手を出し世界を壊すために集まったヤツらだ。メイメル、禁断魔法については？」

「使用者にリスクを負わせる強力な魔法のことですよ？」

「そうか。やはり一般的な知識しか持っていないか」

「一般的？ 本当は違うんですか？」

「ああ。『生命を変革する魔法』、それが禁断魔法なんだ」

「それはいったいどういう……」

その時、2階からガタツという物音が聞こえた。ロイドが起きたのかもしれない。

「ちっ、起きたか。少し様子を見てくる、お前はここで待っていてくれ」

「えっ？ 話の続きは……」

「また後でな。人に聞かれたらマズい話だから」

アルお兄様はリビングを出て台所へ向かってしまった。

いつの間にやら起き出したベルイーグル（未だに名前聞いてないな）がひとつ背伸びした。



その後アルお兄様はすぐに戻ってきたがニニアンも居たのでフリードの話には至らなかった。

アルお兄様はお粥をすすりながらニニアンとの生活についてあれこれ教えてくれた。

ニニアンと出会った時のこと。ニニアンとこの森に移り住んだこと。夜中にモンスターに家を囲まれ戦ったこと。

父上のお願いは『アルお兄様がどんな生活を送っているのかを調べる、うまくいってないようなら王宮へ戻るよう説得する』という事だったがこの2人にはこの場所以外に本当の意味での家は無いように思えた。

あれやこれやを語る2人は将来の不安など全くない、今を生きる人の顔をしていたからだ。

そんな2人を羨ましく思い、話に混じって楽しみ、ニニアンのお粥をみんなで頂いて舌鼓を打ち、しばらくするとニニアンは眠りについてしまった。

なんでもアルお兄様によると『ご飯を食べた後暖炉の前で寝るのはよくあること』らしい。

だがこれは好都合。私が話の続きを頼むとお兄様は部屋を移って話始めた。

「ニニアンはしばらくはあのままだけどさっさと話そうか。どこまで話したっけ？」

「禁断魔法の正確な意味についてからです」

「ああ、そうだったな。禁断魔法は『生命を変革する魔法』ってとこまで話したね。えっと、禁断魔法は一般的には使用者にリスクを負わせる強力な魔法だと言われているけど、禁断魔法の中には使用者がノーリスクで使える魔法もあるんだ」

「そうなんですか？ そんな話はどの本にも載ってなかったんですけど」

「きつとそういう書き方の方が手を出しにくいからだと思う。ノースクで使える魔法があるって知ったら手を出す人も出てくるだろうから。ただノースクで使えると言ってもそれは最初だけ。回数を重ねればリスクは例外なく出てくる。だから禁断魔法なんだ。そんな魔法を平気で使うのがヤツら、フリードなんだけどね」

「そのって一体何なんですか？ 具体的にどうやって世界を滅ぼそうとしてるんですか？」

「……こうなったら仕方ない。いずれ知ることになるだろうから俺の口から全て教えてやる。今世界は4つの大国が覇権を争う状況にあるが昔は5つあった。ここまでは知ってるな？」

「ええ、その内2つが合体したのがエスペリアですね」

「実は世界には5つの封印された神殿があるんだ。ヤツらはそれを解くことによって世界のバランスを崩そうとしている。そしてその封印の内の1つ、リージアの神殿はすでに封印が解かれた。俺の仲間の連絡によるとお前の仲間がエスペリアの封印を守ったらしいがな」

「え？ 仲間というと……あ！」

お兄様の言葉に朝早くに帰って来たカイル達を思い浮かべる。だからあんな傷を負って疲れきった顔をしていたのかと思うと呑気に寝ていたのがとても恥ずかしい。

そしてお兄様はそのまま話を続ける。

「でだ。具体的に封印が解かれると何が起こるのか、それはまだ分かっていない。ただ世界が崩れる程の大事が起きる、としか言えないんだ。そしてここからがお前に一番聞かせたい内容になる。封印を解き放つのに、それを再び閉じるのにも大量の魔力が必要になるんだ。ここまで言えばもう分かるな？」

「それが並外れた魔力を持つ私の出来ること、ですね」

「そうだ。エスペリアの封印は二ヶ所だが一ヶ所はまだ見つからない。とりあえず一つは三段深林の最奥にある。そこへ行って、封印の中身を見てこい」

「でも封印を解かないとそんな事は出来ないんじゃないんですか？」

「それには心配は要らない。いくらお前でも1人で解き放つには禁断魔法でも使わないと無理だ。半解放ならすぐにまた閉じれるってこと」

「そういうことだったんですね。わかりました、王宮へ戻ったらそこへ向かいましょう」

「うん。そうしてくれるとありがたい。これで俺の知ってる事は全て教えた。ここは寒いし暖炉に戻るぞ」

「最後にひとつだけ、お兄様は……」

「ん？俺がどうした？」

「：いえ、何でもありません」

「なんだよ気持ち悪い奴だな。ほら、さっさと立て」

お兄様のあとに続き暖炉へ向かう。

今のお兄様の話、ひとつだけ聞いていない話がある。

それは『お兄様とその仲間が何を目的にしているのか』だ。

後ろから眺めるお兄様の背中はまだで見知らぬ人の背中を借りてきたように映り、これからどうなるのかという不安だけが私を包んでいた。

「もう行くのか？彼のケガもあるしゆっくりしていけばいいのに」

夕暮れにさしかかり雨が止み、私はアルお兄様とニニアンに王都へ帰る旨を伝えた。

ロイドはまだ動ける状態じゃ無いので心配だがそうも言ってられない。

「ゆっくり、すればいい」

「：2人の気持ちはありますがたいんですが私は戻らなければいけない。そんな気がするんです」

もちろんフリードの事もあるがこれは直感みたいなものだ。

私の言葉を聞いて2人は何やら相談を始めた。

そして次に発せられた言葉に私は驚いた。

「よし、じゃあ俺とニニアンも行くとしようか。久しぶりに父上に会うのもいいだろう」

「え？そこまでしてもらわなくても…」

「メイメル、1人は危ない。私達と一緒に行くべき」

「じゃあロイドはどうするんですか？」

「彼も連れて行くさ。どちらにしろ王宮の方がいいだろう？傷口は治癒魔法で何とかなるしね。それに」

「それに？」

「結婚の報告も済ませたいからね」

そう言ってニニアンの肩を抱くアルお兄様はニヤリと笑った。

## 第十二話 起床のち行動

外はまだ暗い。丸一日寝ていたせいか体が固く、起き上がろうとすると右肩の傷がそれを邪魔する。

腹が減ったものの時計を見ると水の刻に差し掛かるかというところで、それはすなわち飯を作ってくれる人が居ないという事を指し示す。

「つてーな：結構深くいつちまってるし」

右肩の傷が開かないよう気をつけながら体を起こす。

こっちに来て初めて苦戦を強いられた。ゼノンとエルナ、世界を滅ぼそうとする2人。

あの下っ端らしきウザモンキーでさえ多勢に無勢で戦ったから勝てた相手だ。

エルナとゼノンは本気を出すとどの位強いのだろうか？

「師匠くらい強いかなあ：師匠は廃人で200レベルのキャラ3体持ってたけど」

一回師匠のキャラ借りて戦った時は爽快感がハンパなかった。カイルでは歯が立たなかった相手が一撃だもんよ。

「起きたはいいが、する事ねえな。全然眠くないし」

ぶっちゃけ24時間寝たら誰だって眠くないだろう。魔法の効果とはいえつらい話だ。

俺は外を歩けば誰か居るだろうという安直な考えでベッドから起き上がった。

俺が目を覚ましたならきつとスイ、シンシア、メイルも起きてるだろうし。

「よっ…と。アテテテ」

そろりそろり階段を降りる。肩が痛くてまともに歩けないな。……  
…よし、降りきれた

階段を降りきったということ今ここは1階。選択肢は次の通りだ。

1. シンシアに会いに行く
2. 誰か王宮の警備兵を探す
3. 適当にぶらぶらする

スイとメイルは残念ながら1階では無いので今回は断念。

1. シンシアに会いに行く  
行ってどーする。特に話すことも無ければあのテンションも嫌なので却下。

## 2. 誰か王宮の警備兵を探す

これは一見良さげに見える。あわよくば飯にありつける可能性を秘めたい選択肢だ。

だが、本当にそうだろうか？

もしかしたら俺の傷を見て騒がれるかもしれない。はたまた部屋へ連れ戻される可能性も否定しきれない。

となると最後に残ったひとつ。適当にぶらぶらするが最善手であるはずだ。

俺は右へ4分の1回転して直進する事にした。

まず最初に見えるのは兵士達の寄りどころ、食堂だ。

このハンバークは絶品とのことで昼休憩が始まってからはや10分程で完売という驚異的記録を持つ。もちろん俺も食べた事はない。いつも居残りを余儀なくされた兵士の面倒を見ているからだ。

「……………うあ」

そんな事を考えていると腹が余計減ってしまった。このままいくと二つ折りに出来そうなくらいの腹ぺこ具合だ。おのれ食堂、卑怯なり！

次に見えるのは俺がよく訓練している中庭だ。

そういえばこの間ここでメイメルのサンドイッチをご馳走になったな。

あーんされた時は焦ったが、まあ冗談だろうと思い断った。残念そうな顔をしていたのはきつと俺のうろたえる顔が見たかったからなんだろう。

あのサンドイッチおいしかったなあ……………。

(グ)

「……………」

お腹減ったなあ…

こういう時って余計に飯の事を考えてしまうものだよな。

こうなったら肩の痛みを我慢して狩りにでも行こうかと考えている  
と何やら前の方で光が見えた。

「あそこは確か…図書室？」

なんで図書室が光ってんだ？誰かがライトの魔法を使っているのか？  
光の正体を知るため。俺は全速力で図書室へ向かった。

アテテテ…

図書室に入るのは王宮に来て間もない頃、王宮と城下町を探検した  
時以来だ。

メイメルによるとこの図書室はあまり蔵書数が多くなく、城下町  
にある図書館では扱いきれない重要文献などが貯蔵されているらし  
い。

つまり、この図書室にこっそり侵入するヤツはその重要文献を狙う



ヤツだけだ。

俺は図書室の入り口に忍び足で近寄り中をうかがう。

だが、その光はライトの魔法によるものでは無いようだ。なぜなら光は移動する事なく（普通、ライトの魔法は使用者について行く）地面付近で輝きを放っているからだ。

ライトなら地面で光る訳ないからな（使用者が這いつくばってるなら別だが図書室で這いつくばるヤツなんていないだろう）

俺はそーっと肩が痛まないように扉を開けた。

.....

（ん？誰も居ないな）

どうやら俺の予想通りライトの魔法では無かったようだ。  
意を決して中へ入る。

光っていたのはなんと一冊の本だった。

直視出来ないくらいの光を放つそれは俺が手に取ると突然光を失ってしまい戸惑う。

「これ何のほ…」

そこまで言ったところで口を止める。

これはこの間来たときに見つけた何も書いてなかった本だ。

「なぜこの本が？」

.....って、え？」

ページを捲って驚いた。何と前回何も書いてなかった本に文字が書いてあったのだ。

751年 リージアの封印が解かれる

と

「ど、どういことだ？」

さらにページを捲る。しばらく白紙のページが続き、もう終わるかというところで再び文字を見つける。

734年 エスペリアに神の子が生まれる

751年 神の子 運命に導かれ己が指命を知る

「神の子？」

また何やらややこしそうな臭いがするな。

とりあえずその神の子とやらは無視してページを捲る。

最後のページにはこの世界の地図だろうか？何やら地図に赤い点が4つ、黒い点が1つ、ここルインの辺りとその少し上に青い点が淡く光っている。

黒い点はリージアに、赤い点は地図上にばらけているところを見てページを戻す。

751年 リージアの封印が解かれる

間違いない。この黒い点は封印が解かれたリージアの神殿。ならば赤い点は残りの神殿ということになる。

では青い点は？

現時点では想像もつかないがこの本は大切に持っておくべきだろう。俺はこの本を左手に持って図書室を出た。

図書室から出ると少し外が明るくなっていた。どうやら水の刻も終わりが近いらしい。

「アテテテ：ちよつと動きすぎたかな：」

腹は減ったまんまだし帰っても眠れそうにないのは変わらない。でももしかしたら食堂のおばちゃんがそろそろ用意しているかもしれないな：もう一回食堂へ行こう。そうしよう。

冷静に考えればただの希望的観測であるが俺は迷わず足を動かす。すると食堂から煙が上がってるのが見えた！

俺は神と食堂のおばちゃんに感謝しつつ食堂でパンを貰ったのだった。

火の刻になった。

新兵達が試験に行つて2日目になり（俺達の体感時間は間違いなく2日より長いが）まずベアーウルフの討伐へ向かっていた五班が帰ってきた。

その後一、三、七班と計十班、70人が火の刻中に帰つて来て、久しぶりに宿舎が賑わいを見せ全員俺の傷を見て詰め寄ってくる。

「カイルさんその傷どうしたんですか!？」

「うん？まあちょっとへマしただけだ。油断大敵ってこつた」

はっはっはと笑い飛ばしてみる。

「全くもう、カイルさんはエスペリアの主力なんですから体は大事にしてくださいよ」

「じゃあお前らが強くなって守ってくれよ。いつまでも俺に頼つてたらダメだぞキース」

五班隊長のキースをからかいながら俺は無事を喜んでいた。  
無事で何よりってやつかな。まあ俺が無事じゃ無いけどさ。

「ところで他の班はどうした？ラルクがまだ帰って来てないみたいだが」

「ああ、なんでもゴブリンが思った以上に居たらしいです。王宮に戻る時、ラルク達が行ってる村の近くを通ったんですけどその時そう言っていました」

「へえ。ハズレクジだったんだな。まあゴブリン相手なら無茶なけりゃ深手は負わないだろうし大丈夫か。

えー、お前らは今日1日自由行動だ。貰った報酬はお前らの好きに使っていいと王が言ってたから城下町にでも行ってこい」

「「はい!」「」」

「こういう時だけは返事がいいなお前ら！」

俺の突っ込みに笑いが巻き起こる。

報酬を何に使うかあれこれ考えているのを見てるとまるで子供みたいだな。

まあ明日からはきびきび働いてもらうか。

そんな感じでワイワイやっていると見慣れた賢者が寝癖だらけでやってきた。

相変わらずだらしのないヤツだと呆れていると新兵達がざわつき始める。

「よう。いやーこんなに寝たのは3日寝てなかったあん時以来だなーって何この集まり」

「3日寝てなかったっていうとあの悪夢の三日間か？」

「そーそー、あん時はもー死ぬかと思ったぜ。でこいつらは？」

「こいつらはエスペリアの新兵達だよ。今日最終試験から帰って来て来週にも正規兵になる」

「へえ。じゃあ俺の下にも何人かくるのか？なんか偉くなった気分だぜ！」

「いや、お前は魔導軍の中でも下っ端扱いだから」

「なん…だと…」

「なんか久しぶりに聞いたよそれ」

俺とシンシアが盛り上がる中新兵達から流れる誰だお前的雰囲気ハンパないので軽く説明しとこうか。

「あーお前ら、こいつはシンシア。一応俺が昔所属してたチームの仲間だ。お前レベルなんぼだっけ？」

「67の賢者だよ」

ザワ…ザワ…

「えーという訳で魔導軍に所属してるシンシアだ。みんな仲良くやつてくれ」

「よろしく頼む」

新兵達はややあってまばらな拍車を送った。

俺としては性別の説明もしておくべきかとも思ったが面白そうな事になりそうなので言わないでおくことにした。



後日シンシアに言い寄った男が真実を知り一晩涙を流したとか…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9101v/>

---

元一般人の勇者は世界を救う

2011年12月5日09時04分発行